
もしシロナの幼なじみが一緒にポケモン専門の学園に入ったら。

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしシロナの幼なじみが一緒にポケモン専門の学園に入ったら。

【Nコード】

N4928V

【作者名】

ライガ

【あらすじ】

シロナとシロナの幼なじみが同じ学園でイチヤイチャラブラブするお話……にするはずがどうしてこうなった。ほとんどギャグです。たまにバトル、ときどき真面目。学園ものって終わり方わかんないよパトラッシュ……。読んで感想くれると嬉しいです。よろしくお願いします！

ぶろろーぐ（前書き）

では、ごうげん。

ぶろろーぐ

「クロマ、あたしとバトルしなさい！」

外からの日光が差し込む学園の廊下、その光を反射する眼前の金髪が眩しい女子——シロナにビシッ！という効果音がつきそうな勢いで指を突き付けられ、そう宣言された。黒一色に統一された改造制服を着ている彼女は、その外見と名前から『最も名前負けしている生徒』という二つ名があったりする。

シロナは友達だ。というか、幼い頃、物心がついたときからずっと隣にいた気さえする。そういえば結婚の約束もしたっけ……。だが、シロナはそんな昔のことなど覚えてはいないだろう。それも仕方ないことだ。過去は忘れ去られていく。当然のことと頭が理解していても、どうしても悲しい気持ちになってしまう。

「……残念だよ、シロナ。幼なじみである俺とお前が争うことになるなんて……」

「その汚名、今すぐ返上してやりたいけどね……！」

シロナの白くきめ細かそうな頬が赤く染まる。うん……これ絶対怒

つてる。照れてるのかなーとも思ったが、俺を視線で殺さんばかりに睨みつけてくるあたり、その可能性はありえないだろう。やめて！俺の防御力はもう0よ！

「アンタ、あたしが影でなんて呼ばれてるか知ってる……？」

「？『黒姫』（シュバルティーナ）だろ？」

ちなみにこれは本当の話だ。誰がつけたか知らないけど、シロナにはそんな二つ名もある。

学園四天王。この学園の優等生に贈呈される称号であり、シロナはその1人だ。それゆえに、他の生徒からは畏怖と尊敬の念を込められた二つ名、『黒姫』（シュバルティーナ）という名を冠している。いいなー二つ名。なんかかつこよくない？俺も欲しいな！。でも目立ちたくねえや。……今さらだけど。いや、それよりも……どこか不満な点でもあるのか？

「それは表の方でしょ！影でなんて言われてるかって聞いてんのよ！か・げ・で！！」

「？『最も名前負けしている生徒』だろ？」

「その発信源も知ってるわよね……？」

発信源って……噂の出所なんてわかるもんなのか？それよりも腹減ったな。今日は久しぶりに学食で昼メシにしようかな。最後に学食に行ったのは……確かクラスメートに付き添ったときだっけ。

『んぐんぐ……たまには学食もいいな』

『おい、それよりクロマ。シロナさんとの関係について教えるよ。神サマ仏サマ大魔王サマに誓って！……付き合ってるワケじゃないんだな？』

『……だから、俺とシロナはそんなじゃないっての。ただの幼なじみだって。それにシロナってさ』

『ん？シロナ様がどうした？』

『せめて呼び方統一しようぜ。いつも黒い服着てるのにシロナって……バトルで勝っても名前で負けてるよな』

『うまいっ！座布団1枚イ！』

『いらんわ。食事中だから。すげー邪魔だから今の状況』

……

「あ、俺じゃん」

「やっぱりアンタだったのね……！そのせいで知らない生徒から『黒以外は着ないんですか？』『ポリシーなんですか？』『キャラ作り？』とか言われたんだからっ！」

リアクションに困ったシロナが目には浮かぶようだ。てかその生徒勇者だろ。

「なら黒以外の服着ればいいんじゃない？マジでキャラ作り？」

「そんなワケないでしょっ！アンタが昔『黒が似合うね』って言ったからじゃないっ！」

……記憶にない。過去は忘れ去られていくものだよね。てへぺろ。

「大体なによFクラスって！最低クラスじゃない！しかも探偵科所インケスタ属ってアンタジュンサーさんみたいなキャラじゃないでしょーが！
！」

『！』マーク好きだなこいつ。

「当たり前だ。人間ってヤツは楽な方向に寄っていくもんだ」

「ドヤ顔で語ってんじゃないわよっ!! アンタの場合だと楽しなくて『墮落』でしょーが!!」

「うまい!……いやそこまでうまくねえわ」

「と・に・か・く!今日の放課後、あたしとバトルしなさい!いいわねっ!?!」

……今回ばかりはわりと本気のようなのだ。

「……仕方がない。やってやろうじゃねえか。だが、1つだけ言っておく」

「なによ?」

「負けるつもりはサラサラない。決死の覚悟で来ないと……緩んだ足元掬ってやんよ」

「……上等よ。放課後に第2アリーナ。忘れんじゃないわよ」

「ああ。目にももの見せてやるよ」

幼なじみとの火花散る熱い頂上決戦。俺たちは互いに背を向け、来たるべき決戦に備えるためにその場を後にするのだった。

そんな決戦をアツサリ忘れ去り、俺は自分の寮へと帰っていった。

もし自分に二つ名がつけられるなら『コダック頭』くらい言われることだろう。

「おっし、バッジ5つ目」

日が暮れた寮の一室で、ゲーム機片手にガッツポーズをしている俺が、シロナとの約束を思い出すのはもう少し先の話だった。

クルメア学園。ポケモン関連の最先端を突っ走る広大な教育機関。名門中の名門校として世間に知られ、毎年数多くのエリートトレーナーや研究者を輩出している。世界初の中高一貫の全6年制、ならびに設備差別化制度を採用しており、世界中のスポットライトが当てられている学園であり、俺とシロナが寮住まいで通っている学園……それがここ、クルメア学園だ。この学園には他のトレーナーズスクールと比べ、大きく分けて3つの特徴がある。

まず1つ目、1番わかりやすい、その規模。さきほど言ったように、クルメア学園はポケモン関連の最先端に位置する名門校だ。必然的にこの学園に入りたがる生徒も増え、尋常ではないほどの数となる。その全ての生徒を勉強に励ますことができるほどの教室の数がある校舎、全生徒を詰め込める広さを持つ体育館、ポケモン関連の本を大量に揃えた巨大図書塔、バトルのためだけに建造されたアリーナ各種などなど。もちろんそれだけではない。世界各地から生徒が集まってくるのならば、その寝床も必要になる。そのための寮も学園の敷地内にそびえ立っている。今挙げた建造物が、全てこの学園の敷地内にあると言えば、その広さは想像するに難くないはずだ。

2つ目に、街との同化が挙げられる。元々は緑が自慢だけの田舎だったここクルメアタウン。だが、このクルメア学園が高台に建設されて以来、大きなビルや商店街などの発展が進み、上空から見ると森に囲まれた自然要塞のような姿になっている。今では名前も改

称され、新しい名前にもなっていたりするのだが。言いたいことを要約すると、この学園が建てられたせいで発展が進んだため、学園の発言権がかなりのもの、ということだ。ゆえに街との同化、というワケである。

最後の3つ目……他のトレーナーズスクールと明らかに異なる、その校風。午前中は至って普通の授業だが、午後になるとその空気はガラリと変貌する。生徒は必ず『学科』と呼ばれるカリキュラムを受けなければならない、午後からはその実習、または研究が主軸となる。学科の数は全部で9つ。それぞれ、

アサルト
強襲科
バトナー
自然保護科
タイオ
研鑽科
インゲスタ
探偵科
アンビュラス
救護科
インフォルマ
情報科
エクレシア
飾麗科
インヴェンテ
技術開発科
クリッター
育成科

と、様々な分野で活躍ができるラインナップが勢揃いしている。この学科というものは将来の職業に大きく関わってくるもので、

強襲科↓四天王やジムリーダー
自然保護科↓レンジャー
研鑽科↓研究者
探偵科↓ジュンサーさん
救護科↓ジョーイさん

情報科↓ジャーナリスト
飾麗科↓トップアイドル
技術開発科↓道具開発者
育成科↓ブリーダー

……と、将来が大きく変わってくるワケだ。

さらに各教室にも特徴があり、生徒たちはそれぞれの学科の成績でA～Fのクラスにわけられる。高成績ならAに、低成績ならFに割り振られ、Aクラスに近づくほど設備が向上され、リクライニングシートや個人冷蔵庫などが設けられている。これが設備差別化制度だ。この3つ目の特徴の例を俺で挙げるなら、俺は探偵科のFクラス。設備はちゃぶ台に座布団に畳。さすがに差別しすぎだろ。まあ寮は平等だし畳好きだから別にいいんだけど。そして特例であるシロナ。シロナは研鑽科……Sクラスに所属している。Sクラス、つまり四天王の『S』であり、この選ばれた4人にはどこの教室で授業を受けてもいいなどの、ある程度の自由が与えられている代わりに学園側からいろいろと面倒な仕事任せられ、善良な生徒からは憧れの、不良な生徒からは恐れられの眼差しを集めている。まあ俺自身はめんどくさそうだなーくらいにしか思っていないけど。なりたいたとも思わなかった。

緑化都市、クルメアシティ。俺がこの学園に、街に来て約1年半。この学園の広さによろしく慣れ始めた頃。

俺の日常は平凡そのもので、シロナたちとそれなりに楽しくやれていた。少なくとも、俺はそう思っていた。

だが、変化とは常に訪れるものだ。

そして、俺は変化を求めた。

たとえ最悪の変化でも。たとえ破滅の変化でも。たとえ堕落の変化でも。

俺たち人間は、変わらずにはいられないのだから。

vol.1 くらいかこ(前書き)

感想待ってます

秋、ということ、学園のサファリパークから虫ポケの大合唱が聴こえてくる夜中。男子寮の俺の部屋の壁の時計は8時を指している。言うまでもなく外は真っ暗で、学園の広さと周囲の暗さから外を歩くのは結構危険だ。

「準備オツケー。んじゃ行きますか」

だと言うのに俺は外に出るところか学園の外、クルメアシティの外壁の意味を含む森に出かける気満々だった。けどちゃんと理由がある。同じ部屋で生活している同級生……というか親友が帰ってきていないのだ。どうせ朝言ってた洞窟にいるんだろう。世話の焼けるヤツだ。

トントン、とつま先を地面に打ち付けてシューズをしっかりと装備する。そんじゃ、ミッション開始といきましょうかね。

「確かこの洞窟だったよな……」
「まったく、引きこもるにしても場所選べってーの」

目の前に広がる真っ暗な洞窟。たぶんアイツが言ってたのはここのはずだ。まさしく自然が造り出した洞窟。手付かずで残っているせいか、電球といった類の明かりがないせいでリアル真っ暗だ。つーか真っ黒だ。《フラッシュ》がないと進めないだろう。ガサゴソとごみ箱を漁るように腰に据え付けたホルダーを物色し、目当てのポケモンが入ったボールを取り出す。

「コリンク、珍しく出番だぞ」

そのまま足元に放つて中のポケモンを呼び出す。え？ 決めポーズ？ 人っ子1人いない、観客が木だけ、森の木がデカすぎて月のスポットライトすら当たらないというこの状況でテンション上げて決めポーズを決めて決めゼリフを叫びながらボールを投げると？ まだ俺は正気を保ってるつもりです。

投げたボールが開き、稲妻みたいな粒子っぽい光が溢れ、コリンクの形を取る。毎度思うんだけどこれどういう理屈なんだろうなあ……
……気にしちゃ負けな気もするけど。腕を組んで考えていると、不意に目の前が明るくなり、暗さに慣れた目が眩む。

「っと、サンキューコリンク。んじゃ出発だ」

先行するコリンクについていく。暗い洞窟でもポケモンがいればなんのその。俺とコリンクは意気揚々と闇が広がる洞窟の中へ進んでいった。

トウコク森林地帯。クルメアシティを囲むように広がっていて、真昼間でも巨大な木が太陽の光を遮り、かなり薄暗いという迷いの森だ。夜になると文字通り真っ暗で、クルメア学園のともす時計灯台がなければ迷う確率は8割を軽く超えるだろう。この森林地帯は中心部とは異なり、手付かずのまま残されていて、湖や鍾乳洞窟などが点在している。よってポケモンも豊富。それどころか珍しいポケモンだっている。……ここに来ると、昔の記憶がじわりと思い起こされる。からっぽだった、昔の記憶が。

シンオウ地方、ハクタイシティ。その比較的都会な街のマンションで、俺は生まれた。何の変哲のない子ども。何の障害もない俺は、貧乏どころかかなり裕福な両親の元に生まれた。両親は二人揃って

研究者で、帰りが遅いことはそこそこ、家に帰ってこない日がほとんどだった。そのおかげで多大な財産を持っていたが、一軒家を建てることはなかった。おそらく、薬品と機械に包まれた環境の中、他人との交流を求めているのだろう。優しく、尊敬も自慢もできる両親だった。

そんな「普通」の両親から生まれた俺は「普通」ではなかった。優しい両親とは真逆に、俺は他人との交流を嫌った。そこそ独り立ちができた頃……いや、それよりもっと幼い頃から、俺は近くにあったハクタイの森に通い詰めるようになった。俺の世話をしてくれていた隣のおばさんは心配していたが、子どもだった俺はそんなこと気にも留めなかった。入口付近や整備されている場所にはトレーナーがいる。俺は人の寄りつかない森の奥地で、何をする訳でもなくただ存在していた。遊ぶ友達も、話す相手もいなかった。森のポケモンは俺に興味を示すこともなかった。それ以前に、俺自身がポケモンに興味を示さなかったのだ。

……それは、とても悲しいことだと思う。ただ無駄な時間が流れ、からっぽの空間で過ごしていた、あの場所とこの森林地帯はそっくりだ。

そんな時間は、2年に渡って続いた。森は庭のように熟知できたが、森と友達になることはなかった。当然だ。その時期にはすでに、人はおろか友達という言葉にすら興味を失っていたのだから。来る日も来る日も整えられていない草むらの上に横になり、眠かったら眠り、そうじゃなかったらただぼーっとする。そんな毎日が、日常が、俺のすべてだった。

その日は、辺りが暗くなるまで寝てしまっていた。目が覚めると、誰かの声が聴こえた。いや、泣き声というべきか……くすん、くす

ん、という鼻をすすするような音だった。音源を探すと……彼女は、目で見える距離の場所で座り込んでいた。

その場所は木や茂みなどの遮蔽物がなく、月の光が彼女を照らしていた。月光を反射する金色の髪が輝き、白い肌と白いワンピースとのコントラストが鮮やかな女の子だった。

くらく、すさんだせかい。その中で、彼女がいる場所だけは、せかいは、明るく光輝いていた。それを見た当時の俺は……なんと思っただろう？ 気づけば立ち上がり、その彼女がいるせかいに向かって歩き出していた。光にはない。彼女に惹かれたんだ。

彼女のせかいに入った途端、その泣き腫らした顔を上げた。最初こそ怯えの色がほとんどだったが、俺が子どもということもあってか、すぐに警戒を解き、純粋な疑問の表情になった。

それらすべてが新鮮だった。他人を嫌い、馴れ合うことを避けた俺にとっては。彼女のすべてが眩しく見えた。

そして、彼女は救ってくれたんだ。

『きみは、だれ？』

どうしようもなく灰色だった俺を……救ってくれたんだ。

「……どこまで進んだんだ？」

洞窟に入ってから30分弱といったところか？多少の小道はあるもののほとんど一本道の洞窟を歩いてきたが、件の人物が全然見つからない。ホントどこまで奥に行っただ……探してるこっちの身にもなれってんだ。

コリンクの放つ《フラッシュ》のおかげで洞窟の中は真っ暗、というほどでもなかった。地盤に水脈でもあるのか、あちこちに湧いている地下水が光を反射して壁一面にオーロラのような幻想的な絵画が描かれる。地下水はとも澄み渡っていて、飲み水として飲んで大丈夫そうだ。水辺に棲む水棲のポケモンが透けて見える様子は、見る者の心を引き付けるなにかを持っているような感じがする。しかし、地下水のせいかわからないけど奥に進むにつれて気温が低くなっていく気がするな……。

「くしゅんっ！う……やべ、早く見つけて帰らないと……ん？」

地下水から目を離して前を向いたとき、なにか……茶色のなにかが光の端に映ったような気がした。なんだ？と思いつつ、コリンクに

茶色い物体がいた方向に光を当ててもらおうと、

「わさわさ」

「こいつ……ウリムーか」

俺の今の記憶が正しければ、確か寒冷地に生息してるこおりタイプのポケモンだったはずだけど……そこまで気温が下がっている、ということだろうか。うかうかしていると風邪をこじらせるかもしれない。

「ほら、親の元に帰れ」

「わさわさ……」

珍しいヤツもいたもんだな……学園のコレクターどもならヨダレを垂らして喜ぶだろうが、今回の俺の目的は人探しだ。早く見つけてさっさと帰ろうと思って歩調を早めた、そのとき。

どすっ、どすっ。

「うおっ！？」

横穴からなにか……なにか……なんだこいつ……。

「むふーっ、むふーっ」

そいつはかなりデカかった。茶色くてゴワゴワした体毛、2本の白くて太長く（太長く？）雄々しい牙にヘンテコなマスクのような顔……あ。

「そうだ……マンムーだ……」

「むふんふんっ、むふんふんっ」

すんすん、と俺たちを警戒してかにおいを嗅いでくるマンムー。コリンクもそのあまりのデカさに硬直している。これ……結構ピンチ？そつえばマンムーの顔の部分ってどっかのプロレスの選手に似てるんだよなー。確かマックス飯面だっけ？まだ現役続けてんのかなーあの人。……いや現実逃避してる場合じゃないよこれ。ヤバイヤバイよどうするよ俺エ……。

少しパニックに陥ったが、例のマンムーは俺から興味を失ったのか、その巨体を翻して洞窟の奥へ去っていった。

「……………マンムー？」

……いや、深く追究するのはよそう……。気を取り直して奥に進もうとしたとき。奥から金属音が聞こえてきた。

キーン……キーン……

「ん……近いな」

前に進むごとにその甲高い音が大きくなる。そして、ようやく目的の人物を見つけ、呆れを含んだ声で呼んだ。

「——ダイゴ！」

こっちを向いた優男風のイケメン顔はホコリかぶっていて、スーツのような改造制服もかなり汚れている。あーあー……洗うとき大変だぞ。だが、そんなことは割とどうでもいいことなのか、ピッケルを持った片手を上げ、こちらに向かって歩いてきた。やはりこの洞窟に来た目的はポケモンではなく趣味の石集めだったらしい。

「クロマ！どうしたんだい？こんなところで」

「どうしたもこうしたも……今何時だと思ってるんだ？」

「え？授業が終わったのが3時だったから……4時半くらいじゃないのかい？」

「お前の体内時計はどうなってるんだ……もう9時だったの」

4時間と半分の時差が生じていた。

ダイゴ。強襲科の頂点に君臨している四天王の一角であり、『銀帝』（シルバリオン）の二つ名を持っている。最近急激な成長を遂げていると聞くツワブキコーポレーションの御曹子らしいが、工作科ではなく強襲科に所属している。その理由はダイゴ曰く、

『珍しい石がある場所に強い野生ポケモンがいたら困るじゃないからしい。どんだけ石が好きなんだ……』

ダイゴ。他には……ああ、俺と寮の部屋を同じくしている同居人、かつ親友でもある。探偵科Fランクの俺と強襲科Sランクのダイゴが親友同士……周りから見たらどう映るんだろうな。

「この洞窟は資源が豊富らしくてね。つい熱中してしまったみたいだ」

そう言って古ぼけた巾着の中身を見せてくる。えーっと……みずの

いしかみなりのいしほのおのいしリーフのいしつきのいしかわらずのいしあついいわつめたいいわこんごうたましらたまやみのいしひかりのいしめざめいし……って待てや。こんごうたまってダイヤモンドだよな？なんなのこいつの家系。金運の女神でも取り憑いてるんじゃないだろうな。

「それでクロマ、どうしてここに？もしかして、バトルがしたかったとか？」

「……違うつて。なかなか帰ってこないから心配してたんだ。ほら、早く帰るぞ」

そう急かしてもダイゴは動く気配がない。まさかまだ掘り続けたいとか言うんじゃないだろうな……。

「なら……今ここでバトルを申し込んで構わないか？」

ざわり、と洞窟内の空気が変わる。なんと張り詰めた雰囲気とダイゴの間に漂う。構わないか？と聞いた割にはやる気満々なダイゴ。当然だ。俺に拒否権はないのだから。

クルメア学園にはいろいろな制約があるが、その中に『申し込まれた勝負を断つてはいけない』というものがある。つまり、バトルを申し込まれた者は強制的にバトルをさせられるのだ。

だが、それでは不平等なため、申し込まれた側の者はバトル形式の決定権が与えられる。ようするに自分の得意な形式でできるのだ。そのため、バトルを申し込む側の人間と申し込まれた側の人間のアドバンテージが平等になっている。まあ迷惑な制約に変わりはないんだけど。

グレーの髪から覗く双眸が俺をまっすぐに見据える。……なんだろう、なんかデジャヴが……あ。

『……上等よ。放課後に第2アリーナ。忘れんじゃないわよ』

シロナとの約束……

……まあいいか。てへっ

「さあ、形式を決めてくれ」

気づくと、ダイゴが改造制服の腰に差しているホルダーからボールを取り出している。そう焦んたって……

「別にやってもいいけど、俺の今の手持ち、こいつだけなんだけど。それでもやるつもり、じゃあないよな？」

コリンクを指で指しながらそう説得する。確かに拒否権はないが、それでも相手の戦意を削ぐなどの回避策はあるものだ。ダイゴやシロナがしたいのは本気のバトル。案の定、ダイゴはため息をついてボールを戻した。

「仕方ないな……いつでもフルメンバーは揃えておくものだよ」

「人探しにガチパ揃えないっての」

ちなみに俺がこの学園に入学して1年半が過ぎたが、シロナたち以外からバトルを申し込まれたことは……死ぬほどあった。いやー、あれはさすがにビビった。すごいねシロナのヤツ。ファンクラブあるんだってさ。なんでも、

『我らはシロナ様をお護りする白騎士。貴様を女神に代わって鉄槌下す！』

とかすげえイタイことほざきながら徒党組んでバトルを申し込まれたときは引いた。全力で引いた。まあそのときは隣にいたシロナがロズレイドに《リーフストーム》撃たせてたけど。『あ、貴女を護るためでげぶるあっ！』とか言いながら白騎士（笑）連中が吹き飛んだときは腹筋が崩壊すると思ったなあー。それっきりバトルの方も申し込まれなくなっただし。ダイゴたちに申し込まれてもなんやかんやでこまかしていた。

正直、バトルは好きじゃない。ポケモンたちが傷つくと心がえぐられる感触がしちゃう……みたいな偽善者っぽい理屈じゃないけど。でも、明日はそうも言ってられないだろうなあ……シロナ、キレてるかなあ……？キレてるだろうなあ……。

「よし、それじゃあ帰ろうか？」

あたし、今日は帰りたくないの……とは言えず（言いたくもないわ）、ダイゴとコリンクの後ろをトボトボと歩き、俺たちの学園に引き返すのだった。

vol. 1 くらい かく（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。次回もよろしく願います。

vol. 2 やくそく(前書き)

楽しんでいただければ幸いです。

ダイゴを連れ、無事学園に到着し、寮に戻る。部屋でシャワーを浴びている内に夜はさらに深まり、時計は11時を指していた。中学生が起きているには結構遅い方だろう。

「それじゃあ、先に休ませてもらうよ。クロマ、今日はすまなかったね。ありがとう」

「気にしなさんな。俺はちょっと明日の準備してつから、気にしないで寝ていいぞ」

「そうさせてもらうよ。おやすみ、クロマ」

おやすみ、と返して部屋の電気を消す。残った明かりは2つのベッドに挟まれるように備えられているナイトスタンドのぼんやりとした光だけだ。俺はベッドの上で、6つのボールを前に腕を組んで唸っていた。というか悩んでいた。

（……シロナ、やっぱり絶対キレてるよな。やっぱり1匹くらい連れてくべきかな……）

明日、シロナとのバトルは回避できないだろう。俺にできることといえば、せめてガチポケで抵抗するくらいだ。

ベッドの上に転がるボールの1つをテキストに掴み、ホルダーの中にしまう。いつもとは違う意味で騒がしくなりそうな明日に、俺はため息をついた。

俺がバトルを忌避する理由はとても簡単だ。単純に危険だからだ。自分のポケモンではなく、自分自身が危険だからだ。バトルという行為自体、爆弾を抱えるようなものだ。俺の体質は本気のバトルにアクセルをかける。それはあまり人に知られてはいけないのだ。故に本気のバトルは今まで避けてきた。明日もバトルに持ち込まれても手加減することになるだろう……再びため息をつき、ネガティブな思考を打ち切るためにベッドに潜ろうとした、その時。急にナイトスタンドの光が消え、俺の手首がものすごい力で引っ張られた。

「……………えっ?」

思わずベッドに倒れ込む。不思議な力は跡形もなく消えていた。消えていたが……手首に違和感を感じ、無意識にその場所に目を向けると、

俺の手首に、手形の痣が残っていた。

「……………っ、わ…………」

どういうことだ？何が起きた？なんだなんだなんだ？真っ暗な部屋の中、叫ぶことも考えることもできずに、俺は気絶した。

結局、朝起きて学園に行く頃になっても痣は消えなかったの、リストバンドで隠すはめになった。ダイゴは四天王としての仕事があるらしく、今日は俺一人で登校だ。げんなりしながらも寮から学園への通学路を歩く。昨日のアレ……やっぱりユーレイというヤツなのか……？

「う……す、少し急ぐかなっ」

思い出したら寒気がしてきた……早く痣が治りますようにと祈りつつ、早足で我がFクラスに向かう。

クルメア学園は丘の中腹地点に建っている。そして寮は平地に建っていて……つまり結構な坂道が通学路として存在しているのだ。まあ別に虚弱体質でもなければ大したことはないのも事実だけど。坂

道を上って校門を抜け、玄関で靴を履き変えて自分の教室を目指す。
やがて教室に到着したが、そのボロさは相変わらずで図らずもため
息が出てしまった。

「やあ、おはようクロマ」

「うつす」

教室のドアをくぐり、自分の席（ちゃぶ台）にかばんを下ろすと、
すでに隣の席にはダイゴがいた。それにしても朝早く登校なんて…
…やっぱなりたいたいとは思わないな。学園四天王つてのには。

「そ、そういえばさ、ダイゴ。……シロナ、どうしてた？」

四天王ならアイツと会ってるはず。それにダイゴとシロナは仲がい
いし、ダイゴに仲介してもらえばひょっとするかもしれない……。

「うん？シロナかい？いや、今日はまだ見てないんだよ。会合にも
来なかったし……クロマは知ってると思ったんだけど」

「え？あ、そうなの？」

ということとは、まだ学園に来てないってことなのか？何か用事でもあったのか？うーん……わからん。

結局そのままシロナが顔を出すことはなく、目の前が空席のまま1時間目の授業が始まった。……どーゆーこったい。

何事もなく至って平和に1時間目が終わる……シロナがいないまま。初めはビクビクしてたけど、いざアイツがいないとなるとやっぱり心配だ。

「おい」

（うーん……やっぱり遅刻？シロナの性格からしてそれが1番可能性がありそうだけど……）

「おいっ」

（でもなんで今日に限って……はっ！？もしやずっと待たせていた
せいで風邪に……なるワケないか。アイツ無駄に丈夫だし）

「おいっ！シカトしてんじゃねえぞっ！」

「うわっ！？な、なんだよ。ナガレか……」

眉間にしわを寄せて不快感を全開にして俺を睨んでくるナガレ。俺
の左隣の席の生徒であり、自称アウトローを叫ぶ、早い話が問題児
である。あと中学2年生でことで中二病。狼のようなその髪型に
俺よりそこそこ高い身長、そして風を斬り刻むかのような冷たさと
雷を思い起こすかのような鋭さを持つ眼光（本人談）。はい、どう
みても三枚目です。本当にありがとうございました。

まあそれでも他の生徒からは結構恐れられているらしい。しかも
Fクラスの連中からはアニキと呼ばれている始末。しかし本人は自
分は1匹狼だと言って突き放すも、クラスのバカどもの情熱は鎮火
するどころかさらに火力を上げる結果に。俺だけか。おかしいと思
うのは俺だけなのか。

だが、俺はコイツのことが嫌いじゃない。ここまで面白いヤツはそ
うはいないからだ。ぜひと友達になりたいと思っているのだが、
どうも相性が合わないらしく、ナガレからは敵視されてしまってい
る。俺はただ、

おもしろそ……全校生徒を威圧するためにナガレの背中に『亜宇斗

露』と書かれた張り紙をこっそり張り付け、

おもしろ……ナガレがクラスに馴染むようにヤツの座布団の下にブ
ーブークッションを仕掛け、

おもしろ……その感動をみんなに知らせようとナガレ自作の秘密ポエ
ムを放送し、

おも……しろそうなので友情を深めるためにその都度鬼ごっこをし
て遊んでいただけに。一体何が悪かったのか見当もつかないぜ。

「なんだ、とはごあいさつじゃねえか……昨日交わした約束をすっ
ぽかしといてよオ」

「約束って……ああ、ごめん。行けなくて悪かったよ。どうしても
外せない用事があった……」

どうしても外せない用事〃ゲーム

「……チツ。だがそれとこれとは別だ。一度交わした約束は、たと
え五体満足じゃなからうがキツチリ成し遂げる……それが漢おつこってモ
ンじゃねえのか？」

いやさすがに五体満足じゃなかったら病院行けよ……とか思ったの
は秘密。

「ああ、本当に悪かった……反省してるよ。……ポエム朗読会に行けなくて」

「違いよ！誰もそんな羞恥プレイしねえよっ！俺が言ってんのは決闘のことだ！！つかテメエ放送のことも含めて全然反省してねえだろっ！？」

「……………え、決闘？」

え、まじで？俺、ナガレとも決闘の約束してたの？うわぁ…………敵作
りすぎだろ俺…………まいつか。

「反省の色が皆無だね、クロマ」

隣を見ると、ダイゴが食ってかかるナガレを見て苦笑していた。見
てるなら止めるよっ。くそっ、親友やめてやるっ。

「ってワケで親友になろうぜ、ナガレ」

「なんで自分のしたことを理解した上でんなことが言えるんだ！？
誰がなるかボケッ！！」

ですよー。

「ナメやがつて……俺はナメられんのがベスト・アングリー・ポイントなんだよ……。今すぐデュエルしやがれっ!!」

「任せろっ! ドロー! ターンエンド!」

「誰がカードゲームしろつつたアアッ!! 決闘って意味に決まってんだろがアアッ!!」

「すごく……楽しいです。でも、そう楽しんでばかりもいられないよな。本気でキレそうだし。」

「いやその……アレだ。今はちょっと……シロナが心配でそれどころじゃなくて……」

「少し苦しくないかい? 的な視線のダイゴ。わかってっけど……仕方ないだろ。これしか思い浮かばなかったんだよ……」

「なん……だと……? 今日珍しく欠席した『黒姫』のことが心配で精神が参っちゃってるってのか……!?!」

あれっ？なんか引つかかってくれた！？

「チッ……興ざめだぜ。テメエとの決闘はまた今度だ。せいぜい覚悟して——へぶあっ——！」

「クロマああああっ——！」

バゴオッ——と教室のドアが吹き飛び、ナガレに直撃。教室に入りなり絶叫する……げえっ！シロナあ！？

「ク……ロ……マ……！！」

突然のことに教室が呆気にとられて静寂が訪れる。引き起こした犯人であるシロナは肩で息をしながら血走った目で俺を……完っ壁に俺を睨んでいる。つまり吹っ飛んだナガレとドアは眼中にないと……って人の心配してる場合じゃないっ！

「クロマあ……！よくも約束すっぽかしてくれたわねえ……！覚悟はできてんでしょうねえ……！！」

「ひいっ！い、いや、実は昨日はちょっと……よ、用事があったて！

なっ、ダイゴ！」

「え？あ、ああ。確かにクロマは洞窟に僕を迎えに来てくれたよ。それは間違いない」

さすがに危険を感じてか、ダイゴが助け舟を出してくれる。助かった……！さすが親友。白目向いてドアの残骸とオネンネしてるアウトローとはワケが違うぜ！

「……ふーん、そうだったの……じゃあダイゴ。それはいつの話なのかしら？」

「え？確か9時だったはずだけど……」

「あっ」

バカあああああっ！！思わず素で『あっ』って言っちゃったじゃねえかあああああっ！！

「へえ……9時、ねえ……」

「……いや、あの……」

「クロマ?」

「は、はい……?」

「バトル、するわよ」

「……………はい」

従え。さすれば（命だけは）救われん。

「ダイゴ。あなたのネンドール、確か《リフレクター》と《ひかりのかべ》を使えたわね。教室に展開して」

「やれやれ……僕もバトルしたいんだけどね……」

「クロマ。一応ルールだから形式だけは決めさせてあげる。ホントは6on6でグチャグチャにしてやりたいけど、ルールなら仕方ないしね」

制約という名のルールがなければ、法律という名のルールを守るつ

もりはなかったらしい。

「……じゃあ、1 o n 1で」

「あゝあゝ？」

「……1 o n 1をお願いします……」

「チツ、仕方ないか」

舌打ち……舌打ちって……シロナが黒い……クロナさんだ。やべ、
『最も名前負けしてる生徒』の二つ名がぴったりすぎる。

「よし、準備完了だ。3重に張ったから派手にやってくれて構わないよ」

ダイゴの言葉に頷き、ホルダーに手を入れて構えの姿勢をとるシロナ。……もういいや。なんかもう諦めた。ため息をつき、立ち尽くした状態で俺もシロナにならい、ホルダーに手を突っ込む。なんか最近ため息が多いな……と思いながらもまたため息をつき、顔を上げて今度はしっかりシロナを見据える。

ホルダーの中に入ったボールに触れた途端、俺のつまらない覚悟に
応えるように……ボールの中が鼓動した気がした。

……みなさん、休み時間終わってますよ？

「……………」

「……………」

物理攻撃と特殊攻撃を遮る2重の壁の中。ちゃぶ台や座布団は取り除けられ、ボロいもののそこそこ広いフィールドができあがる。俺とシロナは互いに対峙して、ホルダーに手をつ込んだまま微動だにしない。シロナは俺を睨みつけるように凝視し、俺はその視線を真っ向から受け止める。

『四天王の『黒姫』がバトルだってよ!』

『相手は誰だ?』

『Fクラスのヤツらしい。どうせ瞬殺だろ』

『きゃー!シロナ様がんばってー!』

気づけば、いつのまにか壁の外にはやじ馬が集まっていた。待てや。今授業中だよな?先生仕事しろよ。それに見せ物じゃないんだぞ。見物料払ってから見ろってんだ。

（やれやれだぜ……ってか）

ホルダーからボールを取り出し、ため息をついてカリカリと頭をこする。これだからこいつらとバトルなんてしたくないんだ。どこでバトつてもやじ馬がついて回る。比較され、身の程知らずのレッテルを貼られ、盛大な歓声は1つとして俺のものではない。

バトルにそんなものは関係ないと言い張るか？ こういうのは残念ながら関係があるのさ。スポーツと同じだ。罵声を浴びれば怖じけづき、思い切った手段は取れなくなる。嘲笑を受ければ怒り、周囲の状況把握がおろそかになる。俺に限ってそんなことはないと言言できるが、テンションも大事なパラメータなのだ。

……だが、現実逃避をして事態が好転するなら苦労しない。おとなしく諦め、俺はシロナに目を向ける。その顔には警戒の色を占める中、俺と勝負できることが嬉しい、楽しみでしょうがないという表情が窺える。その表情がまたテンションを下げると……はああ。

これはお互いよく知っている相手とのバトルだ。……それなら、『読み』という動作が必要になる。シロナの手持ちは全部知ってるし、あっちも俺の手持ちは承知の上だろうから。

タイプの相性。それだけで勝敗が決するとは言わないが、有利な立場に立てば有利なのは間違いない。……が、残念ながら今日の俺はガチポケを1匹しか持ってきていない。『読み』なんてめんどくさいことはしなくていいのだ。そして、それは俺のアドバンテージとなる。

「なんだ、威勢がいいのは最初だけか？」

「……余裕じゃない。上等よ、3秒で終わらせてやるんだから」

俺の挑発に乗ってくれたのか、ホルダーからボールを取り出し、そのまま振りかぶるシロナに合わせるように、俺もボールを投げる。こっぴなつたらいやでもテンションを上げないとな。

「お願い、ロズレイド！」

「ランターン、君にきむえつぶえ！」

噛んだ。死にたい。

俺の赤裸々シーンは華麗にスルーされ、出てきたポケモンを見て観客たちがまた盛り上がる。もはや俺のテンションは底辺だった。

「ロズレイドね……よく出したな。弱点のオンパレードなのに」

「アンタが思い切った賭けに出るとは思えないからね。あたしのどのポケモンにも対抗できるのがそのランターン。違う？」

「……………」

ドヤ顔でふんぞり返るシロナ。丁寧な解説なんだけど……テキストに選んだのがたまたまこのランターンだったんだよな……いや、何も言っまい……。

「ふむ……それでは両者、準備はいいかな？」

ダイゴが審判役のセリフを吐き、「ダイゴ様あー！」という黄色い声上がる。……やっぱり、四天王になんてなりたくはないな。俺なんかに名声が集まるなんて思えないし。

コクリと頷くシロナに対し、俺は肩を竦めてOKのサインを出す。それを認めたダイゴはさきほどとは打って変わって声を張り上げた。

「では——始めっ！——」

vol. 4 さぐりあい(前書き)

アレ(ホ)な内容になっています。感想とかくねると嬉しいです。

「ロズレイド！《マジカルリーフ》よ！」

「なら、こっちは《みずのはどう》だな」

バトルが始まり、盛大な歓声と共に先手を取ったのはシロナだった。後手に回った俺はロズレイドの両手のブーケから放たれる極彩色の葉っぱの軌跡を変えるべく、前方に撃ち出した水色の波動が陽炎のように視界を揺らめかせ、唸りを上げた。

効果はてきめん、不可避とされるホーミングタイプマジカルリーフの技は、波動に接触するなり軌道を変えてあさつての方向に投げ出され、甲高い音を響かせて壁に激突・消滅した。

必要最低限の動き、技。それだけの動作で来襲する脅威を取り払う。シロナの相手をしている内に熟達してしまった、相手の攻撃をいなす小技スキルスラッシュ。技をただぶつけるのではなく、最低限の力で“逸らす”。

“いなす”。“外す”と言ってもいいかもしれない。

シロナのポケモン達は俺とは比べものにならないほど鍛えられている。それは幼少のころも変わることはなく、負けず嫌いの性格が功を奏してか恐ろしいまでに自分のポケモンを鍛え上げているのだ。もちろん、自分のトレーナーとしての資質も含めて。

それに対して俺はどうか？シロナは恵まれた才能に不屈の精神で実

力を好調に伸ばしてきたが、残念ながら俺にはそのどちらも存在しない。子どものころのシロナとのバトルは勝ち無し引き分け無し。いいところまでいくことはあっても、勝ちに転ずることはなかった。それでも、そんな才能の光に当てられて育ったせい客観的な視点で見ることができるようになった。つまり、強い相手とバトルを重ねることによって、敗北を噛み締め続けたことによって、気づいたときには多量の経験が積み重なっていた。

その恩恵こそ、さきほど見せた《スキルスラッシュ》。通称《軌道逸らし》。

長年の経験と知恵が生み出した、トレーナースキルだ——！！

……なんてそれっぽく語ったところで、しょせん負けっぱなしだっただけじゃんってツッコまれるのがオチだがなあ——！！

……死にたい。

「《ギガドレイン》っ！」

俺がセルフ黄昏れを使っている内にシロナは次の行動に移っていた。シロナの唯一の弱点、それは俺にはある『経験』が足りないということ。そりゃそうだ。今までほとんど俺と一緒にだったせいで、俺以外のトレーナーとバトルしたことなど片手の指で数えられるくらいしかやったことがない。鍛えに鍛えたポケモンと、並外れたトレーナーとしての資質。それこそシロナのアイデンティティだが、『経

験』だけは資質で補うことはできても蓄積されることはない。

現に、体力がフルの状態で《ギガドレイン》はあまり意味がない。HP吸収の技は持久戦でその効果を發揮する。だが、その特殊な効果のせいも技自体の威力は小さいのだ。互角のポケモン同士だったならば付け入られる隙になっていただろう。

……まあ、互角だったらの話なんですけどね！

俺のポケモンじゃ弱っちくてその程度の威力も致命傷になっちゃうんですけどね！

弱っちいからなんだ！ポケモンは強さで決まんのか！？否！断じて否アツ！！

ポケモンが弱けりゃ……その分お・れ・が・補えばいいだけのことッ！！

ポケモンが強いからって……いい気になるべからずッ！！

経験ッ！！それこそ一発逆転の切り札也イッ！！

そもそもシロナほどポケモン鍛えてるヤツなんて四天王含めてこの学園にいないというね。

…………チートめ。だが俺は違うぞ。

「《でんじは》。強さ故溺れた者に鉄槌下あすッ！！」

「っ！や、ヤバ——っ！」

フハハハハ！後悔しても遅いのだよ！

《ギガドレイン》は体力を吸収するために必ず相手と接触しなければならぬ！ゲームのエフェクトでは養分が空中を飛んで自分に吸収させていたが、これは小せ……リアルツ！命中率100%の技など皆無ッ！

故に、相手を捕縛することから始めねばならないッ！そしてそれは大きすぎる隙となるのだよッ！

両手のブーケから発射された幾重にもなるツタ。ランタン目掛けて進めるそれは紛れも無くッ！決定的なまでにッ！！

ロズレイドの一部なのだ！

俺の愛すべきランタンが発した電磁波はツタに抵触し、これまたランタンから外れて透明な壁に激突した。もちろんそれだけでは済まない。済むはずがない。身体の一部であるロズレイドのツタが電磁波を直撃してしまったせいで――

「く……っ！マヒ状態……っ！」

ロズレイドはマヒに陥った。スピードダウンは当然、下手をすれば行動停止……フリーズだってありえるのだッ！

「フハハハハ！やべえ！テンション上がってきたぜえっ！！」

俺の高笑いが静まった教室に響き渡る。生徒たちは信じられないものを見るかのように、呼吸すら忘れてバトルを静観する。

オラオラッ！さっきまでの威勢の良さはどうしたんですかねエツ！
？ブタみてエに醜く鳴いてみるよッ！？ひやはははアッ！！

はい、どうみても悪役です。本当にありがとうございました。

「……ようやくやる気になったみたいね」

それでも、シロナの顔から戦意が削れることはなかった。うわあ…
…どうみても逆だろコレ…調子こいてました。マジすんませんっ
した。

「まあ、な。さすがに自重してるけど」

「そう。なら、あたしに提案があるんだけど。乗ってみない？」

ふえ？

「このバトル、勝った方が負けた方に…… 1つだけなんでも命令できる、なんていうのはどう？」

『『『ぐはあああああああああああああああああああああああ
あああああつつつ！！』』』

ああっ！Fクラスのバカ連中が血の海に！？

「いや、そんなことはどうでもいい……！それは……アレか。なんでもなら……え、えっちな命令でも……」

「ええ、いいわよ？勝てたら、ね」

「うおおおおおつ!!」

勝て！クロマ！絶対勝て！！

『オラア！！てめえらなにしていやがんでいっ！！我らがクロマ様の応援団を結成しやがってんでいっ！！』

「○○○○○○○○○○！！妄想が止まらねえー」

「っ！団長っ！俺、クロマ様の応援歌作りましたあっ！！」

野郎どもおっ！！

唄ええええええええええええええええええ
いつ！！
□

く我らがクロマ様応援歌く♪

ハアくたとえ何があろうともオく

お前の道を切り開けエく

バージンロードも切り開けエく

エンヤくコくラヤく

(クロマ！クロマ！)

我らが悲願を叶えるためにイく

(全身っ！全霊っ！全力っ！とにかく全部っ！)

時化の嵐がこようとオく

津波の嵐がこようとオく

食いしばった歯あくに全てを賭けてエく

(何がお前をそこまでさせるっ？何がお前を突き動かせるっ？)

んなこたアとつくの前から決まってるア。全ては――

全員で(シロナ様にえっちな命令をするためだアアアアアアアア

だし……まあ勝ったときに考えよう。それとは別に、俺は結構やる気に満ちていた。

だって俺の将来の夢はニート……に見せかけたギャンブラーだからなっ！へへん！

「おしつ、なら続けようぜ」

「ええ、絶対負けてなんかやらないんだから！」

さすがは俺の幼なじみだ。俺のやる気スイッチがどこにあるのか熟知している。そしてそれはものの見事に『ON』にされた。

『本性』は出せない。でも、『本気』でバトルに臨むっ！！

第2ラウンド——スタートだ！！

vol.4 さぐりあい(後書き)

次回は真面目に書きます。

調子に乗りすぎた……

「それでは仕切り直しといこうか。両者、準備のほどは？」

答えるまでもない。

「「いつでも」「

相手……シロナのロズレイドはマヒ状態。なら、いくら鍛えられて
いるとはいえ先手を取れるはずだ。

頭をフル回転させて最適の選択肢を導き出す。『経験』が俺の唯一
の武器なら、使わずにバトって勝ちを望めるはずがない。そこまで
楽をして勝利を収められる相手じゃないのは、他でもない俺自身が
よく知ってる。

なら、今回ばかりは勝たせてもらっつからな。

「では。——始めっ！！」

——初白星、掲げてやんよっ！

「《チャージビーム》っ！」

「《ヘドロばくだん》よっ！」

命令は同時に行われ、技が繰り出されたのも同時だった。

ランターンの頭の光源に電気が集結していく。でんきタイプの技はチャージビーム発動までに時間がかかるし、大して威力を持つてるワケでもない。現にマヒ状態でスピードが半減しているはずのロズレイドの猛毒を含んだ凶悪な技と発動が同時だったのがなによりの証拠となるだろう。なら、なぜ俺がそんな技を選んだか？

確かに《ソーラービーム》ほどではないにせよ、この技は溜めが必要だ。だが、それを補って余りある技後の効果こそ、俺の狙いだった。

「ランターン、逸らせっ！」

俺がそう付け加えた直後、直線的な電撃と劇毒の爆弾が両者のポケモンを基点に発射された。ランターンは俺のとつさの命令にもかかわらず、的確な狙いで迫り来る毒の塊に電撃を掠らせて軌道を逸らすことに成功する。こっちだってガキのころからの付き合いなんだ。信頼の強さならシロナのポケモンにも遅れを取るつもりはない！

劇毒の爆弾はダイゴの張った壁に激突し、ドバババッ！という濁った爆発音を立てた。壁に激突したのはランターンの電撃にも当て

はまることだが、ランターンの“体内に残った電気”は未だ健在だ。溜められた電気はエネルギーとなり、さらなる攻撃力へと変化する。これこそ《チャージビーム》の欠点を補う利点。技後の攻撃力の上昇だ。今のランターンは特殊攻撃力が1段階上がってる状態。対するロズレイドはマヒ。ようやく勝機が見えてきた！

（今なら……“あの技”が使えるか？ いや待て、まだ早い気も——）

と、俺が次のカードを決めかねている内にロズレイドが——飛び上がった！？

「お願い……《タネばくだん》っ!!」

空中で見下ろすロズレイドが苦しそうな表情を見せるも、両手のブーケから拳大の種子をバラまく。さっきの爆弾とは異なり、今度はくさタイプの攻撃。当たれば致命傷は避けられない。

だが、それは当たればの話だ。つまりは当たらなければいい。加えてロズレイドの位置は空中。回避も悪くはないが、それではチャンスをもにできない。

ならどうするか？——簡単だ。

「両方撃ち落とせてなあっ！！ 凍えろっ！《ふぶき》いつ！！」

降り注ぐ種子爆弾に物怖じすることなく、ランターンは上体をのけ反らせて口元に冷気を集める。そのエネルギーの余波だろうか、顧客の熱気に包まれた教室の温度が少し下がった気さえする。

特殊攻撃力が上がってる恩恵か、さきほどのような溜めの行程を歩む必要はなかった。口元に収束した冷気は、それこそ目のない台風のように氷雪の暴風へと変貌し、有効なタイプであるロズレイドを襲う――！

「ロズレイド！」

観客がその光景に息を呑む中、シロナが絶賛絶体絶命の危機に立たされた自分のポケモンの名前を呼ぶ。しかし、その声音に焦りの色は混ざってはいなかった。

「《リーフストーム》っ！！」

そのタイミングは、まさしく四天王の名に恥じないものだっただろう。バラまかれた種子爆弾の小爆風が極寒のブリザードを食い止めている間に、命令を受けたロズレイドはマヒ状態とは思えない早さで溜めの行程を済ませ、その強烈な緑のエネルギーを放出した。

『うわあああああああつ!?!?』

ゴオオオオオオオツツツ!!!!!!という絶大な音響とエネルギーを迸らせて、2つの異なった暴風が正面から激突する。凍てつく氷雪と、斬り刻む葉末の暴風。その余波は凄まじく、観戦中の生徒達からは悲鳴が上がっていた。至近距離にいた俺はなんとか踏ん張っているけど、どちらが優劣の立場にいるのか目視できない。

「うぐ……っ!」

それでもようやく静まってきた暴風波の中、ランターンの無事を確認する。多少のダメージは受けたらしいが……おそらくは凍った葉っぱをくらったんだろう。戦闘不能とまではいかず、まだまだやれると言わんばかりの気合いを見せてくれた。

そのことにまず安堵し、すたつという音に視線を上げる。地上に降り立ったロズレイドもダメージは受けているものの、やはり戦闘不能とまではいかなかったようだ。

さて、ここからどうするかだが……

「さすがやるわねクロマ。私が認めただけはあるみたいね」

「ん……? ああ。余裕だな、戦闘中なのに。やっぱり罰ゲームはなしにするつもりなのか?」

「私に二言はないわ。そうじゃなくて、ね……」

私に二言で……ほんと強気なヤツだなあ。それともこついつときは男らしいっていうべきなのか？

そんな俺の苦笑いは、シロナの次のセリフで掻き消された。

「——次の一撃。全力を賭けた一撃で、このバトルの幕を引くつてのはどう？」

「……………へえ」

確実に勝ちを取りにいくというのなら、この申し出は受けるべきじゃない。いくらランタンの攻撃力が1段階上がっているとはいえ、ロズレイドに純粋な火力で勝負するのは分が悪い。

でも……俺は躊躇はしなかった。

「——いいぜ。乗った」

こつちだつてまだ切り札は出してない。それでも分が悪いことには変わらないが……勝てる確率はいくらか残っているのだ。

それに、俺はギャンブラーを目指してるんだ。

分の悪い賭けと、勝ちの確実な賭け。どっちが楽しいか……言ってみてもないってなあ！！

「う……てて……」

「やあ、起きたみたいだね。ナガレ」

「……銀帝？……なんだこりゃ。一体何がどうなってやがる」

「ごらん。彼らのバトルは素晴らしいよ。見ててほれぼれする」

「あん？ありや黒姫か……。……察するに、一撃勝負ってヤツか？」

「さすがは強襲科所属生、だね。その通り。シロナは純粋な力量なら、おそらくこの学園のトップだろう。なのに、わざわざその勝負に乗ったクロマは……。実に男らしいとは思わないかい？」

「……けっ」

「このバトルは僕らにとっても得るものがある。見届けようじゃないか」

「……フン、せいぜい無様な吠え面拝んでやる」

（素直じゃないんだからなあ……）

「……何か言ったか」

「いや、なんでもないよ。ふふっ」

「……けっ！」

シロナとロズレイドがアイコンタクトを交わし、動作に移る。両手のブーケを口元に添え、膨大な溜めを作り始める。それに反応した空気が震え、キィィン……という甲高い音が満ちる。出し惜しみなんてしてただで済むような相手じゃないな……

そこで、思わず笑いが漏れてしまった。まただ。またシロナに先手を取られた。さっきだって、いつだってそうだ。肝心な場面で考え過ぎたあげく、シロナに先手を持っていかれる。俺の悪いくせだ。

それでも、負けるつもりはさらさらない。

「ランターン、《アクアリング》。2重に張ってくれ」

俺の命令になんの疑いもなく帯状の水のリボンを円のように巻き付けるランターン。その行動に周りがざわつく。一発勝負のバトルに持続回復系の技を出したんだ。正気を疑って当然だろう。そんな短時間で優位に立てるほど回復できるワケがないのは目に見えている。そんなことは百も承知だ。

「チツ……！おいっ！何考えてやがるっ！さっさと攻撃の体勢に――」

「まあまあナガレ。心配なのはわかるけど、おそらく考えあつてのことだよ」

「なっ！？し、心配なんかしてねえよ！ふざけんなっ！！」

相変わらずだなあ、ナガレは……でも、ダイゴならわかると思ったんだけどな。元々はダイゴとの会話で考えついた合成技なんだし。

そう、あれは同じ寮の部屋でだべっているときだった。世界には様々な技があり、それは日々生まれ続けている……それでも、1匹のポケモンしか使えない、言わばオリジナルの技がある……博識な友人、ダイゴから聞いたことだ。

次の日、オンリーワンの技と聞いてかなり興味を湧いた俺は図書館塔に足を運んだ。探し当てた本に書かれていたことは、1つの神話に登場するポケモン。

《シードフレア》。感謝を表す、くさタイプのポケモンの技だ。全方向に撃ち出した帯状の深緑の波動。神話のポケモンにピッタリのトンデモ技だ。

もうわかるだろう。この技は、その《シードフレア》の水バージョンということ。

ロズレイドの溜めが終わったのを見越し、俺は挑戦を表す言葉を紡ぐ。

「《みずのはどう》。全力。全霊！全方位につ！」

俺の声にシロナも溜めを終えたのか、負けじと声を張り上げた。

「《ローズブラスト》っ……！」

バラで彩られた竜巻、というのが俺が受けた印象だった。凝縮したロズレイドの代名詞であるバラの突風。威力は充分、その鋭さから急所だって狙えるだろう。

——だが、知ったことじゃない

「《アクアフレア》——っ！！」

前座は済ませた。帯状の水のリボンは内側から押し寄せる波動によつて撃ち出され、脅威の攻撃性を観客の目に焼き付けた。その海流のような超波動は、やがて薔薇風と衝突する。

拮抗は一瞬。

次の瞬間には、爆風が巻き起こっていた。

バシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ！！！！
！！！！

水が弾ける。風が唸る。波動は突風とぶつかり合っ
て起きた爆風に目をつむる。

ワールドに立っているポケモンこそ勝者だ。どちらが勝ったかお
 そるおそる目を開くと――

「……っ！そこまで！勝者、シロナのロズレイド！！」

ロズレイドがふらつきながらもしっかりと立っており、ランターンは目を回して横たわっていた。

『うおおおおおおお！！』

『すげえ！やっぱシロナ様は最強だぜ！』

『一生ついていくッスシロナ様あ！』

『きゃあああつ！お姉様ー！かつこいいですわーっ！！』

静寂が一転、盛大な歓声が教室に轟いた。

……また負けた、か。

「おつかれ、ランターン」

目を回したランターンをボールに戻す。すると、慣れないバトルで疲れたのか緊張の糸が切れたのか、その場に座り込んでしまった。

「おつかれさま、クロマ。素晴らしいバトルだったよ」

「ダイゴ……まあ見ての通り負けちゃったけどな」

「……ハンツ、ざまあねえな」

「よっ、ナガレン。慰めてくれよう」

「断る。……そして人を錬金術の人みたく言うんじゃないっ!!」

「クロマ」

凜とした声に振り返ると、シロナが近くまで寄ってきていた。ああ……罰ゲームか。級友が血の涙を流しているが、正直どうでもいい。むしろ鼻と口と耳からも出血すればいいのに。

「約束だからね。なんでも1つ言うことを聞いてもらっからね?」

「……俺にできる範囲で頼みます」

はあ……何されんのかなあ……執事のまね事かなあ……でも身の回りの世話なら週1でやってるから大丈夫かな?

まあ、そんな軽い命令のワケもなく。

「大丈夫よ。すごく簡単なことだから」

きつと俺は、この日を忘れることはないだろう。あと、シロナの満面の笑顔も。

ドキッとした。

「——クロマ！アンタには才能があるわ！才能を伸ばすために強襲科に転科なさい！拒否権はないわ！」

いつぞやに決闘を申し込まれたときのように、ビシッ！と指を突き付けられた。

ドキッとした。

$$\vdots$$

「……はああああああああああああああああああああ
！！！！！！？」

これが、この学園で初めて俺に降りかかった変化だった。

vol. 6 ひとはそらをとべるか

青く澄み渡る空の下、クリアで穏やかな風の中、緑溢れるみずみずしい芝生の上――……。午前中の授業が無事終わり、昼休みを迎えた俺は学園の中庭で大自然に身を投じていた。緑化都市なだけあってむせ返るような緑の香りが俺の鼻腔をくすぐる。

昼休みだけに中庭で昼食を済ませる生徒たちもいる。だが、俺は未だ空腹を満たせずにいた。当然、昼メシ代わりに新鮮な空気を食べにきたとかいう理由じゃない。もっと違う理由……回避しがたい事件に、俺は巻き込まれていた。

事件。とてもいい響きだ。いや、そういうと不謹慎だろうか。しかし、毎日同じ教室に通って同じ授業を受けて同じ放課後を過ごして同じ寮に戻って同じ部屋で寝る……そんなループが続けば、誰だって新風を期待せずにはいられないだろう。そして、俺はその最たる例と呼んで過言はなかった。

そう、俺は事件という類が好きだ。起きれば真っ先に首を突っ込むし、起きなければ自ら起こしてきた。そうやってこの学園で過ごしてきた。

なんてことはない。今回もその類のものというだけだ。

……中心人物が俺なワケだが。

『捕まえろお——っ！！』

「ちくしょうっ！徒党組みやがって汚えぞてめえらあっ！！」

あのあと、残りの2時間の授業（俺とシロナのバトルが終わったときに授業終了のチャイムが鳴った）を眠りもせず真面目に受け、せっかく『ようやくやる気になったのでちゃんと授業を受けているフリをして昼休みになったらそれとなく逃走ランナウェイ計画』を着々と進めてたのに、シロナは俺が逃げることをすでに想定済みだったのか、追跡部隊をすでに編成していたらしかった。くうう……！幼なじみだけのことはあるじゃないか……！

しかもその追跡部隊というのがあの自称白騎士を名乗っていたシロナの追っかけたち。騎士のくせにやることはただの鬼ごっこ。どう考えてもプライドのかけらすら見当たらない連中だった。そんなバカが後ろに40人前後。あ、今気づいた。ナガレを抜いたFクラス全員だ。

『うおお——っ！シロナ様あ——っ！！』

「このクラスはバカしかいなかったっ！」

ナガレもナガレである意味バカだし、認めざるを得まい……。周りの生徒がなんだなんだ？とざわついているが、気にかける余裕はな

い。全力疾走を始めてから約10分くらいだろうか。まだ余裕はあるが、こんなくたらないことに貴重な昼休みを潰して残りの授業を空腹のまま過ごしたくはない。

（それに……相手がバカなら勝機はある……っ！）

チラ、と後ろを確認。血走った目を俺に向けて底無しのような体力でいまだ全力疾走を続けている。よし、これならいける……！

「クロマああっ！！大人しく捕まりやがれええっ！！」

いつしか昼食を共にしたクラスメートも混じっていた。誰かが言った。友情。その真の美しさは……儚さにあると。

「今思っただけどさあ！！」

後ろを振り返らず、全力疾走を続けて声を張り上げる。

「1人で俺を捕まえる方が——シロナの印象がいいぞっ！！」

「イッシャアア——ッッ！！」

「つぶねえ！？てめ、裏切りやがったな！？」

『お前こそスタンガンなんか持ってどういっつもりだっ!!』

『シロナ様は俺の嫁だああああっ!!』

『んだと!?!ざっけんな!バトルしやがれっ!!』

『生きて帰れると思うなよ死に損ないがあっ!!』

一瞬で瓦解するクラスの輪。過去の偉人は言った。芸術は爆発だ。

と。まさに友情が爆発する勢いで崩れ去っていくが、あんな醜いヤツらが芸術とはとても考えられなかった。クラスメートつてだけで俺の株が下がりそうだ……。シロナのヤツも大変だな。とても苦勞してるんだな、と思いました(他人事)。

「よし……撒けた、かな」

校門の外にある並木の影になるところに腰を下ろす。この学園は規則が緩く、門番らしい人もいないので昼休みに抜け出すなんてことは造作もないことだ。クルメア学園も広いが、この町もかなり広い。俺が外に出たところを見た目撃者も見当たらなかったし、これで追跡部隊に見つかることは万が一にもなくなったはずだ。体力が回復

したらそこら辺で昼メシを調達しよう。なんだかんだで昼休みはあと30分はあるし、しばらく外で雲隠れだ。

ちやうど近くにあったそこそこの有名店、『リリー・シルフ』で昼メシを買い込む。今日はイタリア風BLTサンド。響きがなんとなくおいしそうだったのでつい買ってしまった。軽薄な性格は俺の悪いところだ。もう少し慎重になってもいいかもしれない。

（それよりメシだメシ。さっきの木陰の場所は気持ちよかつたし……よし、戻ろう）

エサの入ったビニール袋を引っ提げ、さきほど休憩をとった場所に帰り、腰を下ろしてエサにかぶりつく。バトルに全力疾走をしたせいか、思いのほか胃袋はスカスカだったようで、2つあったBLTサンドは瞬く間にからっぽ胃袋に吸収された。

「んー……眠い」

ケータイを開き、時間を確認。まだ昼休みは20分近くあるし、GPSで場所を特定されないためのダミーも用意してある。今から昼寝しても何の障害もない。ケータイでアラームをセットし、背の低い草むらの上に寝そべり、俺は這い寄る睡魔に身を差し出した。

夢を見た。

所在なさげに立つ少女。

こちらを見据え、ただ押し黙っている。

何の色もない、真っ白な空間。

何の変化もない、空虚な時間。

何1つ動かない夢の中、彼女だけが動いた。

白く、飾り気のないワンピース。色素の薄い、白くて長い髪。

その女の子はこちらを向いていた。

顔がなかった。

.....

「きゃあああああつ!?!」

「ぎゃあああああつ!?!」

ガサガサバサバサガサアツ!!

なっ、なんだっ!?!お化け!?!ユーレイ!?!昨夜の霊がまた襲来してきたのかっ!?!ひいっ!?!なんか夢で……夢で……なんかいたっ!?!なんか夢で見たあっ!?!思い出せないのにめっちゃ怖い!

「い、いったあ……」

「おわっ!?!」

バツ!と声がした方へ目を向ける。頭上の木の上、そのY字の幹の部分に、見知らぬ制服姿の女子が器用にもたれかかっていた。

……うわぁ……パニックは引いたけど……なんか出た……あ、オレ
ンジパンツ見えた。

「お、おい。大丈夫かー?」

「わ、わわっ」

わたわた。あせあせ。

「だ、大丈夫じゃないですー……降りられません……って、ままままさかパンツ見ましたかつ！？見たら警察呼びますよっ！？」

「なら逃げていいかな」

「な、なんですかそれー！？冷たすぎませんか！？」

「おおっ……ここまで理不尽なのも昨日ぶりだぜ……」

まあ、それでも結局助けることに。俺も大概お人よしだあね……それにしてもどうやって落ちてきたんだか……。

「はあ……助かりました……」

「よかったよかった。で、それって改造制服か？ここにいるってことはうちの生徒だろ？」

「あ、えっと、実は私、転校生なんです。今日の朝に学園に着く予定だったんですけど……」

「ですけど？」

「そのう……こ、この町は広くて……初めて来たので……」

「ああ、迷子になってしまったと。ははっ、ヨクアルヨクアルヨクアタール」

「うう……そんな片言で……しかも最後は栄養剤だし……」

笑顔で慰めたはずなのに屈辱ですう……といって涙目になってしまった。おかしいな、なんか悪いことでも言ったかな。

「それで、どう話がこじれば空から降って木に引っかかることができるんだ？」

「……それで、その……ポケモンに乗って空を飛べば場所がわかるだろうと思ったんです」

ああ、なるほど。そりゃ道理だな。クルメア学園は広いし、空から見れば一発で――

「でも、それらしい建物が見当たらなくて……」

「……………」

「そのうえ近くを飛んでたスバメたちにつつかれまくりまして……」

「……………」

「なんとか逃げ切ったと思ったら……落ちちゃったんですう……………」

「逃げ切れたのに落ちちゃったのか……………」

確信した。こいつは重度のドジっ娘だ。てか空から降ってきてよく平気な顔で立ってられるもんだ。

「ところで、えーつと?」

「あ、リリネって言います。あなたは?」

「クロマ。クラスのヤツらからは黒騎士って呼ばれてる」

「か、変わったあだ名ですね……」

「だろ？名付けたヤツは危ないヤツだぜきつと」

「そうですね……それはちょっとないと思います……」

「だよな。向こうの木に引っかって今にも落ちそうな荷物くらい危ないよな」

「ああ、それは危ないですね」

「……………」

10秒後。

「……って、ええっ！？に、荷物っ！どどこですかっ！？」

遅っ！指でその木を指して教えてやった。あ、荷物がどんどん傾いて……

「わっ、わああっ！」

荷物をキャッチしようとしてリリネが木に向かってダッシュダッシュ。おお、間に合うか！？

「きゃんっ！」

半分の距離まで走ってもんどり打って転んでいた。そして荷物は母なる大地と熱いキス。ダンボールはすでにクシャクシャだ。

「なんなんだ……」

とにかく思ったことは、珍しい人種だな、ということくらいだった。

……ところで、その空を飛んでたポケモンはどうするつもりなんだろうか。

「……………」

むっすー、という効果音が付きそうなほどむくれているリリネ。彼女いわく、俺に会ってから悪いことしか起こらないんだとか。1つ言わせてもらおう。『僕は悪くない。』

「なー、礼くらい言ってもいいんじゃない?」

「……………どうもありがとございました、いじわるさん」

誠意のかけらもないな。せつかく学園まで連れて来た上に教務科まで案内してやってるのに。

と、そこで荷物を抱えたりリリネの足が止まる。おっと、到着かい。

「……………ここまで結構です。あとは自分でできますからっ」

「そ。んじゃ、じゃあなりリネサン。同じクラスだといいな?」

「…………。お断りですっ！」

転校生と別れると、予鈴を告げるチャイムが鳴った。まだ半分も授業があるのかよ……。なんと長い一日である。

vol.7 あらたな なかま

「じゃ、クロマ。さっそく強襲科に行きましょうか」

教室に戻った俺を待っていたのはそんな言葉だった。しまった……あのインパクトの強すぎるドジっ娘のせいですっかり忘れてた……。改めてFクラスの教室の中をざっと見渡す。屍屍シロナ屍屍……これが1人占めを目論んだ輩の行き着く先か……実に勉強になる。これ以上の半面教師は存在しないだろう。

ということは、今動けるのはシロナ1人。ならば逃げ切れることも可能ッ！

「さらばだっ！」

まだ閉めていないドアをくぐり、廊下に出る。そして再び耐久レースの幕開け……かと思いきや。

「ここはストップウェイ……行き止まりだ」

「悪いね、クロマ。僕も君とバトルがしたいんだ」

俺を挟むようにナガレとダイゴが道をふさぐ。や、ヤバい！窓から脱出しようにもここは3階だし、今ひこうタイプのポケモンは持っていない！

「…………詰んだ…………。あと行き止まりは英語でデッドエンドなんだぜ」

「なん…………だと…………」

ナガレのポケ（本人に自覚なんてないんだろうけど）に反応しているうちに、いつのまにか近づいてきたシロナに腕を取られる。これで逃げ切れる確率は0になった。

「もう転科手続きは済ませたからね。これで安心して強襲科に行けるわねっ」

「ははは…………嬉しくて涙が出そうだなあ…………」

俺の腕を取りながらずんずん進むシロナの隣で黄昏れてみる。「しかしなにもおこらなかった」。

クルメア学園の午後は授業はしない。代わりに学科ごとに別れて目標に合った技術を身につけるのだ。ちなみに俺の目標であるギャンブラーになるための技術は教えてくれない。

「ダイゴ、今日の強襲科の授業はどこでやるの？」

「今日は第2アリーナだよ。2人の紹介も済ませたいからね」

……へ？2人？ナガレはもともと強襲科だし……まさか。

「……シロナも強襲科に？」

「その絶望に満ちた表情が気に入らないけど、そういうことだから」

「……ナンデ？」

「だって、研鑽科で習うことは一通り終わっちゃったんだもん。ここらでまたポケモンを鍛えるのもいいかもって思ってるね」

なるほど、つまり……

「俺はそのついでだと……？」

「え？今更気づいたの？」

「……………」

帰りてえ。なにもかまなくり捨てて帰りてえ。

「……フン。女が戦場に立つ日が来るなんて……ケガしても知らねえぜ」

「あら、ポケモンバトルに性別なんて関係ないわ。男女差別なんてずいぶん古い考えね？」

「ぐっ……………」

「なに、2人の実力はすぐにわかるさ。なにせ、今日から同じ学科の仲間だ。……さあ着いたよ」

校舎を出てしばらく歩き、目的の場所にたどり着く。ドーム型の建物はいかにも耐久性を徹底したような重厚な造りをされていて、開くにも一苦労しそうな扉がまた俺のやる気を削いだ。

ナガレとダイゴが左右から扉を開ける。ゴゴゴ……という音を響かせ、新たな変化が本格的に幕を開けた。

「強襲科へようこそ、2人とも」

『おい、あれ……』

『黒姫……噂は本当だったのか』

『俺、生きててよかった……』

『お姉様とご一緒できて嬉しいですわ』

扉を抜けると、やはり生徒たちの視線は一心にシロナへ向かっていった。その視線を受けてもまったく動じない辺り、シロナも肝が据わってるな。

「みんな、集まってくれ！」

ダイゴの一声でざわつきが止み、きびきびとした動きでアリーナにいた生徒が集合する。さすがは強襲科トップというべきか、統率力も大したものだ。

「新しい仲間を紹介しよう。まずはシロナ。知っての通り、その実力は折り紙付きだ」

パチパチパチパチパチ！と拍手の大喝采。人ごみから離れた位置にいるナガレも、仕方ないと言うように手を叩いていた。

「次にクロマ。ポテンシャルは僕でも計り知れないものを持っている。仲良くしてやってくれ」

パチパチパチ……と、いかにも情けない拍手。ここまでひどいとさすがに傷つくんだけど……。

「今日は2人は見学だ。強襲科がどういうものかを理解してほしい。特にシロナは……」

「石採りのために代わりに統率なんてごめんだからね」

「……ははは、当然じゃないか」

だったらその冷や汗はどういうことなんだろう。

四天王2人の会話をぼけーっと聞いていると、解散を唱えたダイゴが不意にこちらを向いた。さきほどの表情とは打って変わり、真剣

さが色濃い表情だ。

「クロマ。さっそく明日、僕は君にバトルを申し込む。しっかり準備を整えておいてくれ」

「いや、俺は……」

「拒否権はないよ。そういう制約だ。シロナと同じく、僕は君の実力が見たい。クロマ、君はシロナや僕とは……違う何かを持っていると僕は考えている。僕はそれを見極めたい」

俺の説得は一蹴され、ダイゴに逆に説得されたような形になってしまった。それに心を打たれたワケじゃないけど……その押しの強さに、俺はいつのまにか首を縦に振っていた。

「クロマー。ちょっといい？」

「よくない」

やがて午後の強襲科の訓練を終え、それと同時に寮へ帰っていく生徒がちらほらと現れる。熱心な生徒はまだ続けるようだが、俺とシロナは今回は見学だったから残る義理はない。そんなとき、シロナに声をかけられた。すぐさま否定の言葉を返す。

「これからひまでしょ？ちょっと買い物に付き合ってくれない？」

「俺の意見はスルーなんですネ……」

とは言うものの、結局最終的には乗り気になってしまうのが悲しいものである。けどまあシロナといえるのは楽しいし、青春してるなあって実感できるし。俺にとって損がないのも事実なのだ。今日は買い物が目当てらしい。

若い男女が2人きりでショッピング。ということはつまり……

「なるほど、デートだなっ！」

「はいはい、友達デートならしてあげるから。デパートまでは近いし、自転車で行こっか」

あーれー？普通ここは照れながら「そ、そんなんじゃないわよっ！」って言うところじゃない？異性扱いされてないんですね、わかります。

押し寄せる衝動をぐつとこらえ、校門を目指してシロナの少し後ろを歩く。相変わらずの鮮やかな金髪に黒の改造制服が似合っている。こんな幼なじみを持って俺も鼻が高いなあ。もう少しおしとやかだつたら……ないものねだりはやめとこ。

「そつえば買い物っていつでも何買うんだ？デパートってことは中心街に行くんだよね？」

「そのつもり。ほら、今日見学して強襲科で練習してる人たちがサポーターとかつけてた人いたでしょ？せっかくだからいろいろ揃えよっかなって思ってたね」

バトルにサポーターいるのか……そんな過激なバトルはぜひとも遠慮したい。

そこまで考えて、ようやく強襲科……バトル専門の学科に入ったのだと実感した。これからはまさにバトル漬けの生活になるだろう。当然、俺にとっての危険の確率も高くなる。

明日から憂鬱だ……さっそくダイゴとのバトルがあるし。なんとか1on1にこぎつけないと……。これからのバトルに忙しいと簡単に予想できる日々に、大きなため息をついた。

「……なによ。そんなに嫌がらなくてもいいじゃない……」

「う？シロナ、なんか言った？」

「……なんでもない！じゃ、あたし自転車取ってくるから！」

校門に到着するなりダッシュで自転車小屋に向かうシロナ。ぽつんと残された俺は寮へと帰っていく生徒をぼんやりと眺めていた。

ここにいる人たちの大多数は、目標を持ってその目標達成のためにがんばっているんだろう。将来の夢のために、努力をしているんだろう。俺にはそれがない。

俺の力は、能力の類なら望めばなんだって手に入る。望むだけで手に入る。それゆえに努力をする必要がない。

最初にこの力を手に入れたとき、それはもう飛び上がって喜んだ。

そして1度使って……マイナスの方向で驚愕した。

望んだ力は手に入れることができた。そしてそれは、“生涯永遠俺の力になった”。

そう。

俺の力は、後戻りができなかったんだ。

強力ゆえの副作用。この力を他人に見せるわけにはいかない。こんな人外の力がバレれば、間違いなくバケモノ扱いだろう。他人からの弾圧を受けて耐えられるほど、俺は強くなってる。

確かに俺は力を望んだ。結果、高い基準のバトルセンスを手に入れた。バトルしたとき、その経験の吸収力はケタ外れになった。

それだけならまだいい。まだ人類という枠組みから外れてない。まだ才能と言ってごまかすことができるだろう。

だが、俺のこの力は、人類の壁を望んだだけで越えてしまう。望んでしまえば、俺は人外へと成り果てる。まだまだ子どもだった俺が、そんなものになりたいと思うはずがなかった。

それっきり俺はよほどのことがないかぎり力を望むこともバトルをすることもなくなった。俺はそれを『危険』と判断したから。

どうして、こんな力を受け入れてしまったんだろう。少し考えればわかったはずなのに。破滅すべき禁忌の能力だと気づけたはずなのに――……

「お待たせクロマ……クロマ？どうしたの？」

「ん……や、ちょっと感傷的になってた」

自己嫌悪に陥っているところにシロナが自転車を押して戻ってくる。別に昔を悔やんでも得られるものなんてないんだ。無駄な時間を過ごしたな。買い物でもして気分リフレッシュといこう。

そのためにはまず……

「自転車1台でどうやって行くつもりなのか教えてほしいんだけど？」

「し、仕方なかったのよ。残りの自転車は1台しかなかったし。それにほら、クロマは男の子じゃない」

「なるほど。つまり走れ、と？」

「あ、あはははは」

「はっはっはっはっは」

……ふう。

「帰るわ」

「え、ええっ！？こ、ここまで来たんだから一緒に行けばいいですよ！？」

「その一緒に行くっただけで体力がガリガリ削れるんだよ！」

「男の子でしょ！？たかが5、6キロくらい走りなさいよっ！」

「なんて無茶言いやがる！？ええいこうなったら——」

「きゃっ！？ちょ、ちよっと！？」

後ろの荷台にかばんを座布団代わりに置いて座る。よし、これで万事解決だ。

「ど、どつでもいいけどっ！」

「うん？」

「あ、あんまり近寄られると、運転しにくいつていうか……！」

「ああ、りょーかいりょーかい」

少し後ろに下がると、気のせいか不服そうに自転車をこぎだすシロナ。落ちないように俺はシロナの肩を掴む。

フラフラ……

ガシャンッ！！

「この作戦はなしだ」

「な、なんなのよっ！……って、今思ったら普通これって逆よね！？女の子にさせることじゃないわよね！？」

「や、シロナならきつと……って思ったんだけど。はあ……じゃあ俺こぐよ。ポジションチェンジね」

「納得いかないわ……」

自転車を降りるなり腕を組んで思案顔になるシロナ。どうしたんだ？と思ってシロナの方を見ると、その後ろに見回りしかすることがないと生徒の間でウワサになっている男性教職員（54）が来るのが見えた。

「やべっ！早く乗れシロナ！」

「え？ちょ、待つ——」

「黙ってる！舌噛むぞっ！」

1回言ってみたかったセリフシリーズ第1弾。俺、ハンドル握ると性格変わるタイプ。おっと、そんなこと言ってる場合じゃないか。ガッ！と一気にペダルを踏む足に力をこめる。目の前に広がるのはちよっとおませなく・だ・り・ざ・か♪

「イエ——ッ！——」

「ぎゃああああああああああああああっっ！！
??」

おらおらっ！どかねえと轢いちまっぜエ！？ふはははは！！

「くくくクロマあつ！止めなさいっ！今すぐっ！！」

「え、なに？聞こえない」

「いやあああああああああああっ！！？ってバカなんでまだこいでるのよあっ！？速い速い速いっ！！」

「速いってこたぁいいことだ！」

「アホかあああああああっ！！無理無理無理無理無理っ！！ひやあああああああっ！！」

「おう、しっかり掴まっとなけよ？」

「なんでアンタそんなに冷静なのよっ！？ぶぶぶブレーキ！ブレーキ！！」

「風にーなりーたいーってかー」

「こらああああっ！！ブレーキング！ぶねーきんぐうううう——っ！！」

「Breaking（破壊すんの）？」

「Braking（制動しろ）っ！！」

ああ、ブレーキか。確かにブレーキはレースの基本だ。あのコーナーを曲がるときの甲高い音はいつ聞いても感情が高ぶって仕方ないぜ。

「なあシロナ。ちょっと相談タイム」

「ええいいわよ！！いいですとも！！相談でもなんでもするからさつさとブレーキかけなさいこのおバカあっ！！」

「そうそう。それなんだけどさ」

クイクイ、と両手を動かして反動がないのをアピール。そう、反動がないんですよ奥さん。

「ブレーキ壊れてね？って感じ」

「いやああああああああああああああっ！！！！」

「！」

「いやああああああああああっほおおおおおおお！！！」

「やかましいわあ——っ！！！」

シロナさんにだけは言われなかった気がしなくてもない。

「そしてコーナーである」

「死んだ！！これ絶対死んだああああああああっ！！なんとかしなさいよクロマあっ！！！」

「んー、じゃあ俺の合図で体重移動な。はい、さんにーいちぜろ」

「速いわっ！！後で覚えときなさいよ——ねっ！！！」

シユアアアッ！とタイヤのゴムが地面を滑り、乾いた音と焦げくさい匂いが生まれる。どうやら無事コーナーを曲がりきったようだ。だが、この音と匂い……嫌いじゃないぜ。

「シロナ、やべえかもしれないっ！」

「な、なに？今度はなによお！？」

「パンクしたらワリカンだろ？俺今金欠なんだけど」

「全額負担だバカあああ——……」

俺とシロナはそんな感じに、絶叫マシンさながら中心街までの下り坂を移動していくのだった。

「だからこぐなっ！！」

「うわ、結構どきどきしてきた。シロナくつつきすぎだって……」

「あたしは別の意味で心臓がどつきどきなんですけどねえ——！！」

vol.9 さけめ

「——信っじらんない！どんな思考回路があれば2人乗りであそこまでスピード出せるのよ！？」

やがて中心街の大きなショッピングモールに到着し、シロナに俺のチャリテクの感想を聞いてみたところ、よっぽど怖かったのか噛みつかんばかりに涙目寸前の顔で睨まれ罵られ……まあ早い話がたいへん激怒なさってた。

「ちえ……。なにさ、自分だって騒いでたくせに」

「ああいうのは怯えてたつていうのよこの爆走バカ！もう絶対アンタの後ろになんか乗らないんだからっ！！」

「……でも、言う割には意外と楽しかったりしちゃう系？」

「んなわけあるかッ！！」

そのままずんずんと早足でエスカレーターを一気に登っていくシロ

ナ。どうやら割と本気で怒ってるみたいだ。こういうときは怒りが静まるのを待つに限る。触らぬ神に祟りなし。ヘタにちよつかいをかけて怒りのボルテージを上げるのは得策じゃない。シロナの攻撃力を上げることになんのメリットもないし。

駆け上がるシロナと反対にゆっくりとエスカレーターで上を目指す。そのままトレーナーズショップがある階まで登ると、すでにそこにはシロナが商品片手にあちらこちらに目移りしているところだった。さっきまでの態度とは裏腹に実に楽しそうな表情だ。

(……女ってショッピングが好きだよなあ……)

もちろんシロナも例外ではない。さて、どうしようか。俺はショッピングが好きなタチじゃないし、シロナに付き合うのも正直めんどくさい。それ以前にまだ怒ってる真っ最中のはず。こんなのデートじゃない……。

頭の中で簡単な計算式が浮かび上がり、その結果テキストに歩き回ればいつかという結論に至ったのち、俺はトレーナーズショップを背に散策を始めた。

「ふー……」

飽きた。速攻で飽きた。音速を超えて飽きた。

俺は今屋上に据え付けられたベンチに座って風に当たりながら自販機で買ったジュースを口に運んでいる。強くもなく弱くもないちょうどいい風が吹き付け、忍び寄る睡魔に身を任せ――

「……いやいや。さすがにそれはまずいよな……」

それでも眠いのは紛れもない事実。こんなことならサイコソード買っとけばよかったな……と、手に持つミックスオレに視線を落とし、再び口に運び、一気に飲み干す。刺激のない甘さ重視のジュースはやはり睡魔を払うには力不足だった。空の紙コップをベンチに置き、本格的にまぶたが重くなった、そのとき。

世界から、音が消えた。

「……………っ?」

人の集まる場所特有の喧騒が一瞬で振り払われ、静寂が空間を支配する。これで寝るためには素晴らしいロケーションになったが、そのあまりの異常な現象に睡魔はあっさりと吹き飛んだ。

ここまで音の一切がないのは気味が悪い。ベンチから立ち上がり、空の紙コップを捨てて辺りに目を配る。子ども連れの夫婦やポケモンと戯れる人がいる辺り、人がいなくなったワケではないようだ。

人がいなくなったワケではない。

俺の視界に入る事象全てが、動きを止めたただけだった。

「……………、」

弾けるような笑顔の子ども。一息ついて疲れを癒す親。トレーナーにじやれるポケモン。

生き物だけに当てはまることじゃなかった。髪を踊らせるそよ風も、自販機の起動音も、流れる雲の動きも、その全てが停止していた。何一つ動きを見せない中、まるで世界に取り残されたように俺一人が唯一存在している。階下の喧騒も聞こえてこない。なら、下も同じような状況だということだ。

「……………そうだ、シロナは……………!?!?」

もしかすると、シロナも同じような状態かもしれない。不安が雪だるま式に募る中、俺は急いで階段を降りていった。

「……………」

後ろから突き刺さる視線に気づくことはなく、俺はその場を後にした。

予想通り、デパートの中も屋上と同じような状況だった。歩みゆく客人の全てが止まっている。俺はそのまま動かない人混みに紛れるように進み、シロナと別れたトレーナーズショップにたどり着く。が、その中に動くものもなければあの輝くような金髪も見つからなかった。

ここで俺は躊躇する。仮にシロナが俺のように動けるとして、彼女

の名前を大声で叫べばすぐに合流できるはず。もしシロナが停止状態だったとしても試す価値はあるはずだ。

だが、それだけは、大声を出すことはどうしても実行する気になれなかった。正直に言うとな俺は結構な臆病者だ。幽霊は怖いし、辺り一帯がまったくの無音の中でバカでかい声を出すのは少し怖い。それに自分の居場所を知らせたくも――

(……知らせる?……誰に?)

それはもちろんシロナにだろう。自分は動けるということをシロナに教え、一緒に行動するために自分の居場所を知らせる。試してみても損はない。

だがそれは、動けるのが俺とシロナだけならの話だ。

もし他に動ける人間がこの近くにいたとしよう。俺が声を張り上げればシロナはもちろん、俺の声は無音の空気の中を盛大に響き渡り、その人間の耳にだって伝わるはず。そうすれば、当然のことながらその人間は声の発生源である俺を見つけるために探すだろう。

この異常事態を引き起こしたかもしれない、その張本人を召喚してしまうかもしれないのだ。

もしその犯人がこの状況を創りだして悪事を働こうと画策しているとすれば、動ける俺は邪魔者以外の何者でもない。そのために俺を

見つけたその人間はどんな行動を取るか……それだけは絶対に避けなければいけない。

今の推測はただの『たれば』の話であり、憶測に過ぎない。それでもその可能性がある以上、俺の行動を制限するには十分な効果があった。

ならばどうする？

——力を望むしかない。

今はとにかくシロナに会いたい。自分ただ一人の世界は怖い。恐ろしい。シロナも停止状態だったら……それはそれでそのとき対策を練ればいい。

今必要な能力は求める場所を特定するチカラ。一定した世界の中で違和感を感じ取るチカラ。すなわち——【空間認知力】。それ以外のチカラはいらない。必要ない。

辺りを見回し状況が改善されていないことを確認し、人知れずため息をつく。きつとこれを最後にしようとか心に誓い、俺は集中するために目を閉じ、意識を脳細胞に向けた。

——イメージは一滴の油を機械に差すように。

——俺の意識に輝く液体を注ぎ込む。

——無限に存在する輝く液体。海を彷彿させる量の液体は意識を覚醒させて。

俺の心身は^{チカラ}——進化を起こす。

(……………)

頭のこめかみ部分が熱を持ったのを感じる。進化を使ったときに感じる副作用のようなものだ。またドーピングを使っちゃったか……もう使いたくないって思ってたのに……いや、今はそんなことを言ってる場合じゃない。俺は新しくストックされた【空間認知力】をフル稼動し、周囲の状況を即座に把握しにかかる。

頭は水で満たされたかのように冴え渡っていた。新たなチカラが恐怖を振り払い、万全の状態を生み出す。網を張り巡らせる感覚、それを通じて違和感をキャッチする——。

(……………いた)

陳列された商品棚の向こう。端っこの通路の突き当たり。そこで物陰に隠れるように小刻みに動いている。震えているのだろうか。俺

は足音を殺し、その人間のそばに駆け寄る。輝くような金髪に黒に統一された改造制服。間違いない。シロナだ。

「シロナ」

俺の声を聞いた瞬間に俺の方を振り返るシロナ。俺は自分の口元に人差し指を当てて『静かに』というジェスチャーをした。せっかく能力を使っただのに騒がれたら元も子もない。俺は小声で諭すようにシロナに問いかけた。

「確認するぞ。シロナ、お前は動けるんだな？そしてこの現象に関与していない。間違いないな？」

俺の言葉にコクコクと頷くシロナ。強張った顔が徐々に緩んでいき、今度は疑いの眼差しを周囲に向けた。

「ねえクロマ……一体何が起きてるの？みんな止まって……まるで時間そのものが止まっちゃったみたい……」

時間が止まる……か。なかなか言い得て妙だな。確かにこの現象は時間が止まるという表現がピッタリだろう。

再び周りに視線を巡らせ、これからの行動について考えたとき――
――中断していた動きが再び続き、喧騒が辺り一帯を包んだ。

「……………戻ったな」

「……………うん」

その後、すでに買い物済ませたシロナを引き連れてデパートを出る。また2人乗りをするか？という俺の質問にどつき返すくらいには俺たちの調子は戻っており、その日の友達デートはお開きとなった。

——その日の夜。

「ふいふ……」

タオルで濡れた髪をわしゃわしゃと拭き、ベッドの上に横たわる。
重力に従って落ちた身体はふかふかのベッドでバウンドし、沈み込むような安心感が俺の身体を包んだ。

今日は疲れた……。バトルをして、走り回って、自転車で爆走して、デパートを歩き回って。そしてなにより、能力を使った。

「……………うう」

タオルの上から押さえられたこめかみの部分は、能力を使ったときに現れる熱はもう感じない。ああもう……。ほんといい迷惑だ。そもその話、一体何が原因であんな事態になったんだ？あんな現象、見たことも聞いたこともないぞ。

（知りたくもなかったしさ……）

とにかく、今日はいろいろありすぎた。電気を消すと溜まった疲労が連れてくる睡魔。今日もダイゴは石採りに出かけているみたいだけど、探しに行く気力も体力もない。なんて濃い1日だったんだ……。

「ふああ……」

ナイトスタンドの明かりも消し、完全な暗闇状態を作る。疲れたけど……この疲労感が逆に心地いい。

まぶたが重く感じる。睡魔になされるがままの俺の意識は呆気なく切り離され、あっさりと夢の世界へ旅立った。それほど眠気が限界だったということだろう。

だから、俺は忘れていたんだ。

——ユーレイの存在を。

「……………んがっ!？」

がきん、と身体が固まる。どうでもいいけど、《かなしばり》を受けたポケモンもきつとこんな感じなんだね。いやマジで。

「……………がくっ」

とうとう限界を超えた睡魔は、気絶というカタチで俺の意識を刈り取った。

チュンチュン……と、鳥ポケのさえずりと窓から差し込む光で目を覚ます。

「……………昨日……………」

何か、あった。

だけど、思い出せない。

なら、思い出さない方がいいんだろう。忘れられるのなら、忘れてしまえ。

「…………学校行こう」

都合のいいことに、体調はバツチリだ。疲労感が残るということはない。

頭だけがぼんやりとする中、広い寮の一室で、せめて顔を洗ってすつきりしようと1人起き上がるのだった。

……結局、ダイゴのヤツ帰って来なかったな。洗面所でバシャバシヤと顔を洗い、ついでに歯も磨いておく。みんな勘違いしてるかもしれないけど、朝の歯磨きは朝ごはんの前にするのがいいらしい。理由は寝てる間にバイキンが口の中に溜まるからなんたらかんたら……まあそんなかんじ。ダイゴの受け売りです。

そんなこんなで騒がしい食堂に行く気になれず、自分で朝食を作るためにキッチンに入る。作るとは言うものの、冷凍食品を皿に盛ってチンするだけなんだけど……

（ダイゴの分……どうしよ）

俺の分とダイゴの分の皿を出し、少し悩む。うーん……やっぱ帰って来ないかな……。それに、帰って来るにしろ朝食は寮の食堂で食べるだろうし。そう考えて俺の皿だけに盛り付け、ダイゴの皿を片付けようとした時。ガチャ、というドアの開閉音が聴こえてきた。

びくつと肩を震わせてしまったが、すぐにダイゴが帰って来たと考え直す。結局自分の部屋に戻って来たらしい。足音がだんだん近づいてくる中、ダイゴの皿にも冷凍食品を盛り付け、レンジにかけて時。どさつという音が聴こえ、そっちに目を向けると、

「な、なな……なんなん、なん……！」

いつぞやの隕石娘、リリネが立っていた。

「ナン？ああ、カレーにつけるとうまいよな。そうなんですか。ナ
ンだけに」

「……………」

バカなことを言ったら空気が凍った。

「……………じゃなくて！な、なんであなたがここにいますか！？不法侵入ですよ！？」

おっかしいな。まさか不法侵入者に不法侵入って言われる時代が来ようとは。

「なんでって……だってここ、俺の部屋だし」

「は、はい！？だ、だってここ、205号室ですよ？」

「まあ、そうね」

「ほら！見てください。私がもらった鍵にはちゃんと205号室って書いてありますっ！ここは私の部屋です！」

突き出すように自分の部屋の鍵を見せるリリネ。その鍵には『205号室』という文字が。

「なるほど、確かに205号室の鍵だ。間違いない」

「ふふん、そうでしょう？さあ、わかったのなら早く出ていってもられますよね？」

「え？やだ。ここ俺の部屋だし」

「ど、どうしてですかっ！？確かにここは205号室で！私の部屋ですっ！なのにどうしてあなたの部屋になるんですかっ！！」

こいつも『!』マーク好きだな。まあ、そんなことはどうでもいいとして……ふふふ、そんなに聞きたいのなら聞かせてしんぜよう。

ここが俺の部屋である理由。それは……っ!!

「……、男子寮」

「……………へ？」

「だから、男子寮。女子寮は向かいね。番号同じなのは仕方ないけど」

まさか寮を間違えるとは……

俺の言葉に頭がついていかないのか、ぽかんと口を開けて呆然とするリリネサン。が、ようやく理解が追いついたのか、

「……………ッ!!!!?」

ポツと顔から火が吹き出るように赤くなった。

「あ、あゝゝゝめめめめめ……！」

「顎？米？ごめん、しりとりになってないぞ？」

「じじじじ……ごめんなさいっ！し、しし失礼しま——きゃあっ
！？」

ヘッドバットさながら頭を下げ、踵を返した途端にすっ転ぶりりネ。
それと同時に、

……くう。

「——っ！？あ、あうう……」

……すごいな。改めて人類っていろんな才能持つてる種族だよな。
りりネに至っては……残念な方向だけど。

「……冷凍食品でよければ、ごちそうさせてくださいな」

背後でチンという音を聞き、この上なく真っ赤な顔をするりりネ。
コクンと小さく頷くと、俺たちはテーブルに座って一緒に朝ごはん
を食べるのだった。

「……ういゝす」

かばんを担ぎ、ホコリっぱい自分の教室に到着する。昨日の一件を引きずっているだろうとこっそり入ってみたが、なにやら全員落着きがなく、正直挙動不審だ。今さらだけどね。

「ん？ああ、おはようクロマ。今日は遅かったね」

「けつ。今日も、間違いだろ」

席に着くと、机の上に石を並べているダイゴとちやぶ台に足を乗せているナガレに声をかけられる。ナガレに至っては絡まれる、っていう表現の方が似合いそうだけど。

「おはよ。……なんか今日はいつも以上に落ち着きがないよな。シロナがまだ来てないから？」

一応、シロナは俺の前の席だ。Fクラス唯一の女子。細かく言うとしロナはSランクだから違うんだけど……クラスが妙に落ち着きがないのはこのせいかもしれない。もしシロナがFクラスを出ていたら……

「……確実に暴動が起きるな」

「うん？何か言ったかい？」

「や、なんでも。それよりシロナは？」

「シロナはまだ生徒会室じゃないかな？転校生の書類を任されていたからね」

「あー……転校生……。そういうことが」

そっいえばあのドジっ娘も昨日のアクシデントの内に入ってたんだっただけ……結局Fクラスだったのか。

「見るからに鈍そうだったしなあ……振り分け試験で遅刻でもしたんかな」

「え？クロマ、転校生のこと知ってたのかい？」

「まあ多少は……ナガレはどう思うよ？」

「ってかちゃぶ台に足乗せてもダサいだけだと……いや、なんでもない。」

「ふん、群れることに興味はねえ……。転校生だろうがなんだろうが、知ったことじゃねえな……」

「そう？結構かわいかったぞ？」

「ハッ。俺はデメエと違ってんなことでいちいち騒ぐような小せえ漢おとこじゃねえんだよ……わかったら失せな」

「聞いたかみんな。ナガレってブス専らしいぜ」

「んなこと一言だって言ってねえだろうが——っ！！」

至って小さな漢、ナガレだった。

「ナメやがって……俺がブス専なワケねえだろうが……!!」

「ちょ、危ないこと口走りながらこっちくんな!? ホモだと思われるだろホモナガレ!」

「ホモをくつつけんじゃねえっ!! もうキレたぜ……覚悟しろ、せいぜい神に命ごいしやが——」

「神って……! うははははっ!!」

「んのヤロオオオオオオッ!!」

「HRを始めるぞ……って、またナガレか。早く席に着け」

ナガレをからかっていると、教室のボロいドアが開き、筋骨隆々とした体躯の教師、ニシムラが入ってくる。この問題クラスの担任だ。

その腕力はまさしくゴリラ、最近では知能指数もチンパンジー並というウワサもまことしやかに囁かれている。そこらの体育教師やオランウータンでは歯が立たないだろう。

「クロマ、そんなに俺の補習が受けたいか？」

「あ、あはは……遠慮します……」

「ナガレも席に着け。今日はいろいろと報告することがある」

「……クソッ」

ニシムラの一声で騒がしかった教室がにわかに静まり返る。普段ならもつとうるさいほど騒がしいんだけど、やっぱりみんな転校生のことが気になるらしい。にしてもなんだろうね、この学園生活的イベントは。

……まあ割とめんこいだったしな。重度のドジっ娘だけど。

「では、転校生を紹介する。リリネ、入ってこい」

「は、はいっ。んんー……！」

ガタガタと焦らすように教室のドアが揺れる。どうやらボロすぎて開きにくいらしい。ここでもドジっ娘っぷりを披露するか！？

「んー……きゃっ！？す、すみません」

「うむ。ドアは開きにくいから力で開けようとするなよ。ほら、真ん中だ」

「は、はい」

が、俺の期待をよそにニシムラが一息にドアを開け、再びその見慣れない制服とご対面。全員の視線が集中する中、リリネはオドオドといった具合に教壇の横に立った。

改めてよく見てみると、やっぱりなかなかめんこいだ。赤毛の髪は両側で縛られてツインテールにされ、低い鼻や活発そうな目から活動的な印象を受ける。身長もシロナと同じくらいかな？男ばっかで嫌気がさすと愚痴っていたシロナが聞いたら喜びそうだ。

「り、リリネって言います……よ、よろしく願いしますっ！」

ペコッと小動物みたいに頭を下げるリリネ。だがドジっ娘だ。

『うおおおおおおおおおお——っっ！——っっ！——っ！——！』

「！」

「きゃあっ！？な、なんですかっ！？」

おとなしかったクラスが弾けるように騒ぎ出し、ひどいヤツは涙ま
で流している。お前ら……そこまで女子に飢えてたんか……

ちなみに男泣きが大変汚いのですぐに目を逸らすことにした。同情
？なにそれオイシイノ？

「落ち着かんか！まったく……リリネ、お前はクロマの後ろだ。あ
そこの空いてる席に——」

「く、クロマっ！？」

……あ、そういえば第一印象で結構嫌われてたな……それに今朝の
ことも相まってるんだろう。うわー、睨んでる睨んでる。せつかく
だから手を振り返してみよう。はろはろ。

「なんだ、知り合いか？ふむ、クロマやダイゴのそばにいるならす
ぐに溶け込めそうだな」

「い、嫌ですっ！それに知り合いなんかじゃ、」

「なんだよ、俺が通りかからなかったらきつと道ゆく変態にそのオレン……」

大公開時代。

「ぎゃあ——っ！？なんで知ってるんですかーっ！？」

「いや、おれん……俺ん家こないか？」

「断固行きませんっ！またあなたと会うなんて最低ですっ！それ、今朝は間違えて入っただけですからっ！勘違いしないでくださいっ！！」

うわバカそんなこと言ったら……！

『部屋に入った……だと……？』

『今朝……今朝……？』

『……朝帰りだとお……？』

『『『よろしい。ならば虐殺だアア——ッ！！』』』

殺気ついたクラスメートが奇声をあげながらカッターやコンパスな

どの、比較的殺傷能力の高い文房具を持ちながら振りかぶり、躊躇もへつたくれもなくオーバー스로ーで投げる。ふんっ！甘いわ！

「ちやぶ台返しっ！」

シュカカカツ！と木製のちやぶ台に大量の文房具が突き刺さる。クラスメートの命は文房具より軽いんですか。そうですか。

続けてシャーペンを持つクラスメート。そのとき、さすがに看過できないと踏んだらしいニシムラの怒号が響いた。

「落ち着かんか！まったく……ほら、リリネは自分の席に着け。知り合いがいるなら男ばかりでもやっていけるだろう。困ったときは聞きにこい」

「は、はあ……。ううう……。屈辱です……」

転校初日、早々に屈辱に打ち震えるリリネだった。

「では、授業を始める。教科書の――」

そして新たなクラスメート、リリネを加えた授業が、チャイムと同時に殺気の漂うクラスで始まるのだった。

……だから睨むなって。

「俺、悪いことしてないのにさ」

「言うにこと欠いてなんですかそれはあつ！」

「うるさいぞリリネ！授業中だ！」

「う、ううう……」

……初日早々、怒られて涙目のリリネだった。

俺は人知れずため息をつき、授業に耳を傾けた。

vol.11 ひだまりのしたで（前書き）

vol.10を一部書き換えました。そちらもご覧ください。

感想・アドバイス・誤字指摘などお待ちしています。

新しいクラスメートを加えた授業が多少のハプニングが起きつつも滞りなく進み、昼休みが訪れる。1日の中で1番心の休まる時間帯。そんな中、俺は職員室に呼ばれていた。まったくちっとも心が休まらない。

ついでに付け足しておくと、俺が職員室に呼ばれた理由は素行が悪いとかいう理由ではないらしい。ってか職員室って無駄にコーヒーの匂いが充満してるよな。どんだけコーヒー飲んでるんだよ。ちょっとくれ。

閑話休題。とにかく、目の前のニシムラの話によると、

「お前にリリネの学園案内役を頼みたくてな。お前たちはどうやら知り合いのようだしな」

ということらしい。補習受けるとか言われなくてよかった……みたいなことを思ったのは秘密。

「ええ……いやですよ。そういうことならシロナに任せればいいんじゃないっすか？」

「シロナは四天王だろう。転校初日から四天王に案内させては必要のない尾ひれがついてしまうと思ってな」

「う……じゃあダイゴとか」

「男の分余計に悪いだろうが」

「……ナガレとか」

「ナガレは最初から選択肢外だ」

「ですよー」。

「そもそも、俺とリリネサンは別に知り合いつてワケじゃないっすよ。学園で初めて会って、そんとき嫌われたっただけです」

今朝のことは当然秘密にする。あとでリリネにバレたらなんて言われるかわかったもんじゃない……ってかむしろ俺の方が変な噂が立ちそうなんですけど。

「充分じゃないか。嫌われたのなら、仲直りにはちょうどいい機会

だと思うが?」

「うつ……」

「それに、男ばかりのクラスでは引っ込み思案になってしまわないか不安だ。そのためにクロマ、お前が友達になってやれ。どうだ?」

「……どうなっても知らないっすよ? 第1印象最悪でしたから」

「引き受けてくれるか?」

「やりますよ。その代わりに報酬としてコーヒーおごってくださいね」

「ほう? まあそのくらいならいいだろう。補習室でたっぷり飲ませてやる」

「げっ……や、やっぱり遠慮します! んじゃっ」

逃げるように職員室から出ていく。危ない危ない……あのまま補習なんて死んでもごめんだ。

さて、昼ごはんもまだ食ってないことだし胃になにか入れたいところだが、教室には殺氣づいたクラスメートがいるからな……食堂にでも行くかな。

ザ・テキトーに今日の昼の予定を決めて、学園の食堂に向かって今日食べるメニューを考えていた、そのとき。

背後から、なにかに引つ張られるような感覚に襲われた。

「——っ!？」

ガチン、と体がこわばる。踏み出していた足は根を張ったかのように地面にくっつき、離れられない。

まさか……真昼間からユーレイとか、勘弁してくれよ……? そう思いながら、いまだに引つ張られ続けている方……後ろを見ると、

「……………ッ!」

——誰もいない。

いつそのこと走って逃げちまおうかそうするしかないよしクラウチングスタートでいくぜ、と思った矢先。俺のちょうど真下から声が聴こえてきた。

……下？

「くろま」

「……………」

「……くろま？」

「……心臓に悪いぜ、チル力さんや……」

「……………」

柔らかそうなほっぺに指を当て、かわいらしく首を傾げる女子生徒、チル力。俺の後輩で中学１年生だ。初めて会ったとき……広い学園内で迷子になっていたチル力に道案内してやったのだが、そのときにどうも気に入られたらしく、廊下で会えば話をするくらいに仲がいい。

「くろま、心臓が悪いのか？」

改めてチル力を見ると、とても整った顔立ちと低い身長、艶やかな

黒髪から和風の人形みたいな印象を受ける。舌足らずな感じだが、表情は豊かだしノリもいいし、一緒にいて楽しいということは間違いない。華奢な手が俺の制服を掴んでいるあたり、ユーレイの正体はチル力だったようだ。

「くろま……？」

「あ、ああ。悪い悪い。で、チル力さんは俺になにか用か？」

ちなみに俺がチル力のことをさん付けで呼んでいるのは……まあ、相性みたいな感じだ。一緒にいて楽しいんだが、どうもチル力には敵わない、逆らえないと感じてしまう。うーん……なんでだろ？

俺の質問を聞き、ガサゴソと肩から下げたポーチの中をまさぐる。口で示すのではなく、行動で示すのがチル力の性格だ。やがて小さなポーチの中から、これまた小さな弁当を取り出すと、

「今日は、とってもいい天気」

「ん？ああ、確かにな。秋晴れっていうんかな」

「だから、一緒におべんとーを食べましょう」

ふむ。

「外で？」

こくり。

「2人で？」

こくこく。

「2人つきりで？」

「……うん」

時間差で、今度は声を出して頷く。かと思いきや、自分の持つ弁当箱で顔を隠してしまった。若干顔が赤いのは気のせいだろうか。

でも、確かに今日はチルカの言う通り快晴と呼べる天気だ。食堂で食べるにはもったいないかもしれないな。

「よっし。じゃあ一緒に食うか。購買でパン買ってくっから……チルカさんもついてくるかい？」

「うむ」

ふわり、と微笑むチルカをパーティに加え、俺たちは購買という名の戦場へ意気揚々と向かうのだった。

「惨敗だった……ぐすん」

「くろま、よしよし……」

日の当たる芝生の上に座り、チルカの弁当と俺の戦利品を出す。結局あんパン2つしか買えなかった……やっぱスタートダッシュが肝心だよな。チルカに頭を撫でられながら今回の教訓を整える。目指せ夢のヤキソバパン。

「まあいいか……それより早く食べようぜ」

こくり。とチル力が頷いたのを確認してあんパンの袋を破き、そのまま頼張る。

「ただかせていただきます」

「……いふああひまふ」

チルカの仰々しいあいさつ。それを見て、一応俺もあいさつをしとく。……ああ。チル力が苦手な理由がなんとなくわかったかも。

チルカと一緒にいて、その屈託のない人格に触れていると毒気が抜かれていくのだ。例えるなら光と闇？どつりでチル力が苦手なワケだ。ナガレみたいにからかつて、チル力ならきつと素で真に受けてしまうだろう。嫌味を嫌味と取れない、チル力の純粋さが俺は苦手で、逆に気に入ってるんだ。やれやれ、矛盾もいいところだな……。

そのまましばらく、お互い無言で昼ごはんを食べる。なんだかんだ言っただけあんパンは結構うまかった。そういえばチル力の弁当はどんなだろうと覗き込むと、

「茹でブロッコリー、きんぴらごぼう、ほうれん草のおひたし、きゅうりの浅漬け、じゃがいものソテー……」

すこぶるベジタリアンだった。

「おつまさんやわにさんを食べるくらいなら……私は野菜を食べる」

馬や鰐って……もっとポピュラーなのがあるだろうに……。

「くろまにもあげる」

食べていたあんパンの上にじゃがいもを乗せられる。んじゃ、遠慮なく。

「へー、うまいなこれ」

「くろまがいるから」

なんとも嬉しいことを言ってくれるもんだ。

こついう嬉しい言葉をかけてくれる、優しくて心の許せる後輩。

それが俺の抱くチルカの印象だった。

そうしてチルカと一緒に、心が休まるのを感じる中、昼休みは過ぎていった。

のんびりとした昼休みが終わりを告げ、午後の学園の姿へ移る。俺は少し遅れて、つい最近通うことを強要され、バトルすることを強要された強襲科の訓練場所であるバトルアリーナに到着する。おかしい。俺の人権どこいった。もうこのままシロナたちの元から帰ってこない気がする。

まあ、そのことは今は置いておこう。今は。もちろんいつかは返してもらうつもりだ。法治主義なめんなよ？法律が俺の味方なんだからな！規律はあっちの味方なんだけど。こっちの方が断然有利なのに負ける気しかないのはなんでだろう。

さて、今日は初っぱなから昨日約束した（これも強制）バトルをするらしく、俺とダイゴは顔を見合わせるようにアリーナの中央で向き合っていた。一触即発の空気……とは程遠い、どこか弛緩した空気が俺たちの間に流れる。とても今からバトルする雰囲気じゃない。

その理由というのが……

「……なんでこんなにギャラリーが多いのか教えてほしいんだけど」

俺とダイゴを囲むように密集する生徒。2階の観客席も生徒で埋まっている。だからお前ら授業受けろって。教師涙目だろ。マジで同情するわ……。

「あはは……どうやら、シロナとのバトルも相まって噂が広まったみたいだね。勉強になるからって学科の先生たちが授業に取り入れたみたいなんだ。このバトルを」

前言撤回。教師全員、俺に土下座をすればいい。

はああ……と、疲れとか諦めとかその他もろもろ凝縮したため息を吐き出す。こんな観客（敵）だらけの中でテンションなんか上がるワケがない。精一杯の声援も、俺目当てじゃないのならやかましい叫びにしか聴こえない。なにこれアウェー感がハンパないよ。

「だけど、手加減はしないし、してほしくもない。さあ、形式を選んでくれ、クロマ」

そんな俺にトドメをさすかのようにダイゴに急かされる。なるほど、バトルしないという発想はないんですねわかります。

「……1on1。すぐに終わらせてやる」

「いいだろう。少し不満だけど、ね」

ダイゴの手が腰のホルダーに回り、視線が睨むようなものになる。俺は膝に手をつきながら、ダイゴの読みを看破すべく嫌々ながら頭を回転させた。

ダイゴは《銀帝》という二つ名の由来にもなったように、はがねタイプがメインの組み合わせだ。当然弱点が固まって苦戦することもあるけど、こういう連中はそんなバトルに勝利することに意味を見出だしたりしているんだろう。苦手な相性に対する戦い方なんて、それこそ熟知してるはずだ。

そのうえ、対策だって緻密なまでに張り巡らせてるだろう。例を挙げると、ダイゴのネンドールなんかその代表格だ。シロナとは一味違った厄介さを含む相手になる。

そんな相手に取れる選択肢は3つ。

（1つ、セオリー通り弱点をぶつける。2つ、堅実に自分にダメージが通らないタイプを出す。3つ、意表を突いて苦手タイプで応じる……だな）

1ならほのお、2ならみず、3ならいわ、などといった具合だろう。まず、3という選択肢を除外する。経験も脳細胞も足りないヒヨッコ相手なら、嬉々として攻撃を仕掛けてくるところに隠し玉として持たせた弱点を突く技でサッサと葬れるが、ダイゴにその戦法が通じるとは思えない。四天王ともあろう者が油断して隙を見せること

はおそらくない。

となれば、1か2、となるんだが……俺の手持ちのみずタイプはランターンしかない。ランターンは純粋なみずタイプじゃないし、昨日に続いて連戦させるのには気が引ける。よし、1だな。とは言うものの、タイプだけで勝敗が決まるはずもないんだけど。

試されるのはトレーナーとしての実力。育成に関しては人並みの能力しかないが、その分は俺自身が補う。それが俺のスタイルだ。

ホルダーからボールを取り出し、くると指先で回す。失敗。ボールが地面に落ちる。観客の間に押し殺した笑い声が聴こえて死にたくなった。

『両者、準備はよろしいですか？』

フィールドの外から審判役の声が確認するみたく聴こえてくる。その声に頷いたダイゴホルダーからボールを取り出し、頭上投げたボールが落ちてきたところを器用にキャッチする。それを見た観客たちのよりいっそう加熱する歓声激励大喝采。緊急事態緊急事態。俺の心に豪雨警報が発令されました。誰かマジで慰めてくんない？

地面に落ちたボールをノロノロと（悪魔の実的な意味ではない）拾い上げ、キッと涙目ながらギャラリーの連中を睨みつける。やつあたりじゃないよ！直接攻撃じゃないよ！だって今の俺がやつあたりしたら、あいつらスマブラ並に吹っ飛ぶぜ？知らんけど。

そんな俺の目に映ったのは、2階の1番前の手すりに手をかけてい

る黒髪小柄のチルカさん。よく見ると、手をメガホン代わりに口元に当てて一生懸命叫んでいるようだ。なにになに……？

『『『ダ・イ・ゴ！ダ・イ・ゴ！』』』

つてうるせえよ！かわいい後輩の声が聴こえねえだろうが！？

観客自体を排除したいところだが、なんとか我慢して雑音だけをできるだけ排除して耳をそば立てる。そのかいあってか、とぎれとぎれだがチルカの小さい声が聴こえてきた。

『……ろ……ば……』
『……ま……がん……』
『く………れ』

ろ、ば、ま、がん、く、れ

← ← ←

くろまがんばれ

「うおっしゃああああ——っ！！」

俺の絶叫がッ！アリーナ内をッ！轟き渡るウツツッ！俺の気合いの

声にギャラリードもは驚いたようで、にわかに場が水を打ったように静かになっていく。そんな中、俺の目は爛々と輝いていた。

ふふふ……もう手遅れだぜ？今の気分はギア2したゴム人間。尾獣化した人柱力。燃えてきたぜ……チル力が俺の味方な限り、無様な姿を見せられようかつ！？いや見せるワケがなあいつ！！

「チルカーツ！！このバトル、お前のために戦うぜーッ！！」

天井に向かって拳を突き上げ、力強く宣言する。チル力本人はというと、顔を真っ赤にしてほっぺを両手で隠すようにしてすごい勢いで首を横に振っていた。フツ、照れた姿もかわいいぜチル力……
……照れてるんだよな？嫌だから首振ってるワケじゃないよな？信じてるからな！？

『ははは……では両者、ポケモンの準備を！』

むっ……まあいい。負ける気がしねえぜ！

「頼んだ、キリキザン！」

「よろしい。ならば消し炭だ！始めるぜキュウコン！」

投げたボールはそれぞれの手から離れ、軌道を描くように空中を滑り、次の瞬間、俺とダイゴのポケモンが飛び出す。キリキザンか。

なら、最初の読み合いはこっちに軍配が上がったみたいだな。

「よっしゃー！下剋上してやろうぜキュウ」……」

ン、と呼ぶ前にただならぬ気配を感じた。あれだよ、よく言う殺気
つてヤツ。ソースは目の前のキュウコン。こっちをめちゃくちゃ睨
んで、

『なに？なんなの？あなたが入ったボール落としたくせになぜそ
こまでエラそうなの？そもそも誰が私を呼び捨てにすることを許可
したの？消し炭？消し炭にしてほしいの？ねえどうなの？バカなの
死ぬの焼き肉になりたいの？』

すごい。ここまで意思疎通できたの初めてかも！。

「……すみませんでした、キュウコンさん」

結局いつもの呼び方に戻すと、よろしいと言わんばかりに目線を前
に向ける。キュウコンさん、なんて凛々しいお方……。ちなみにキ
ュウコンさんのことをさん付けで呼ぶのはチルカと同じ理由で（以
下略）。

『それでは……四天王ダイゴ対Fクラスクロマのバトルとなります

「形式は1on1のシングルバトル！両者、準備はよろしいですね！？」

目の前に佇む、優雅なしっぽを波のように動かすキュウコンさんを見る。調子はバツチリ、戦意も申し分ない。

「ええ。問題ありません」

「オーケー。運試しとしようか」

アリーナが静まり返り、緊張の糸が張り詰めていく。厳かな雰囲気が見場を満たし、誰もが固唾を飲んで見守る中。

「——始めッ！——」

審判の合図を皮切りに、バトルの火蓋が切って落とされた。

vol.13 ほのおとやいば(前書き)

週一ペース…もっと早くしたいですね…。

審判の合図と俺の指示、さらにダイゴの口が動いたのはほぼ同時だった。観客の声援に負けないよう、声を張り上げる。

「頼むぜキュウコンさん！《ほのおのうず》！」

「行くよキリキザン！《つじぎり》だっ！」

波のように再び歓声が広いアリーナに反響する中、相対するポケモン2匹が動きを見せた。

2匹のポケモンの距離は決して少ないものじゃない。広いアリーナをいっぱいに使っているため、今ダイゴが指示した《つじぎり》のような接触タイプの技をするとなれば、まずは距離を詰めないといけない。それも俺のアドバンテージだ。《ほのおのうず》のような放出タイプの技なら距離を詰める必要はない。

猛進、という熟語がピッタリ合いそうなほどの勢いで迫るキリキザンの行く手を阻むように繰り広げられた火の渦潮。キリキザンの弱点であるほのおタイプの技だ。強弱の差がハッキリしてるとはいえ、当たってくれば継続ダメージも合わせてそこそのダメージを与えられるだろう。

「キリキザンっ！斬り臥せてくれ！」

でも、まあそう簡単にはいかないのがさっき言った強弱の差ってやつでして。俺のキュウコンさんが起こした渾身の炎は、キリキザンの手首にある尖った刃物に文字通り切り裂かれ、その怒涛の勢いがあつという間に燃えカスになっていく。弱点のタイプ一致の技でさえあつさりと地に臥せる始末。やっぱし石マニアでも四天王か、とまざまざと痛感させられる。

「そのまま《アイアンヘッド》！」

《ほのおのうず》を斬り臥せ、キリキザンの体のあちこちに突出している刃物が届くインレンジに、キュウコンさんを捕捉する。今回使う刃物は、その頭から突き出ている一際鋭利な刃。動かないキュウコンさんに向かって、後ろに大きく頭を引き付ける。ガラリ、と頭の刃物が不気味に光ったと思った時。自分の秘める攻撃力を余すことなく発揮するように、頭突き的要領でキュウコンさんに勢いよくぶつけた。

吹き飛ばされるキュウコンさん。なんとか着地は成功したっぽいけど、だいぶ効いたせい結構辛そうだ。タイプ一致とはいえ、相性は決しているものじゃないはず。そのくせにここまで体力を持っていくなんて、キリキザンの攻撃力、いとあさまし（驚き呆れる）。

でも、まあ、今はその攻撃力を利用させてもらっけだな。

「……っ！？どうしたキリキザン!？」

我を忘れたように千鳥足のキリキザン。まるで酔っ払ったような、さっきのキュウコンさんとの距離を詰めたとは思えないほど危ない足取りだ。もちろんキリキザンは酒を飲んでいたワケじゃあない。この症状は――

「混乱……まさか、あの時!」

そう。混乱状態。キリキザンは今まさに混乱という状態異常に陥っている。ただバトルするだけでは、四天王と学年最下層のFクラスの勝敗なんて目に見えてる。キュウコンさんには悪かったが、初撃の《アイアンヘッド》を“わざと”受けさせたのは限りなく0に近い確率を引き上げるためだ。

《アイアンヘッド》という技は、早い話が『鋼の頭突き』だ。頭突きを成功させるためには、当然相手の場所や動作をしっかりと見る必要がある。今回はそれを利用してもらった。

キリキザンが《アイアンヘッド》を決める直前。キュウコンさんに混乱を誘う技を指示しておいたのだ。あやしいひかりいや、指示しておいた、というには語弊があるかもしれない。なにせ、この学園に入ってから一度も使っていないものの、この攻撃パターンはずいぶん昔から使ってきたのだ。

――手始めに放出タイプの技を出して相手を威嚇。接近してきた

ところを《あやしいひかり》――

飽きるほど使ってきた攻撃パターンだ。わざわざ指示するまでもなく、キュウコンさんなら打つべき初手をちゃんと理解している。

おっと、グズグズしてらんないな。

「さあ〜て……ギャンブルの時間だぜ？」

自分のポケモンが混乱状態になった以上、このバトルの優先権は俺の手に移った。ここからギャンブルの始まりだ。俺とダイゴ、どっちの運気が勝ってるかってな。

「手始めに景気よくいくか。《ニトロチャージ》！」

キュウコンさんの体が炎を纏い、そのまま仕返しとばかりに目の焦点が合っていないキリキザンへ突撃、弾き飛ばす。なすすべなく地面に倒れるキリキザンを見下ろすキュウコンさん（目が殺人鬼）の四肢から炎が溢れる。どうやら堪忍袋の緒が切れたらしい。キレる十代って怖いよね。

《チャージビーム》よろしく、《ニトロチャージ》は技後の効果に目をつけるべき技だ。纏った炎がブースター（推進器的な意味で）の役割を果たすため、素早さが1段階ランクアップする。格上の相手なら、せめて先手だけはものにしたいからな。

「おしつ、次だ！《おにび》っ！」

キュウコンさんの目が嗜虐的に光る。こええ……キュウコンさんマジパネエっす。

キュウコンさんの口元に、今までの赤い炎とは異なる黒い炎が吹き上がり、吐き出される。黒い炎は人魂のように塊となり、ふよふよと敵に向かって空中を漂ったかと思いきや、ヨロヨロと立ち上がるキリキザンに纏わりつくように直撃。直接ダメージがないため、再びダウンするようなことはなかった。

「くっ、まずい……！」

ダイゴの表情が苦痛に歪む。無理もないことだ。混乱に、さらに火傷という状態異常の上塗り。俺がキリキザンだったらもう諦めること必至だな、あはは。

だけでも。残念ながら俺はキリキザンじゃないし、まだ運試し（ギャンブル）の真っ最中ってワケで。

「わりいな。今日は割増しツイてるみたいだぜ？キュウコン！（ギロツ）……さん！《ほのおのうず》！」

調子に乗ったらそっこーで釘を刺すみたく睨まれた。ちょっとくら

いいじゃないッスか……。

2回目の正直、《ほのおのうず》。さっきはものの見事に真つ二つにされたが、今度はそうはいかない。勢いよく逆巻く、さながら火炎の竜巻がキリキザンを襲う。激しい炎がキリキザンを中心に包み込んでいくのでよく見えないが、炎の中でもがき苦しんでいるのがわかる。混乱、火傷、さらに継続ダメージ。

ようやく勝機が見えてきたと思った、その時。俺が昨日引き上げたパラメータ【空間認知力】が不穏な動きをキャッチした。

なんだ？と疑問に思った時には遅かった。

キリキザンを中心に渦巻いていた炎が、こっちに迫ってきていた。

「は……ッ!？」

つい素っ頓狂な声が出てしまったが、その理由は少し考えれば明白だった。封印のお札が取り払われたように、ついにキリキザンの混乱が解けたのだ。

「ちっ!キュウコンさん《だいもんじ》っ!！」

少し焦ったみたいだが、気を取り直してすぐに命令に従ってくれた。室内温度が局地的に高まり、手に汗握る中、再度吹き出された炎がアリーナ内の気温をさらに引き上げる。キュウコンさんの口から放

たれた、業火とも呼べるほどの灼熱の塊が大気を焼き焦がし、駆け抜ける。一直線に、炎の竜巻——キリキザン目掛けて。

しかしその瞬間、鋼の刃を赤々と燃え上がらせたキリキザンが炎の壁を突き破り、目の前の脅威に果敢に走り寄る。その威圧感とくれば、凄まじいものがあつた。

「キリキザン、《つばめがえし》っ！」

ダイゴの言葉が耳に響いたと同時に、キリキザンの姿がブレる。灼熱が起こす陽炎のせい、ではない。瞬発力を極限まで使い、フルスピードにまで達した速度で閃いた鋼の刃は、

「——斬り臥せるんだッ!!」

迫る業火を、立ち尽くす標的もろとも斬り払った。

午後の学科別の授業（見せしめバトル）も終わり、放課後。午後の授業が2時間しかないので、クルメア学園の放課後はそこそ長い。自由時間を多くして、生徒の独自性を育てるのが学園の意向らしい。考えてるのかめんどくさがってるだけなのか……テキトーさが目立つ学園なのには変わりはないな……。

太陽光が大いなる大地を焼き、悠久なる風が吹き荒ぶ（ナガレ談）
午後、俺はそんな天気なんて関係皆無な校舎内で案内をしていた。誰のかは言うまでもない、ドジっ娘属性、リリネサンだ。ぷくく〜と膨れっ面の仏頂面で俺の後ろをついて来ている。え、膨れっ面しながら仏頂面って……結構器用ですねリリネサン……。

「……どうしてあなたが案内役なんですか」

「や、まあクラスであんだけ騒いだら知り合いつて思われるのは普通だと思うぞ？それにウチのクラスの男子よりマシだと思うけど」

「うつ……あ、あの人たちなんですかっ！？人の顔見て叫びだすし乱闘騒ぎになるし授業では1人残らず居眠りして廊下に立たされてたしっ！バカ……じゃなくて、え、えっと……頭の弱い人ばかりじゃないですかっ！！」

素直にバカって言うていいと思うぞ？事実だし。

「実際バカの集まりみたいなクラスだからな！。今年は例年よりバカが集まってるって言うてたし」

「あなたも居眠りして立たされてた人の仲間じゃないですかっ！」

「むっ……そういうリネサンだって同じFクラスじゃんか。それこそ動かぬバカの証拠なのだよ」

「ば、バカじゃないですっ！最初の試験で全部の名前を書き忘れただけですからっ！」

え……自慢できるようなことじゃないと思う……。違うベクトルのバカだな、こいつも。世界にはいろんな種類のバカがいるもんだなあ……。

「……なんだかすごく失礼なことを考えてませんか？」

「そんなことないって。バカにしては鋭いなーくらいだよ」

「え……ま、まったくもう……」

照れるリリネサン。

………

「……ってバカじゃないです！？失礼なこと考えてるじゃないですかっ！」

「ああ……悪かった。撤回するよ……お前は鋭くない。鈍い」

「そ、そこを撤回しないでくださいっ！よ、喜んで損でしたっ！」

ぷいっとそっぽを向くりリネサン。どうしよう、主人の言うことを聞かないポケモンに見えた……。

「まあまあ。機嫌直してくれよ。ほら、あちらが図書館、向こうに見える建物が体育館、そしてこちら2-Cでございます」

「見なくてもわかりますっ」

取り付く島もないとはこのことか……いや、確かに今までの俺の態度は軽薄だったかもしれない。前々から直そう直そうとは考えてたけど、結局ほったらかしにして……それがきつといけなかったんだ。そのせいでリリネサンの機嫌を損ねてしまったんだ。もつと、いや、もう少し早くこの性格を直しておけば、きつとリリネサンとも仲良くやれたはずなんだ。

……いや、まだだ。まだ間に合う。誠意だ。俺にないのは誠意。今、それを見せればリリネサンもきつと理解^{わか}ってくれるはずだ！

「……あの、さ。確かに今までの俺の態度は……その……悪かった。そう思ってる」

立ち止まって謝罪する。後ろにいるリリネサンは何も答えない。

「……それで、その……これからは態度をできる限り改めるからさ。だから」

振り返りざまに頭を下げる。

「じゅめんっ!」

……

.....

..... 反応がない。この場にいないようだ。

「どこいきやがったクラアアア——ッ!—」

なんて痛い子だったんだ俺はっ! 空気!? 空気に謝ってたのか俺! ? 大体リリネのヤツどこ行った! ?

「おーいリリネサーン。怒ってないから出てきてオイデヨウ……」

「あ、ああっ! もうっ! どこ行ってたんですかあ! ?」

ミイイツウウケエエタアアッツ!!

「あなたがどこかに行ったせいで『この街……綺麗ですね。私、こういう空気のいいところ……結構好きなんです』って空気に喋りかけちゃったじゃないですかああ——っ!—」

…… ひょっとして似た者同士? 殺気がマッハの勢いでしぼんでいく

のがわかった。どうも似たようなことがリリネサンの方でも開かれてたっぽい。

「はあ……なんか疲れた。もうさっさと回ろつよ」

「あつ、待ってください。ここの窓って開けていいんですか？」

「ん……はい、どうぞ」

カラカラと（ポケモンの意味ではない）窓を開けると、悠久の風（笑）が入って来る。窓に身を乗り出して風にたなびく髪を抑えているリリネサン。……そんなことしてもバカというレッテルは簡単には剥がれないよ？台無しですね、わかります。

「……いいところですね、ここは。ポケモンがたくさんいそうだし、緑がいっぱいだし」

「ああ……緑化都市って言われてるくらいだからな。元々ここは緑だけが取り柄の田舎でさ。そこにこの学園が建てられて、それから中心街ができて……まだまだ緑は残されてるけど。まあ外から来た人間には珍しいかもな、ここまで緑だらけだと」

「……嫌いですか？この街」

「……………？なんで？」

「そんな風に聞こえたから、です」

嫌いか……………か。いや、どちらかと言えば好きだ。シロナがいて、ダイゴやナガレ、チルカがいて……………この学園は、街は好きだ。

俺が嫌いなのは……………

「……………しいて言うなら……………森、かな……………」

「森……………ですか？それは緑が嫌いってことですか？」

「……………どうだろう。俺にもわかんないな」

「……………ひどい人ですね。まさか、森林伐採とかに喜んで賛成したりする人ですか？」

……………別に緑がなくなればいいって訳じゃない。俺が緑を嫌うのは……………森の冷たさを知っているからだ。

森の裏側。それは、暗くて、冷たくて、恐ろしくて……俺はその側面を2年に渡って感じ続けてきたんだ。そのせいか……今でも森に入るのは若干の抵抗がある。簡単に言ってしまうえばトラウマだった。精神的外傷。裏側の森は、俺の心に深く深く……時間をかけて、深い傷を残した。

「……それともう一つ、聞きたいことがあります」

「ん、なに？」

「あなたはさっきの試合で……自分のポケモンにわざと相手の攻撃を受けさせてましたよね。混乱させるためとはいえ……それってどうかと思います」

ああ、あのときか……。

「あなたは……ポケモンに悪いと思わないんですか？そこまでして勝たいたいんですか？」

「勝ちたいね」

即答。そりゃあバトルは嫌いだ。だが、それとこれとは話がまるで違う。

「悪いとも思わない。俺たちはそんな他人行儀じゃないし」

「……………っ」

「俺のポケモン、結構おもしれーヤツばっかださ。まあ苦手なヤツもいるけど。それで、バトルでは俺の命令に従ってくれる。それは俺を信じてくれてるからだし、認めてくれてるからだとも思ってる」

……………それに、こんな傷モノの自分を受け入れてくれてるんだとも。隣の窓を開けて、同じように身を乗り出す。風が気持ちよかった。隣を見ると、リリネサンはこっちを凝視している。

「それなら、さ。そいつらと一緒に勝ちたいって思うのは当然じゃないか？」

軽薄な男子には……………こんな答えしかできなかった。自分のことながら、思わず笑っちゃうや。

「……………っ！」

ばっ！と身をひるがえすリリネサン。心なしか顔が赤い気も……………え

えー……やっぱりダメだったのかね……。

「や……やっぱりあなたとは気が合いそうにないですっ！それより早く行きましょう！」

つかつかつかと一人で歩き出すリネサン。今度は俺がその後ろについていき、やがて階段に。どうやら上に行きたいらしい……が、油断してはいけない。こいつの属性……それはっ！

「きゃ……っ！」

ドジっ娘である。

「キャッチっ！」

階段から降ってくる（空からじゃなくて残念とか思ってたないよ）リネサンを受け止める。ほんと危なっかしいドジっ娘だね……。

「あ……っ！……ごめんなさいっ！……け、ケガとかないですかっ！？痛むところとかはっ！？」

「うえ！？だ、大丈夫だって。ビビったじゃんか」

ばっ！といつものにぶちんからは想像もできないほどの素早さ（種族的な意味では以下略）で俺から離れ、怒涛の勢いで謝るリリネサン。な、なんだなんだ？

「あ……す、すみません……。えっと……案内の続きしてもらえませんか？」

「あい、了解」

その後、リリネサンの案内役を無事果たし、自分の城に帰っていったのだった。

「——ふっ」

205号室。男子寮ならクロマの部屋だが、女子寮ではリリネの部屋がこの番号の部屋になっている。日はとくに沈み、辺りは暗い夜を月が照らしていた。電気を消してもなお、青白い月光が差し込み、幻想的な空気を醸し出している。

シャワーを済ませ、パジャマに着替えたリリネは濡れた赤毛の髪にタオルを被せ、わしゃわしゃと水気を取る。ほこほこという湯気が立ちながらも、彼女の顔色はすぐれない。やがてテーブルを前にして座り込み、置いてあるモンスターボールをじっと見つめ……口を開いた。

「……クロマ」

この学園に来て、初めて出会った同級生。人見知りがちな彼女にしては、その後すぐに嫌われることになってはいたが、初対面から打ち解けることができた珍しい生徒だった。

「……友達、かあ……」

彼の性格その他もろもろは気に入らなかったが、彼のポケモンに対する考えにはとても共感できた。突き放すような言葉になってしまったが……心の中では、ものすごく澄み渡るような感覚だった。

「……ねえ。作ってもいいのかな……？」

——こんな私でも。傷つけることしかできなかった私でも……友達を作っていいのかな。

普通の人とは違った雰囲気を持つ彼——クロマ。その様子に、彼女は惹かれたのかもしれない。この人なら、大丈夫だと……感じ取ったのかもしれない。

語りかけたモンスターボールが応えることはなかった。

薄い雲が月を覆い、差し込んだ月光はほどけるように消えていった。

部屋に残ったのは、暗い夜だけである。

vol.15 ぼーいあんどがーる(前書き)

ポケモンは絆うんたらじゃなくて頭で戦うもの。そう考えてます。

……来てしまった。恐れていた時刻が。

現在深夜11時、自室にて。メシも済ませ、シャワーも済ませ、後は布団にくるまって寝るだけ。電気を消しても月の光が差し込む自分の部屋は、風呂上がりのせいか各部屋に設置されているベランダ……てか外より若干気温が高い。それでも最近は衣更えの期間も過ぎ、少し肌寒いくらいなので過ごしやすいと言えば過ごしやすいんだけど。それに、気温が高いのはなんとなく落ち着くし。

雲間に月が重なったのか、部屋の明るさが透けていくように暗くなる。そんな些細なことにも、俺はビクツと背中を強張らせていた。言わずもがな、ここ数日に渡って続くユーレイ事件のせいだ。俺はすっかり疑心暗鬼に陥り、頭から毛布を被っていた。

「ううう……リリネの案内で何の準備もできなかった……くそつ、あのドジっ娘め。今度会ったらヤツの行く先にバナナの皮を仕込んでやる……」

言っと思って。俺ちっさいな。しかしそんなバカなことを言ってもしないとマジで怖い。最初は手首を握られて……次は夢で出てきて……最後に金縛り。あれおかしいな。だんだんエスカレートしてる気がしない？

「うぐ……思い出さなきゃよかった……」

今までの経験を反省するために振り返ってたらもつと怖くなった。誰かが過去を振り返ってはいけない、と言ってたことを思い出した。まさしくその通りだったよちくしょう。こういうとき、隣に誰か1人でもいれば少しは落ち着くんだろうけどなあ……ルームメイトのダイゴは相変わらずだし。話し相手が欲しい……切実に。

「あつ……そうだ、ケータイ……！」

声を潜めてケータイを手取る。いや声潜める意味はないんだろうけれども。こういうときってなるべく音は立てたくないよね。

「ダイゴ……はどうせ圏外だろ。よし、シロナだな」

別にシロナに迷惑かけるとかいまさらだし。電話帳のさ行の1番上に登録してある『しろな伝説』私は黒を突き通す』をプッシュ。なぜこんな形で登録したのか当時の俺にめちやくちゃ興味が湧いた。

ブルルルル……ブルルルル……ガチャ。お、出た出た。まだ寝てなかったみたいだ。よかった。

「ういつす、シロナ」

『……すう……すう』

……前言撤回。バッチリお眠りなさってた。え、あるえ？どうやって電話取ったんだ？

『……うにゃ……なによお……クロマあ……』

「あ、やつば起きてたん？」

『……えへへえ……くろまあ……』

猫撫で声。や、やべ。かわいい……。

『右目か左目……どっちかあげるう……』

「それなんてバイオレンス!？」

何の目!? 目だけって怖くね!? かわいって思っただろ秒前の俺をぶん殴りたくなったよちくしょう!

半分寝てるだけあって思ったことをそのまま口に出してるらしい。
おお、この状況……使えるっ！

「よし、恋バナといきますか。シロナさん、今好きな人は？」

『……クロマ』

え……ま、マジか……？

『……なんかじゃあ……ないんだからねえ……』

「寝ボケツンデレ！？」

萌えの新境地を最前線で切り開くシロナさんだった。

「えーっと、じゃあ好みのタイプは？」

『……ゴーストタイプ……』

「……ユーレイ、ですか……」

ポケモンじゃないんだからシロナさぁん……。

「じゃあ将来の夢……は知ってるし、性格……もツンデレだし……あ、ご趣味は？」

『……クロマってえ……見てるだけで……おもしろいのよねえ……』

「俺観察かよ」

『……文献読んどるとお……すごく楽しいのよねえ……』

「バアさんかアンタ」

『……最近欲しいのはあ……ごみ箱お……』

「安いわ、お前」

つかそんなくらい用意しとけよ。

『ねえ……くろまぁ……?』

「うん?どうしたよ」

『……今日のバトル……おつかれさま……』

「……おう。サンキユ」

『……かつこよかった……かもね……』

「ははっ、ここでもツンデレかい」

『……やり方がえぐくてみんな引いてたけどお……』

「……は、はははっ。俺のバトルは奥が深いのだ……」

『女子の目が……すやっ』

「なに!?!女子の目がなに!?!そんな怖い目で見られてたの!?!」

明日登校したとき下駄箱に赤札とか貼られてるんだろうか……。

『……でも……安心して……？』

「え……？」

『ダイゴ×クロマって……女子で人気だから……』

「聞きたくなかったあああ——っ!!」

夜遅くになにを叫んでるんだ俺は……いい近所迷惑だ。

「シロナー。そろそろ切るぞー？」

『……ねえ……くろまあ……』

「はいはい、なんで『ざいましよ』」

『ありがとつねえ……』

「…………へ？」

『助けてくれて…………ありがとう…………』

「……………」

それっきり、規則正しい寝息が聞こえてきたので俺は電話を切った。

……………そっか。あの森にいたことは……………無駄な時間なんかじゃなかった……………ってことかな。なにせ、シロナと会えたんだし……………

「……………って、なに考えてんだ俺は」

何はともあれ、シロナのおかげで恐怖心は晴れた。これならぐっすり眠れそうだ。

（こちらこそ、ありがとな…………シロナ）

強い抱擁感の中、俺は目を閉じた。抱きしめられているような感覚が俺を包み込んで…………

…………抱きしめる？

「…………え…………？」

抱きしめられてるのに…………肌寒い…………？

「…………ち、直接接觸…………がく」

俺は気絶した。

「……………」

朝、目覚めだけはよかった。特に体の異常は見当たらない。快調の
一歩手前くらいだ。

（体調が悪けりゃ、学校サボれるんだけどなあ……………）

むくりと体を起こす。寝起き特有のだるさがあってもいつも以上に
ベッドに固執するということはなく、しゅしゅと登校の支度に勤し
むのだった。

……………ダイゴのやつ、ちゃんと寝てんのかな？

「お？」

「あ」

学園に到着し、校門をくぐったところに偶然にもリリネに出会った。
効果音はばったり。

「…………おはようございます」

「おはよーさん。どう？学園には慣れた？」

「や、昨日転校したばかりなんですけど…………そんな簡単に慣れる
はずないです」

「そうだけどさ。ポケモンの特性にも『てきおうりよく』ってのが
あるくらいなんだぞ？」

「私はポケモンじゃないですっ」

「リリネサンの特性はきつと『たんじゅん』だな。もしくは『ふゆ
う』」

「飛んだことなんてないです！？そんな人がいたら怖すぎますから
っ！」

「それもそっか。でも性格が『ドジっこ』なのは決定ね」

「ど、ドジじゃないです！好きで転んでるわけじゃありませんっ！」

人はみな、それをドジと呼ぶ。でもまあ、今思えば男子寮と女子寮
がほとんど目の前だから偶然会っても不思議はないか。1年のとき
はシロナと登校することも多かったし。2年に上がってシロナが四
天王に選ばれてからは、そんなことは滅多になくなっちゃったけど。
そうなるとやっぱり淋しいものがあるな。

「……………」

「……うん？どしたの？リリネサン」

「……な、なんでもないですっ。早く行きましょっ」

顔を伏せて視線を地面に下ろすリリネ。赤い髪が重力に従って、こ
つちから見ると顔を隠すように垂れているのでリリネの表情がよく
わからない。じろじろと遠慮なしに見ていると、

「し、」

「し?」

「しつこいですっ。……クロマ」

……クロマ。呼び捨て。

「……ケンカ売ってるってことは……」

「あるわけないですっ!!」

弾くように顔を上げて全面抗議のリリネ。いやいや、昨日あんなに
嫌われてたのにいきなり呼び捨てにされたら普通ケンカ売ってるっ
て思っんじゃないの?ソースは俺。だってナガレを呼び捨てにする
たびにケンカ売られてんだもん。それが楽しいんだけど。

「そっか……じゃあ俺もリリー・フランキーって呼ぶことにするよ。よろしくフランキー」

「そんな名前じゃないですっ！それに呼び方が変わってるじゃないですか！？」

「だってほら、長いじゃん。だからフランキー」

「長いからってそっちで呼ばないでくださいっ！」

「あれ？クロマ……と、誰？」

和気あいあいとフランキー……じゃないや、リリネと話しながら生徒玄関、教室までの廊下と歩いていると、相変わらぬ煌めくような金髪の女子生徒に話しかけられた。シロナだ。

「あ……え、えっと……」

「よーシロナ。こちら、リリー・フランキーさん。フラムって呼んでやって」

「ち、違いますっ！あの、新しく転校してきた、リリネって言いま
す。その、よろし……」

「ああ、転校生？Fクラスなのよね？あたしもFクラスなんだ」

「あ、そうなんですか？Fクラスって……あの、男子ばかりの……」

「そうそう。今まで女子1人しかいなくて……これからよろしくね、
リリちゃん」

「え、り、リリちゃんって……」

「ほら、リリネ、だから、リリちゃん。あたしのこともシロナって
呼んでね」

……なんつーか。

「順序ねーのな……2人して」

俺の言葉にシロナは笑い、リリネは俯いたのだった。

ホコリが迎える教室に入り、ニシムラがSHをさくつと終わらせる。
1時間目は……国語か。

「あ……っ。やべ、宿題やってねー」

確かプリントをやってこいっていう内容だったはず。どうせすぐに終わるだろ。

1問目は……漢字か。カタカナを漢字に直しなさい。『犯人がいると思われる建物をシサツする』。これは簡単だ。『視察』で間違いないだろう。

ぎゃーぎゃーとクラスメートの笑い声叫び声鳴き声なんたらかんたらがやかましい教室の中、流れるように鉛筆がわら半紙の上を滑る。だが、初めこそすらすらと書けたものの、中盤に入るなり難易度が上がっていき、ついには鉛筆の動きが止まる。

「なーリリネサン。プリント見してくんない？」

「……む……っ。ダメです。クロマ、そっいうのは自分でやらないと意味ないんですよ？」

「またまたそんなこと言っちゃってー。ほんとはやってないんだろ？俺の予想ではプリントをせんべいと間違えて食っちゃったところだな」

「あー、あるあ……いやないですから！ちゃんとやってあります！ほらっ！」

ばっ、とかばんの中から引っ張り出してきたプリントを突き出すように見せる。どれどれ……？

カタカナを漢字に直しなさい。

『犯人がいると思われる建物をシサツする』

答え……刺殺

なかなかの狂暴性を秘めた回答だった。

「ふふん、どうですか？」

「……さーと……んじゃシロナ、プリントやった……っていねえし。四天王の仕事か……。じゃあダイゴは……ダメだ。石見てトリップしてやがる……」

「……このクラスって、変人が多いですねー……」

あなたもその仲間だと思いますけどねー。

「仕方ない……十中八九やってないだろうけど、ナガレに賭けてみるか……ナガレ、俺はお前を信じてるぜ……っ！」

ナガレのやつがいない隙にガサゴソとやつのかばんを漁る。思ったより整理がなされていたのが意外だった。プリント類の入ったファイルを見つけ、パラパラめくっている内に目当てのブツを見つけた。

「バカな……っ！？やってある……だと……っ！……!?」

「あー………信じてたうんぬん言ってたの誰ですか？」

カタカナを漢字に直しなさい。

『犯人がいると思われる建物をシサツする』

答え……視殺

さすがの出来としか言いようがなかった。

「うわぁ……」

持っているプリントを覗き込んでいるリリネが呆れの声を上げる。
いや、どっちかっていうとあなたもナガレ側の人間ですから……。

今日も今日とて、Fクラスのメンツはバカばかりだった。

vol.17 さんになめ

正午の刻限が蒼穹の深みと舞風の清みと共に来たる――。

秋の陽気が穏やかな平和を契約する中、その因果の鎖を断ち切った者共が互いの尊厳を賭け――

「バスター・ウルビアル！リベレイショオオオンッ！！」

「ランターン！レッツギャンブルッ！！」

激しい火花を散らす、熱い情熱を燃やす、大地のビートを刻む、絶戦が繰り広げられた――！！

「ゴー！ウルビアル！！跳ベエエエッ！！」

「フッ……甘いな、ナガレ。砂糖だけで作ったケーキより甘いゼナガレッ！！」

「な、なんだとッ！？俺の相棒の究極技が効いてねえってのか……
グランド・オブ・アースタイヴ
！？」

「これが絶対的な戦闘力の差ってヤツさ……もう諦める。故郷にはお前のおっかさんが、お前が正気か心配しているだろう……？」

「……それでもッ！それでも俺はアアッ！！」

「ッ！？この力はッ！？」

「全てを捨てても——負けられねエツ!! 食らえ……ッ!!」
《グレイヴ・アポカリプス》——「!!!!!!」

ナガレの溢れる情熱とリンクしたワルビアルが大地を踏み締め、膨大な力と共に跳び上がる！風を斬り、太陽を背負ったワルビアルは――！

……何事もなく、着地した。

「つてふざけんあ——っ！！！」

ぱしーん、ぱしーん。

「あ、回数数えた方がいい？じゅういち、じゅうに、じゅうさん、」

「んなこと言ってるじゃねえよっ！お前さっき『決着、つけようぜ……デュエルだ』って言っただろうがっ！？」

ぱしーん、ぱしーん。

「や、正確にはバトルだけど」

「そう言われて来てやったってのに……なんで『縄跳び』なんだよお——ッ——！」

「にーじゅさん、にーじゅよん、にーじゅ、」

「聞けエエエ——ッ——！」

昼休み。俺とナガレは日だまりの下、校舎裏にてバトル（と称した遊び）をしていた。ナガレは文句を言ってるけど、これだってれっ

きとしたバトルだ。大事なのはバトルを楽しむこと……やべ、俺今悟り開いたわ。

「大体テメエのポケモン浮いてんじゃねえかッ！勝てるワケねえだろ！？ギャンブルになつてねえじゃねえか！それに砂糖だけで作ったケーキってそれただの砂糖だろ！？ケーキの要素が見当たらねえよ！！あと自分の息子の正気を心配するって心配するところが違うんだよオ——ッ！！クソがッ！！」

「あ、ごめん。聞いて……たけどもつかい言ってくんない？」

「……………」

ぜーはーぜーはーと激しく酸素を求めるナガレ。それでも縄を回す手を止めないとはさすがである。ビキビキとこめかみ辺りに浮かび上がる血管が非常に男らしい。きゃー抱いて。だが断る。

「でもさ……こんなにいい天気なんだぜ？ポケモンだって主人とゆつくりしたいって思うんじゃないか？」

「……………ああ？」

「ほら、ナガレって昼休みはご飯食べた後はいつも教室にいるじゃ

んか。それじゃあワルビアルもさみしいだろ？」

「……お前」

「だから、かな。……ほっとけなかったんだ」

「……フツ、余計な真似を……」

「あとナガレで遊びたかったから」

「やっぱ表出るテメエツ!!」

外にいるのにこれ以上どうやってここから表に出るんだろうね。あとランターン、『暇なんですけど』って顔で《でんじは》出すのやめて。ワルビアルに効かないから。俺にめっちゃ食らって手とかビリビリしてきたから。そこにシビれるっ！リアルな意味で。

「ケツ！付き合いきれるかっ！」

「なんだ……逃げるのか？」

「……ア？なんだと……？」

ナガレの目の色が凶暴性を秘めたものへと変わる。凄みを効かせてくるせいでその雰囲気は殺伐としたものへ移り変わる。縄さえ回していなかったら保育園のツンデレお兄さんで見られることもなかっただろうに。

「確かに縄跳びなんてモンはガキのお遊戯だ。認めてやるよ。だがな……それは回すスピードがチャチいからさ。……回転速度。それが一定の境地に達した時……」

「まさか……《ライトニング・マッハ》……！？」

「それだけじゃねえ。それだけだったらただのワルだ。真のアウトローが目指すのはその先……！」

「限界への挑戦ってワケかよ……。いいぜ、アウトローじゃねえか……！」

ワルビアルが『え、マジで！？ちよ、待ってくださいよアニキ！』
みたいな目してるけど気にしない。

「いくぜ……っ！うらあああああっ！……」

「おらあああああつ!!」

パシパシパシパシーン!と猛スピードで回る縄。それに合わせて跳びまくるワルビアル。思いっきりあくびしてるランターン。

「マツハだぜ……!今の俺は間違いなくアウトロー……いや!ネオ・アウトローだぜえええつ!!」

「ネオ・アウトローだぜー!」

「うははははっ!パリラパリラー!」

「パリラリパリラー!」

さらにスピードが上がる縄。必死に跳ぶワルビアル。とうとう寝だしたランターン。

どうしてこうなった。

放課後。

「やあクロマ！今日はビューティフォー！な日だね！強襲科に転科したって聞いてクイックリイに飛んできたよ！君は僕が認める数少ないスチューデントだからね！」

「ははは……嬉しくて涙が出るや……」

今日の強襲科のカリキュラムは飾麗科^{エクレシア}との合同だ。飾麗科はコンテストバトルのトップを目指す者も集まる学科なので、そういった戦闘練習みたいなこともカリキュラムとして教わっている。強襲科と違うところは訓練ではなく練習、ということだがあまり大差ないように感じる。美しさを競おうと、バトルはバトルだ。経験を積みめば相当の武器になる。

その飾麗科のトップが学園四天王の一角の座についている。名前はミクリ。みずタイプのエキスパートであり、二つ名『^{ヴェルタンディ}水皇』と呼ばれる人物だ。その溢れる才能でコンテストバトルなら敗北を味わっ

たことはないという実績を持っているが、聞いての通り変人である。改めて言おう。変人である。バトルの才能がどうして世間一般の常識に回らなかったのか甚だ疑問なところだ。

「さあ、時間がもつたいないよ！今すぐ始めよう、クロマ！君の實力……しかと見せてくれ！そして僕の美しい姿を感じてくれ！」

「ぜひともお断りします」

「あー……クロマはミクリと組むのかー。じゃあシロナ、僕と組まないかい？」

「あー……そうね。どうせ今日は飾麗科の人たちと時間いっぱいバトルだけど、私は入ったばっかだしね」

ちよつと、俺も俺も。俺も入ったばっかなんだけど。てか目を見て話してくれない？しかもそのだんだん遠ざかっていくのがすげー傷つくんだけど。押し付けられた感がビシバシきてるわ。

仕方なくミクリと向き合ってみる。水色の髪と白いベレー帽を始め、ヒラヒラしたベールのような服を着ている。改造制服だろう。ちなみに俺は改造を加えていない至って普通の制服だ。裁縫が苦手というワケではないのだが、シロナ、ダイゴ、ミクリみたいな改造の域を超えた改造はさすがにできない。めんどくさすぎる。

正直、ミクリは苦手だ。端正な顔立ちからダイゴと同じくファンクラブができるほどの人気を誇っているが、ほとんど女子のクラブ。いざ話してみるとこれがまためんどくさいのなんの。常にテンションのメーターが振り切れてる感じだ。そのせいでミクリに、俺の口癖は『ちよつと落ち着け』という微妙なキャラ付けをされてしまった。この学園ってほんと変人が多いね。

怒涛の勢いで湧いた、帰りたいという衝動をなんとかこらえ、俺はミクリに向き合った。

「ソー！トレビアンー！！」

心がくじけそうだった。

vol.17 さんになめ(後書き)

原作に追いつきました。これからよろしくお願いします。感想お待ちしています！。

「さあ、エキセントリックなバトルにしよう！クール・フローゼル！Let's Party!!」

まだ準備してないのにポケモン出しちゃったよ……もうヤダこの子。

……決めた。このバトルは全開でネタに走ってやる。将来ギャンブラー（NEET）なめんなよwみたいな感じでやってやつからなあ！！後悔すんじゃないぞ！？はアン！？（893睨み。防御力は下がない）。

で、だ。相手のポケモンはフローゼル。確かミクリが持つてる中で断トツのかつこよさを誇るとか言ってたヤツだ。……あれ、バトルにこんな情報いらねえじゃん。なんて役に立たない情報だろう……。気を取り直して、ミクリはみずタイプをメインに手持ちを編成しているため、対策し放題だ。それならこっちは……

「棺桶にブチ込んでやんよオッ！！デスカーンおねっしゅーす」

ボールが開き、エジプトにありそうな棺桶が出てきた、と思いきや

黒い影のような手が伸び、2つの目が赤くギラリと光る。ちなみにこのデスカーン、結構気に入ってるんだよね。戦闘スタイル的に。

そしていつのまにか周りを囲んでいる生徒諸君。だからお前らも訓練をしろと……いや、もういい。

「では、先手はいただくよ！フローゼル、クールに《アクアジェツト》――！」

水を身に纏い、ミサイルのような勢いで突撃してくるフローゼル。やはり飾麗科といえど、四天王に属しているところからダイゴやシロナクラスの実力を持っているようだ。さて、キメ顔で向かってくるフローゼルの対処はどうすっぺか……。

「うん。やっぱ《あやしいひかり》だわ」

ポワポワ……とデスカーンの周りに淡い光が浮かぶ。怪しげな光はフローゼルを包み込み、リアル水の砲弾の勢いはデスカーンに直撃した。が、俺のデスカーンは、というより一般のデスカーンは防御力がアホみたいに高いのだ。水の砲弾？んなもん所詮は水だ。堅牢な棺が水ごときで壊されてたまるかってんだ。

さて、準備も整ったし……ギャンブルの時間だ。ここからはずっと俺のターンだぜえっ！ヒヤッハー！！

「デスカーン……《のろい》。フヒヒヒ……恐怖のどん底に突き落としてやんよおー!!」

「おっとそれはまずいね！フローゼル、《こつそくいどつ》でシャープに回避！」

(…ダ) ふえ？

避けられた。

(。ダ)……

《アクアジェット》↓水を纏う↓《あやしいひかり》で攻撃↓纏った水で反射↓意味無し↓樹海

《のろい》↓相手混乱してなかった↓外した↓体力半分持ってた↓樹海

カシャカシャカシャ……チーン。

＼(＾o＾)／俺オワタ

「ノオオオウウウツツ!!」

魂の叫び。つ、詰んだ……！現実には打ちひしがれたところに、

「フローゼル！ナイーブに《いやなおと》だよ！」

頼みの綱である鉄壁の防御力も下げられました。

クロマくん、終了のお知らせ。

「くそっ！くそおっ！！ごめん……ごめん！デスカーン！俺が……俺がちゃんと《あやしいひかり》と《のろい》と《おにび》と《メロメロ》を当てとけば……ちくしょおおっ！！」

地面に拳を打ち付ける。「えぐいわね……」とか聞こえた気もするけどスルー。くそお……俺は……こんなにも無力だったってのかよお……。

諦めてんじゃないわよお！

その時だった。恰幅のよさそうな中高年のおばさんの声が……俺の頭に響いた！

「その声は……デスカーン……！？」

そうよ！アナタのポケモンであるアタシがまだ諦めてないのに……トレーナーであるアンタが諦めてどうすんのよお！！

すげえいいこと言ってるけど、なんか声だけでいろいろ台無しなんですわ。

「そう……か……。……わかった。わかったよデスカーン！俺、諦めへんから！僕は負けましえーん！！ギャンブルが……トウキダカラー！！」

そこでようやく顔を上げ、すぐさま戦況把握にかかる。冴えた頭が歯車を廻すように再稼動する。開いた瞳は闘志の炎が燃え、全身には力が漲みなぎっていた。無力を噛み締め、地面に這いつくばっていた非力な俺は……もう存在してはいなかった。

そう……デスカーンが教えてくれたんだ。

——諦めない心が、勝利を導く。と——

戦況把握にかかった瞬間、フルボッコにされたデスカーンが目に入った。どうみてもただの幻聴です。本当にありがとうございます。

目の前が真っ暗になった。

気がした。

その後、テンションの差が月とスッポンどころかミロカロスとヒンバスほどありそうなテンション差でその日の合同訓練はお開きとなった。

さて、死ぬかな……。

放課後。死に場所を探しに学園を徘徊するという快晴の天気も台無しな行為に明け暮れていると、ズドドド……！と血走った目の女子の大群がやってきた。そういえば昨日シロナに聞いた話だと、ダイゴをあんだけフルボッコにして（最終的に負けたのは俺だったけど）ファンクラブに何もされなかったのは……ちょっと俺がダイゴのファンクラブに人気だったから、って寝ボケシロナが言ってたなるほど。つまりミクリのファンクラブの方々には俺は人気ではないと。

回れー右っ。

「ダアアーツシュツツ！！！！」

身を翻して速攻トップスピードで走る走る。昨日に続き、今度は女子を敵に回してのリアル鬼ごっこが幕を開けた。最近こんなのばかりだな……え？死に場所を徘徊？ははっ、なんのことやらサッパリだぜ。

『よくもミクリさまを！！』

『万死に値するわっ！！』

『すなわち1万回死なす！！』

『殺しなさいっ！！今すぐにつ！！』

『『『『おお——っ！！』』』』

「ひいっ！！明確な殺意を持っていらっしやる！？」

捕まったら骨も残されないほどの拷問を受けそうだな。だが、所詮は女子。トップスピードを維持している俺についてこれないらしく、見る見る内に俺と女子との差は開いていく。はんっ！余裕だぜ！

「ハッハー！この腐れビッチが！せいぜいミクリの尻を追っかけてやがれー！」

あ、これってまさか死亡フラグ？反省も後悔もしてますごめんなさいごめんなさい。

『『殺せエエエ——ッッ！！』』

「いやああああっ！！」

皆さん、女子として大事なものを失ってませんか？確かに足は遅いが、どうも地雷を踏んだらしく地獄のゴルゴンばりにしつこく追いかけてきそうだな。こうなったら俺が取れる手段はただ1つ。自分の部屋に帰ってほとぼりが冷めるのを待つしかない。登校拒否はこうして形成されるのであった。

「つつても……まずは身を潜める場所探さねえと……！！！」

曲がり角をうまく使い、女子軍勢の目から逃れる。隠れ場所とは言うものの……そんな都合のいい場所が……

あった。

「ビニールハウス……か」

なかなかのデカさを誇っているビニールハウス。なるほど……スモークがかかっているし、隠れるにはちょうどいいかもしれない。俺はビニールハウスの入口に足を伸ばし、内部へ侵入した。ちよつとスネーク気分。

中は一面植物だった。手前の方は野菜と書かれた立て札が、奥まで行くと花と書かれた立て札があり、緑で埋め尽くされている……という表現が合いそうなほど花や野菜などが植えられている。デカさからして空中庭園と言っても差し支えなさそうだ。家庭菜園ならぬ、学園菜園……みたいなものだろうか。中は植物がひしめき合っているせいか思ったより狭く、成長を調整しているのかそこそこ暖かい。昼寝でもできそうな場所さえあれば毎日来たいくらいだが……。

そんなことを思っ^て中をさまよっていると、植物越しに生徒が見えた。あっちもこちらに気づいたが、追いかけて来ない辺り自然保護^{バトナー}科の生徒が植物の成長を診ているんだろう。

「追われてる身なんだ。力を貸してくれ」

1 回言ってみたかったセリフシリーズ第2弾。しかもノリがいい生徒でグッ、と親指を突き出してくれた。顔は見えないけど、こいついいヤツだな。

と、そんなときだった。ドタドタと音を立て、大人数がビニールハウスにやってきた。ミクリのファンクラブの女子だ。息を殺し、視界に入らないような場所に隠れる。なんで俺がこんな目に会ってるんだろ。学園の七不思議ばりに不思議だ。

『ねえあなた！こっちにふてぶてしい目の腐った見るだけで人を不幸に陥れるような男子生徒来なかった！？』

人知れず俺は泣いた。

『……知らない。私の知り合いにそんな人はいない。出てって』

『ここには来なかったのね……！次の場所へ行くわよっ！』

どたどたと足音が遠ざかっていく。そっかぁ……おれ、見られるだ

けで人を不幸にしそうなんだぁ……おれ自身がめちゃくちゃ不幸な
気がするんだけどなぁ……

と、ジメジメと陰鬱なオーラを振り撒いているところに、撫でられ
るような感覚に頭が優しく包まれた。目を上げると、そこにいたの
はチルカ。ちっこいながら母性を感じさせる。

「……俺のために、毎朝みそ汁作ってくれ」

「……!!」

おっと、感動のあまりプロポーズじみたこと言っちゃまったぜ。驚い
たせいか、後ろに跳びすさって赤くなった顔をブンブンと左右に振
っている。不覚にも萌えた。

「すまんすまん。冗談だよ。助けてくれてありがとな、チルカ」

お返しに今度は俺が頭を撫でてやる。顔は赤くなったままだけど、
少し落ち着いたみたいだ。

「本気になってしまうところだった……」

「悪かったよ。それより大変そうだな、自然保護科は」

そうでもないぞ、と今度はゆっくりと首を振る。ふむ、確かにこの広さの菜園を一人で管理するのはちと骨だろうが、自然保護科はチルカ一人じゃない。同じ学科の生徒と共同でやってるんだろう。

「とっても楽しい」

笑顔でそう言ったチルカからは、確かに嫌々世話をしているようには見えない。チルカはなにげにベジタリアンだし、興味も相当持ってるんだろう。好きこそもののなんとやら、ってことわざもあるくらいだしな。

くるりと身を翻したチルカがとてとと離れていく。かと思いきやこっちに振り返って手を振る。俺についてこい！と言いたいらしい。

俺はゆったりと腰を上げながら制服についた土を払い、菜園の奥へ向かうチルカの跡を静かに追った。

Vol.18 みずのおうじさま（後書き）

感想待っています！

胸を逸らして誇らしげに歩くチルカ。俺はその跡を追ってこそいるものの、けだるくゆったりとした足取りだ。チルカには悪いが、正直俺の中では帰りたい気持ちでいっぱいだった。

それというのも、さっきまでは切羽詰まっていたせいで気づかなかったのだが、あまりにも緑のにおいが濃いのだ。切り取られた密閉空間にまんべんなく植物を敷き詰めれば、そりゃむせ返るほどの緑のにおいが充満するワケだ。緑が嫌いな理由は先刻ご承知の通り。はつきり言って気分が悪い。古傷が疼くように、トラウマがえぐられる感覚がする。

むせ返る、緑と酸素と水蒸気。残念だが、お気に入り登録の件は破棄せざるをえないかもしれない。

「……くろま？」

「いや、なんでもない」

足取りの重い俺が気になったのか、やっぱりとてとてという効果音

がついた小走りで近寄り、名前を呼んで首を傾げるチルカ。ちょっと鬱になってたかもしれない。目の前の小動物を抱きしめて心の保養をしたくなつた俺は悪くない。

ぐるりと周囲を見回す。改めて見てみると、くさタイプの小さいポケモンもいた。居心地がいいせいだろう、その行動は生物の生きるための本能に則っていると言える。つまり俺のチルカを抱きしめたいという思考も自分の消費した分の栄気を養うためなので生物として本能に則っていると言えるために補充しない者は生物として終わりを迎えているのであつて俺は決して悪くないうんたらかんとらと、Fクラスもびっくりなバカ極まることを考えていたときだった。

所在なさげにぶらぶらとしていた手の、その片方を握られ、決して強いとは思えない力で引つ張られた。ふと前方（やや下方修正）を見ると、俺の手を繋いでずんずんと進むチルカの姿が。小さい手の平は強く握るだけで壊れてしまいそうだ。きゅ、と握ってくるチルカの手の平を痛くしない程度に握り返す。いつでもどこでも紳士は崩さないのさ。

まあ本音は、

（なんて役得……ッ！！）

断言しよう。俺はロリコンではない。チルコンだっ！！Fクラスもドン引きのバカっぷりである。

でも自分で自分をバカだと冗談を言えるくらいには気分はよくなっていた。おいやべえよチルカ100人いればこの世から戦争なくなんじゃないね？……マジでゾロアーク（メタモンも可）99匹用意しようかな。

「到着」

ほのぼのと和んでいると、不意にチルカから声をかけられた。少しトンドた意識を戻して前を見ると、ビニールで覆われた世界の中で唯一の木製の壁、木製のドアがその存在感を表していた。

「どうぞ、いらっしやいませ」

カチャリ、と制服から取り出したファンシーなアクセサリーがついた鍵を差し込み、ドアが開かれる。

「……………うわお……………」

中は一面緑、というワケではなかった。天井はスモーク状のビニールではなくガラス張りとなっており、さんと暖かい日差しが降っている。地面は隅まで芝生で覆われ、中心に一本の大きな樹木とその下に設置されたキッチン台、石で固められた水路以外に存在す

るものはなかった。小さな体育館程の広さだが、不思議とそれ以上の広さがあるように思える。

「チルカさんの秘密基地ってワケだ」

俺の言葉に嬉しそうに頷くチルカ。いまだ手を繋いだまま、樹の下まで歩み寄り、手を離して俺は芝生に寝っ転がった。

「ああ……こりゃ気持ちいいな……」

どうやらお気に入り登録破棄の件は要再検討の必要がありそうだ。気がつくと睡魔が忍び寄ってくるのが自分でもわかった。

「くろま」

ん？と目を開けると、そこには視界いっぱいに広がった……りんご？

「あーん」

「……あー……んっ」

口を開けるとみずみずしいりんごが放り込まれ、しゃり、と歯に碎かれる。甘さが口いっぱいに染み渡り、ああやばい……マジで寝ちまいそうだ。

咀嚼が終わり、のどを鳴らして碎いたりんごを飲み込んだときには、俺の中の睡魔は手遅れなほど侵食してしまっていた。

俺が目を覚ましたときにはすでにチルカの姿はなく、ラップに包まれたりんごが月の光を浴びて光っていた。

「そう……またなのね」

クロマが目を覚ます少し前。夕日が差し込む一室にて、一人の少女が赤い光をバックに、目の前の生徒からの報告に耳を傾けていた。

その部屋には座り心地のよさそうなイスがU字の木製テーブルに均

等に分けられている以外、少女の目の前のパソコン以外に何も無い……という訳でもない。黒を基調としたインテリアなどが飾られ、この部屋を見た者が貧相だ、と口にすることはない程度に豪華だった。

報告を終えたらしい生徒が部屋から去る。その一刻後、少女は小さく呟いた。

「でしゃばる杭は……打っておかねばね」

その口元が妖艶に歪められる。冷たくも、人を惹きつける笑み。少女の目線の先には、パソコンの画面がこの学園のとある男子生徒を映し出していた。

顔立ちに幼さが残る黒髪の少年、クロマその者を。

「おおダイゴさま……！！後光が……っ！後光が差しとるんやー……！！！」

「いや、今真夜中だからね、クロマ」

その日の夜。俺は久々の部屋でのダイゴとの邂逅に打ち震えていた。毎度おなじみユーレイ騒動である。毎度おなじみ？そんな日課なぞゴミ箱にダンクシュートしてやりたい。スリーポイントシュートでも可。そうじゃないとただでさえシロナにムリヤリ強襲科に入られて身体的に参ってるっていうのに、精神までやられたらマジでヤバイ。チルカが必要なくらいヤバイ。

で、こうなったら自分なりの対策でも立てるしかねえ……というこ
とになり、まず真っ先に浮かんだ『寝ない』という選択肢を実践す
ることにした。今日は木曜日。明日がキツいけど、明後日は休みな
んだ。今日は昼寝もしてちょうど眠気もなかったし、いざじんじょ
うにー、というところでダイゴが帰ってきた。おい、ダイゴお前タ
イミングって言葉知ってる？食べられるものじゃないからね？

だがしかし、この機を逃すつもりもない。そんなワケで、ダイゴに

事情を説明、協力を要請していたところだった。

「ふむ……」

とはいうものの、あの穏健なダイゴといえど半信半疑といった様子。無理もないか……

「クロマの話を聞く限り、イタズラ好きのゴーストポケモンではなさそうだね。彼らは姿を消すことが可能だけど、夢に出てくるような力は持っていない。となると、必然的に犯人の的は絞られてくるけど、それでもまだ頼りない。ひとまず、相手が何者なのかはさておき仮に人の霊として何か対策を……ってクロマ？ 苦しいよ」

「ダイゴ……おれ、おばえのごと大好きだ……！」

石好きの変人とか思ってたてごめんよう……。

「ま、まあそんな感じで対策を立てればいいんじゃないかな。役に立たなくて申し訳ないけど」

「いやいやいやいや。もうダイゴさんマジ最高。おっしゃあっ！もうユーレイなんて怖くねっぞお！」

隣の部屋からうるせーぞ！的なニュアンスの怒号が聞こえた気もするけど、そんなの気にならねーぜ！持つべきものはやっぱり友達だな、うんうん。今日のミクリとの試合前のことで正直株下がってたけど。

「……………あ、そういえば、あの人なら……………」

「うん？どの人？」

「少し心当たりが……………いや、やっぱりやめておこう。とりあえず、クロマが立てた対策を施してみなよ」

「や、気になるんだけど」

珍しく歯切れの悪いダイゴ。その様子が俺の好奇心をくすぐる。てかあんなフリされれば誰だって気になるわ。

「いや、やめておくよ。少し気難しい人でね。早い話、変人に分類される人種なんだ」

お前がそれを言うか。

しかし……………石好き以外は至って常識のあるダイゴが言うなら相当の

変人だろう。これ以上変人の知り合いを増やしたくない俺にとって敬遠したい話題だ。

「ま、言いたくないなら聞かないさ（本音：変人の相手は疲れる）」

「すまないね……いざという時、いつでも取り次ぐよ」

「おう、さんきゅ」

「それじゃあ頑張つて。おやすみ」

「おう、おやすみ」

パチリ、と電気を消してベッドに横たわるダイゴ。連日の石採りで疲れていたのか、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきた。暗闇が迎えられ、一人ポツンと二人用の部屋で佇む俺。

……うん。

……せーのっ。

「お前は寝るんかいっ!!」

……ユーレイとの握手も、なかなか悪くなかったかなっ！

次の日の朝。

「あ、きたきた。クロマ！ダイゴ！」

「って、どうしたんですかクロマ？その顔……いつも以上にひどいですよ？」

「ケンカ売ってんのか……」

「おはよう、シロナ。リリネさん」

寮の門の前でシロナとリリネに合流する。というのも、朝食を取りに寮の食堂へ訪れた際、偶然シロナたちと鉢合わせし、今日は四天王の仕事がないから一緒に登校しよう、と誘われた……らしい。詳しくは知らん。みんな知ってた？ 気絶って睡眠に入らないんだってさ。俺はここ最近身をもって知った。

ともかく、そういった理由でシロナの提案にダイゴが快諾、今に至る。

「寝てないんですか？」

「言葉の意味の問題かな。ベッドには寝てる」

「睡眠、ちゃんと取ってるの？」

「バッチリだ。むしろ昏睡してると言っていいい」

「それ逆に危ないんじゃないかな……リリネさん、シロナ、実は……」

かくかくしかじか。ちなみに漢字に変換すると斯斯然々。

「ユーレイ、ねえ……」

「ユーレイ、ですか……」

「その『嘘くせー……』って顔やめて。これ以上追い込まれたら何かに目覚めそうだから」

「僕も最初はそう思ったけど、本人を見る限り本当のことみたいなんだ」

「……あれ？今サラッと裏切られた気が……気のせいだ。気のせいだと信じよう。」

「誰かさんのせいで強襲科入って身体的にもキツいつてのになー。あー理不尽だ」

「賭けに負けたアンタが悪いんでしょ」

正論すぎて涙が出てくらあ……。

「ははは。ああ、そういえばリリネさんはどこの学科に入るんだい？まだ志願書は出されていなかったはずだけど」

「わ、私ですか？えっと……まだ考え中で……」

「強襲科はどうだろう？リリネさんになら全てを任せられる」

「そして僕は石採りに行くんだ！ルンルンルーン」

「石採りバンザイ！ルンルンルーン」

「ルンルンルーン！！」

「……え？これ私も続かなきゃダメなんですか……？」

シロナもダイゴもFクラスに侵食されている今日この頃。

「冗談はともかく、リリちゃんが入りたい学科に入ればいいと思うけどね。救護科アンビュラスとかいいんじゃない？」

「投与する薬間違えて大変なことになりそうだな」

「探偵科インケスタとか」

「個人情報うつかりばらまいて大変なことになりそうだな」

インフォルマ
「情報科とか」

「機密事項流出とかで大変なことになりそうだな」

「私が行く先では絶対大変なことになるんですか!？」

自覚なかったのか……。あれやこれやといろいろな案が出てくるが、どうもリリネのお気に召さないらしい。ふう、と息をつき、鬱屈とした気分折をつけて俺は提案した。

「自然保護科。あそこなら、俺の知り合いが面倒を見てくれる」

「……知り合い？クロマ、そんなのいたの？」

まあな、とあいづちを打っておき、リリネの顔を伺う。

「ええ……クロマの知り合いですか？」

「ねえ、今リリネさん結構人を傷つけるような反応してるってわかってる？わかってないよね？天然でなんでも許されると思ったら大間違いだぞこんなにやるー」

「まあ、わからないでもないけどね。ちなみにクロマ、その知り合いついていうのは？」

「ダイゴ……てめーは俺を怒らせた……。まあいい。後輩で面倒見のよさそうな奴に心当たりがあつたからな。いらないつていうならこの話はなかったことに……」

「い、いらなんなんて言つてないじゃないですか！会っただけ会つて、そのあと決めますっ！」

リリネ は そつぽをむいた！

「ま、いいけど。つーかシロナ、あとダイゴ。四天王の仕事がないつて、最近忙しかったんじゃないのか？」

「ん、まあね。でも一区切りついたから。やっぱり雑用の一人くらいほしいわよねえ……」

「ああ、それはわかるけど……でも、あの人に仕えられるような特

殊な人は……」

「むー……」

「……何の話でしょうか？」

「……さあ。仕事に悩める十代ってやつなんじゃない？」

ま、その点俺の将来はギャンブラーだから悩む心配はないけどな。
あえて言うなら生活費くらい。

「……まあいつか。とにかく、今日は学校集会だからそのためにいろいろやってたってわけ。あとリリちゃんの件とかね」

「学校集会？知ってる知ってる。あれおいしいよね！」

「サボったらニシムラ先生にチクるからね」

「外道っ！この外道っ！」

あんな立ってるだけのつまらん集会に出るだなんてやってられっか

ってばよう！

「つーワケで、自由への逃避行の始まり始まり」

「あっ！こらっ！待ちなさい！」

「……シロナとクロマって、仲いいんですねえ」

「仲がいいっていうか……まあ、そんな感じかな」

今日も慌ただしく一日は始まった。

だけど、そのときはまだ誰も知らなかったんだ。

今日この日に、誰にも忘れられない出来事が起こるなんて。

この俺、クロマに激動の変化が訪れるなんてこと――

そのときは、まだ誰も知らなかったんだ。

「な……ッ！？これは、一体……ッッ！！？？」

結局その後、シロナのウォーグルにサクッと捕まり、4人の中で俺だけウォーグルにわしづかみされて低空飛行で地面とサヨナラ状態のまま教室に到着する。歩くのもしんどかったから助かるっちゃ助かるんだが、どうせなら背中に乗せてほしかった。掴まれた肩の痛みと生徒のクスクス笑いでばくもうダメポ。

そんな朝っぱらから被ダメの多い中訪れたFクラスの教室は、まさしく異様な光景に包まれていた。

「ど、どうしたのよ……って、別にいつも通りじゃない」

「いや、よく見る。クラス全員がカメラのレンズ拭いてるとか異様すぎるだろ」

「え、それにしても驚きすぎじゃありませんでしたか？」

「いやいや、感情表情豊かな方が人生にハリが出るぞ？ 実際最近の俺の人生は波瀾万丈だ」

「……出したくないです」

ウォーグルが掴んでいた肩をようやく放し、地面に着地。ウォーグルはそのまま俺の頭に留ま——

「って首もげますからあ——っ!」

ウォーグル、身長1・5 m、体重41・0 kg。

つてか校舎内でポケモン出すのは褒められたことじゃないんだけど……。首を若干気にしながら席につく。俺の前はシロナだし、後ろはリリネ、隣はダイゴとナガラだ。つくづく俺は恵まれてると感じる。

「多分……今日の学校集会のせいじゃないかな」

「学校集会？」

「学校集会ですか？」

「あ……。そういうこと……」

四天王の二人は思い当たるフシがあるのか、腕を組んでウンウン唸っている。学校集会って……4時間目のめんどくさいアレだよな？授業が潰れてラッキーくらいにしか思ってたけど。結構注目されてるイベントらしい。Fクラス連中の様子を見る限り、なかなかオモシロそうだ。

「クロマは何か知ってますか？」

「うんにゃ。なあなあナガレー。何か知らない？」

オモシロイベントとわかったら俄然活気づくのが俺という人種である。まず行動力がすごい。次に頭の回転がヤバイ。やだクロマさんイケメンエ……。

「知るか。ウゼエんだテメエ」

「えー。なーなーナガレー。なななーナガレー、なーなーナガ、」

「ヒップホップ調で連呼するんじゃないっ！！大方、学校集会の生徒会長目当てだろッ」

「生徒会長？いたっけそんな人」

「あの、クロマ？普通の学校でも生徒会長はいると思いますけどー……。あの、有名な人なんですか？」

後ろから慌てた様子で身を乗り出すリリネ。俺みたいに興味があるワケじゃなく、話題に乗り遅れたくないんだろう。

「リリネさん、そんなんじゃないー人前のギャンブラーになれないぜ？」

「えっと……ギャンブラーって一人前になるほど人間ダメになつてく気がするんですけど、気のせいですか？」

「なっ！バツカおめー、ギャンブラーナメんなよ！？負けた瞬間人生終了っていうギリギリ感がいいんじゃないか！」

「クロマ、クロマ。それだったら君の人生はもう3回も終わってるからね？」

そんな事実認めない。ふう、と疲れたようにため息を吐くダイゴ。自然と注目が集中する中、ダイゴはようやく説明を始めた。

「四天王総帥、兼生徒会長。彼女の名前はルーゼリユクス。クロマなら聞いたことはあるかもしれないね」

ルーゼリユクス……聞いたことが多々ある名前だった。というか、四天王のことを知らない奴なんてこの学園にはいないだろう。

ルーゼリユクス。二つ名は確か……『ラストイメイデン 鎗妃』。俺達の先輩に当たる、四天王の中で唯一の3年生女子生徒だ。1年のときから四天王の座に揺らぐことなく居座っていて、そのくせ姿を現すことが極端に少なく、その素性は謎に包まれている。

曰く、学園最強。

曰く、ミステリアス。

曰く、学園を統べる魔女。

などなど、多くのウワサを従えた女子生徒だ。それと、俺は見たことがないんだが……

「その人の人気は凄まじいものがあるからね。特に男子からは熱烈的な支持を受けてる」

そう、シロナに勝るとも劣らない美少女なのだ。なるほど、Fクラス全員が騒ぐワケだ。Fクラスに女子はシロナとリリネしかいないせいで女子に飢えてるのである。

「生徒会長なら学校集会で全校生徒の前に出なきゃいけないからな。神秘のベールってやつがついに剥がれるってワケか」

「はえー……。そんなに有名なんですか？」

「まあ、このFクラスの状況見ればわかるだろ？」

「う……そ、そうですね……。あ、でもナガレさんはカメラとか様子してないんですね」

「フツ……俺は孤独を好む一匹狼だからな……。些細なことで騒ぎ立てるような懐の小せえ漢じゃねえのさ」

「あと……ホモなのさ」

「だからちげえって言ってんだろオオオオオ——ッ！！」

懐の小ささに定評のあるナガレだった。その後すぐにニシムラが教室に入ってきて、井戸端会議はお開きとなった。

「クロマ、クロマ」

「ん……あ？」

「おはよう、クロマ」

名前を呼ばれて目を覚ます。ダイゴには3時間目が終わったら起すように頼んだので、次は4時間目……学校集会だろう。寝不足も相まってチャイムに気づかないくらいに爆睡してたらしい。正直もう少し寝たい。

つていうかなんで爆睡つていうんだろう？爆発する勢いで寝るからなのか？なんで爆発なんだ？だったら人類は夜に寝るときはいつも爆発してるのか？爆弾が枕みたいなポジションなのか？「爆睡しちゃったよ」「え、お前よく生きてるな」的ニユアンスの会話が毎朝飛び交うのか？そもそも爆発以外じゃダメなのか？滅亡とかでもいいじゃん。滅睡とかナガレが好きそうじゃん。大体爆睡って英語にしたらエクスプローションスリープだぞ？必殺技みたいじゃねーか。

滅睡ならデストロイスリープ？なんでそんな危ない熟語にしたんだ？
そもそも――

.....

「クロマー。先に行くよ？」

「はっ.....！やべ、無限ループになるところだった.....」

「うん？」

「や、なんでもない。行こーぜ」

周りを見ると、教室に残ってるのは俺とダイゴ、ドア付近にシロナとリリネだけだった。さすがFクラス。美少女と聞いた時の行動力は計り知れないものがある。とはいっても、全体から見ても俺たちは遅い方みたいだ。

「よし、行くか」

集会は体育館で行われた。

主に体育くらいにしか使われない場所だが、無駄に広いスペースと一目見て豪華そうな内装が印象的な建物。いくら世界中から生徒を募っているといえど、この体育館を満たすにはまだ少しの空間が残されていた。俺の目線の先には、そんな体育館に押し込まれた全校生徒の視線をステージの上で一心に受ける女子生徒、ルーゼリユクスその人が、マイク越しに手に持つ書類の内容を読み上げていた。

『今月の目標は……』

第一印象は、ウワサ通り美少女だな、といったところか。亜麻色の絹のような長髪はストレートに下ろされ、大人っぽい顔立ちやミステリアスな雰囲気、強調された胸に、マイク越しに伝わる美しい声。なるほど、学園の男子が騒ぎ立てる理由がよくわかった。

シロナやリリネ、チルカのようなかわいさではなく、ルーゼリユクス生徒会長には艶美な色香が漂っている。かわいい女子しかないない中に美しい女性的な生徒が一人でも混ざれば、そりゃあ人気も出るだろう。

だけど……

「なあ、ダイゴ。もしかして昨日お前が言ってた変人って……あの生徒会長のことか？」

生徒（主に男子）から熱烈な視線を注がれていた生徒会長が壇上を下りるなり、ダイゴに話しかける。生徒会長が脇に引っ込んだだけで室内温度が下がった気がしたくらいだ。

「うん？ああ、そうだよ。よくわかったね」

「そりゃ、お前の反応が同じだったからな……昨日の夜と」

あんな美人でも変人なのか……惜しい。具体的に何が惜しいかはわからないが、とにかく惜しい。とりあえずキャッチコピーは『見た目は美人、中身は変人！その名は、生徒会長……ルーゼ（略）』で決定だ。

「ま、そこまでオモシロなイベントでもなかったな」

「え？呼んだ？」

「呼んでない。さ、集会も終わりそうだし、早く教室戻ってメシ食
おーぜ」

あらかた進行は終えたらしく、後は細かい連絡を聞くだけ。帰る気
満々にドアに向かった、その時だった。

何者かに口を塞がれ、視界が闇に包まれた。

「——っ!？」

『く、クロマっ!？』

リリネの声がどこか遠いものに聞こえるような感覚がして、そこで
ようやく黒っぽい袋に入れられたことを知る。袋の上から手らしき
もので口を塞がれ、思うように声が出ない。なるほど、黒よりもク
リア ってことか。

…… ってアホかア!?!何コレ!?!何なんコレ!?!インドでカレーと
一緒に食べるのは?ナンナン!

急激なブリザードが俺を襲った。おかげで冷静になれたが、大切な
何かを失ったのは言うまでもない。

「ふっ、丁重に運ぶんだな。俺は君たちが思っているような優しい人間ではない……」

「喋ってる舌嚙みますよ?」

「あ、すみません」

わりと冷静になれていない俺だった。と、俺が謎の集団に運ばれているとき、主にFクラス中心の男子の叫び声が聞こえた。

『『『うおおおおお——っ!!生徒会長おおおお——っ!!
!』』』

それと同時にカメラのフラッシュ音が体育館に響く。どうやら生徒会長が再び壇上に光臨なさったらしい。別段暴れても仕方がないので、俺は生徒会長の話に耳を傾けた。あなたたちに聞いてほしいことがある、という前フリを置くと、静かになった体育館は生徒会長の言葉だけを響かせた。

『最近、身の程を知らない男子生徒が四天王に手当たり次第にバトルを挑んでいる、という報告があったわ。その都度玉砕されているものの、その男子生徒は反省の色もなく、ついに四天王の内の3人にバトルを挑み、ことごとく敗北したという笑い話よ』

バリバリ俺の話でした、まる。

「ちょっと待てえ！俺からじゃな——もがつ！？」

『新学期を迎え、新しく生徒会長に就任した私がこのような事態を看過することはできないわ』

「むーっ！むーっ！！」

大声で否定したやりたいのに、袋の上から再び口を塞いだ手のせいで声が出ない。手足を精一杯動かしても、びくもしない。

嘘だろ？

『という訳で、すぐさま犯人確保のための捜査に取り掛かり、犯人を特定することに無事成功した……今日のこの場は、そんな愚か者の懺悔の場とさせていただきますわ』

嘘だろ！？

『別に水を被せる、などというつまらないことは当然行わないから安心なさいな。そんなものは無意味よ。方法は……そうね。四天王最後の砦である私とバトルして、腐った性根を叩き直すとうかがしら？』

嘘だろおっ！？

俺の必死の祈りは届く気配すら見せない。やがて、俺の口を塞いでいた手が離れ、

『では、愚かなシープの登場といきましょうか。皆の者、彼が無事更生することを祈ってあげて頂戴』

俺を包んでいた黒い袋が取り払われて、

「嘘……だろ……」

全校生徒の前に、俺の姿が晒された。

「フッフ……」

全校生徒の視線が俺へと集中する中で呆然と見つめた生徒会長は、

そんな俺に向かつて不敵に、かつ妖艶に笑いかけるのだった。

vol.22 りふじん（前書き）

拝啓、お母さま、お父さま

この学園に連れてきてくださって、本当にありがとうございます。

おかげで、かけがえのない友達ができました。

貴重な体験もできました。

毎日がとても、とっても楽しかったです。

でも、それも今日でおしまいです。

お母さま、お父さま。

今まで、本当にありがとうございました。あなたたちに育てられたことは、ぼくの誇りです。

そして、さようなら。

ぼくは今日、社会的な死を迎えました。

どうか、ぼくのこの黒歴史のことを忘れ……てください。

それだけが、ぼくの最後のお願いです。

お母さま、お父さま、最後に一つだけ。

こんなぼくを産んでくれて、心からありがとう——。

かしこ

「現実逃避は済んだかしら、2-F所属、クロマ？」

「俺の心は土足厳禁なんですけどね——っ!!」

体育館がざわめく中、俺と生徒会長はステージの上で対峙していた。

『生徒会長の初陣だ!』

『うおーっ!俺初めて見るぜ!』

『会長サイコオ——っ!!』

もうヤダこのノリ。全校生徒?全校生徒が俺の敵なの?さすがに傷つくんだけど。ってかこれ訴訟起こしたら勝てるレベルじゃね?

生徒会長から目を逸らし、最後の良心を探す。チルカいないとヤバい。けっこーガチでヤバい。しかし、チルカの低い身長のせいではなかなか見つからない。それに、いくら全校生徒の大歓声の前にチルカの声が届くはずがないだろう。

完全な孤立。

「……ホント……最近の俺、ツイてないよなあ……」

本当にツイてない。今週一週間で起きた俺の不幸はどれくらいあった？ムリヤリ強襲科に転科させられ、ユーレイに取り憑かれ、フクラスやミクリのファンに追いかけ回され、変な場所に迷い込み、周りが敵しかいない状況で何度もバトルして、そのせいで夜に睡眠を取ることもできなくなって……俺はただ、学園生活を楽しく過ごしたいだけなのに。

腹が立った。

「でも、今のアンタは俺以上にツイてねーな」

「……………。それは、結果が決めるのではなくて？」

「決まってるのさ。“結果”なんてな」

沸騰した怒りが疲れを吹き飛ばす。熱に当てられて煮える血液が激

流を起こす。血が上った頭、脳は理不尽な不幸に打ち克つために。

求めてしまった。

後戻り不可能の、人外の力を。

輝く液体は脳へと上った血液に染み込み……

新たな力と共に——進化を起こした。

「……………」

その瞬間、急速に頭が冷えていくのが自分でもわかった。あれほど嫌っていた能力に頼ってしまったことで、言いようのない虚無感に陥ったのだ。今あるのは純粹な後悔、そして喪失感。今はただ、胸の辺りにぽっかりと空いた穴を埋めたかった。

「son3」

俺の変化に気づいた者はいなかっただろう。たとえ気づいたとしても、悪あがきをやめて静かになったとした映らないはずだ。生徒会長は訝しげな顔をしていたが、すぐに懷からボールを3つ取り出し

た。

「……まあ、私が挑んだということになるのかしらね」

審判らしき人物が生徒会長の残りのボールを受け取る。次に俺の方へ寄り、俺は選んだボール以外を審判に渡す。その間、俺は新たな力の解析に取り掛かっていた。

今回必要な能力は初めての相手とのバトルのためのチカラ。相手のポケモンの繰り出す技に素早く反応し、対抗策を練るチカラ。相手の癖や力量を見抜き、弱点を探るチカラ——つまり、【適応力】と【情報把握力】。その二つが、新たにストックされた俺の能力だろう。

「では、始めましょうか。無事更生することを祈ってあげてよ、2-F、クロマ？」

「上等。分の悪い賭けも悪くはないが、たまには勝利の味を噛み締めなきゃな」

体育館は興奮と歓声で満たされていた。生徒会長が優雅にボールを取り出し、その勢いに拍車が掛かる中。俺は手に持つボールを静かに弄んだ。

「わ、わっ！クロマ、大丈夫でしょうか？調子が悪そうな感じだったんですけど……」

「……ううん。クロマは大丈夫。心配ないと思うけど……」

「あ、そうなんですか？そういえば、相手の方の実力ってどれくらいなんでしょうか？」

「そうだね……多分、純粋なポケモンの強さなら、四天王最下位と言っていていいだろう」

「……はい？じゃあ、四天王の中で一番……？」

「そ。“強い”のよ、あの先輩は。四天王の中で一番ね」

「……え？」

「リリネさん、純粋なポケモンの強さ、と僕は言っただろう？つまり、“純粋じゃなければ、彼女は最強なんだ”」

「……えっと……？どついう意味ですか？」

「そうだね……一般のトレーナーがするのはバトルメイクと呼ばれるものだろう？ だけど、あのルーゼリユクス先輩は違う。彼女の場合は……《バトルコントロール》と呼ぶべきものだ」

「コントロール……？」

「そう、^{コントロール}支配。クロマの言うトレーナースキルとでもいうやつかな。トレーナーの目を欺いたりポケモンの技を封じたり。自分の勝利へとバトルの行方を徐々に、確実に捻曲げていく……彼女のスタイルはとにかく読みづらい。実際、僕も初見では全く対応できずに3タテを食らったよ。あそこまでタイプのハンデをもつともしない人は初めてだった」

「……タイプのハンデって？」

「彼女はどくタイプのエキスパートなんだ。クロマのバトルスタイルも特殊だけど、彼女相手に勝利を収めるには……少し厳しいだろうね」

「うっ……、クロマ、大丈夫でしょうか……」

「……………」

「……あれ？ シロナ、どうしました？」

「……このバトル、3on3ってクロマが決めたのよね？」

「ああ、そういえば……。珍しいね、クロマが1on1以外を申し込むなんて。僕たちには1on1だったのに」

「あ、そういえばそうですね。どうしたんでしょうか？」

「……まさか、ね」

「はい？」

「……なんでもないつ。さ、応援しましょっ！」

「……？」

闇の淵。

凍るような極寒が渦巻く中。吹き荒ぶ降雪が空気を叩く中。

雪の届かない洞窟の奥で、“それ”はうずくまっていた。

岩に囲まれた、水の染み込む小さな洞窟。自然が生み出した自然の牢獄のような場所で、静かな鼓動が冷たさ故澄み切った空気に響く。

外の天候は極度の吹雪に見舞われていた。人の進路を強烈に妨害する自然の要塞の中心。その洞窟に潜む静かな命。

水の滴る音が継続的に響く。心を穏やかにさせる美しい音も、洞窟の外にて鳴り止まない風の轟音によって掻き消される。

それでも水滴が水溜まりに波紋を呼ぶ。そしてまた、もう何度目かすらわらない波紋と音響が生じた。

次の瞬間。

洞窟に投獄されていたはずの鼓動と存在が、露と消えた。

主人を失った牢獄は、構わず岩に水を穿つ。

vol.23 そのもの、まじよにつき

「さあ、出番らしいぜトゲキッス」

「跪くがいいわ。行きなさい、ドクログ」

バトルに集中している証拠に、割れるような大歓声が俺の耳から徐々に遠ざかっていく中、俺は生徒会長のポケモンの解析にかかる。

ドクログ……相性としてはすばらしくこっちに有利だ。俺のトゲキッスはいわゆるなんでも使えるマルチアタック型で、弱点を突くことに特化している。うまくやれば一撃でドクログを落とせるだろう。生徒会長がそれを許すのかは疑問なところだが……

「《エアスラッシュ》だ、トゲキッス。手始めに景気よくいこうぜ」

ひとまず様子を見るとしよう。トゲキッスがくるり、と踊るように宙返りをして生まれる空気の刃。抜けるような青天を思い出させるような空色の刃が甲高い音を発し、標的へと突き進む。当たれば乱数1発、確定2発の抜群の威力を持つ技だが、

「ドクログ、距離を詰めなさい！」

(…………なに?)

ドクログは避けるそぶりどころか空気の刃に自ら当たりに走っていた。《まもる》という手もあるが、距離を詰めるのが目的なら…選択肢は一択に絞れる。トゲキッスが繰り出した技が、ついにドクログを捉えようとした瞬間。

「《みがわり》よ!」

スパン、と標的を真つ二つにする音が小気味よく響き、生徒会長の声が聞こえなかった生徒が息を呑む。だが、空気の刃が捉えたのはただのヌイグルミ。ドクログ本体ではない。真つ二つにされたヌイグルミは煙と消え、ドクログの姿が視界から消え去った。生徒がざわつく中、俺の冴えた頭は空間に存在する異物の位置を探る。

——見つけた。

「上だつ! 《サイコキネシス》!!」

目で見なくてもわかる。トゲキッスの頭上から自由落下するドクログ。エスパ―技ならドクログに4倍のダメージが通る。《みがわり》で体力を削ってる以上、耐えられる道理はない。

まずは1匹――

「フフッ、《どくづき》よ」

「なにっ!？」

ドンッ!と鈍い音がこだまする。それは、ドクログが地面に叩きつけられる音ではなく、トゲキッスがダメージを受けた音だった。逆に地面に叩きつけられたトゲキッスは少々苦しい顔をしながらも、なんとかホバリングを続けている。それに対し、自分の弱点であるエスパー技をもらったくせに、ドクログは苦しむどころか嫌らしいニヤニヤ笑いを浮かべていた。同じく生徒会長も、さぞオモシロいという風に微笑みを続けている。あ、今鼻で笑った。ちくしょう、ムカツク。

いや、それよりもドクログか。8割近く確信してるけど……より決定的なものにさせてもらおう。

「あら、もう終わりかしら？」

「へっ、ご冗談。今から種明かしとさせてもらうぜ?トゲキッス。《はどうだん》!」

俺の命令を受け、体の中心から青い波動を浮き上がらせるトゲキッ

ス。その波動の光が完全にトゲキッスの体を覆ったとき、まさに砲弾の勢いで撃ち出した。ドクロッグには今ひとつの効果だが、別に俺の考えが外れたら外れたで構わない。しかし、予想通り生徒会長の顔からは笑みが消えた。

「チツ、《きあいだま》よ！」

トゲキッスよろしく、今度はドクロッグの体が、こちらは赤い光を纏う。ドクロッグが撃ち出した《きあいだま》は迫り来る青白い波動の砲弾と激突し、大音響と白煙を残して消滅した。

「《しんそく》っ！」

そのまま驚異的なスピードで煙の中へ突っ込むトゲキッス。しばらくして、視界を遮っていた煙が消えたときには、ドクロッグはその姿を変えていた。

「いや……本性をさらけ出した、つつた方がいいかもな。なあ？生徒会長」

「フツ、なかなかやるわね」

ゾロアーク、特性『イリュージョン』。まんまと引っ掛かったって

ワケか……ってこれ初見で見破れるヤツいねーだろ。チートすぎる。つまり、ゾロアークはあくタイプ。《サイコネシス》が効かなかったのはそれが理由だろう。ったく、【適応力】と【情報把握力】を引き上げてなかったら、きっと俺はワケもわからず混乱していたままだっただろうな。決して自分に攻撃とかキチガイじみたことはしない。

「……ずいぶんずつけえことするんだな」

「あら、これが私、ルーゼリユクスが学園を統べる魔女と呼ばれるゆえんよ。幽玄なる魔法をそんな低俗な言葉で片付けないでほしいわね」

「いや魔法じゃねーじゃん！特性じゃん！誰でもできるわそんなこと！」

「失礼なことを言わないで頂戴。口の汚い男ね……前世は猿なの？」

「むしろ前世が猿じゃないヤツを見てみたいわ！アンタの前世も猿だからな！？」

「まったく……口の利き方には気を付けなさい。……それにしても……」

「はい？まだなんかあるんスか？」

（私のゾロアークの必勝パターンが……失敗した？）

あごに手を当てて悩むそぶりを見せる生徒会長。だがそれもすぐのことで、再びこっちに視線を向けてきた。

「まあいいわ。そのうち暴いてみせましょう」

「なんのことだかサッパリなんスけど……」

「少しは骨がありそうね、ということよ。ゾロアーク、《みがわり》
《！》」

突如発生した煙がゾロアークを包み、再びヌイグルミが現れる。ち
いっ！本体は——右かつ！

「トゲキッス！《はどうだ、」

「甘いつ！《ふいうち》よ！」

トゲキッスの体が再び青い波動で包まれる寸前、確かに右から近づいたゾロアーク。しかし、トゲキッスのその動きが、逆に敵のタイプ一致の強力な技を発動させてしまった。体を包んでいた波動は行き場を失って霧散していき、とうとうトゲキッスも目を回して地面に倒れた。

（反応が早い……トレーナーとしての力は四天王も凌いでるわね。
なのにFクラス……）

「おつかれ、トゲキッス。次頑張ろーぜ」

「ねえ、貴方」

ボールに戻す途中、生徒会長ゆ声をかけられた。興味深そう目で俺を見ている……なんだ？

「なんスか？」

「……………。いいえ、なんでもないわ。さあ……次のイケニエを捧げなさいな」

……セリフが似合いすぎて怖いわ。興味深そうってそういうこと？
本気で血とか肉とかすすられそう……。

「……………いけっ！フシギバナ！」

でん、という感じにステージに降り立つイケニ……………フシギバナ。いやほんと、イケニエとか思ってたないから。思っても困とかだから！だから大丈夫！多分。

だがしかし、予想に反して生徒会長は機嫌がよさそうに俺のフシギバナに目を向けた。

「あら……………中の上」

「はい？」

「なんでもないわ。ウッフ……………」

やべえ。マジで怖い。さっさと終わらせるべきだったか……………。

「さ、いくわよゾロアーク。《ナイトバースト》」

「げっ……！フシギバナ！《エナジーボール》！」

ゾロアークを中心に発生した暗黒の渦が波紋のように全方位に拡散する。マズい、広範囲の技は《スキルスラッシュ》が使えないのだ。なんとか威力を相殺するしかない……！

フシギバナの巨大な花から吹き出した深緑の結晶はふよふよと頼りなさげに闇の渦へ向かっていく。凝縮された深緑の玉はやがて闇の渦に衝突し——勢いよく弾けた。

パパパパッ！——という軽快な音が響き、迫り来る闇の勢いを完全に殺す。俺とフシギバナを避けるように闇は俺たちの両脇を通り過ぎ、目の前の闇は取り払われ、生徒会長とゾロアークの姿がその直線上に——なかった。

「や、べ……っ！」

そこにあっただのは生徒会長の姿だけだった。肝心のゾロアークの姿がない。つまり、周りの闇に紛れている、ということだ。

「《とんぼがえり》よゾロアーク！」

左から異物がやってくる気配がする——が、フシギバナには闇しか見えていないだろう。迎撃は無理か……そう思ったとき、我ながら名案が閃いた。効果音はピキーン。

「《どくのこな》だフシギバナ！自分の周りに撒けっ！」

その直後、闇の中からゾロアークの姿が現れる。闇から闇へと飛び移るように、姿を現して、生徒会長の持つボールへ戻る。目で確認するのも困難なスピードで攻撃したゾロアークだが、こっちも一矢報いることができた。

「毒状態。これで自慢の魔法は使えないっすね」

「なるほど……他の3人が目をつけるだけはあるのね。……いや、」

（とっさの判断にも長けているなんて……ますますわからないわね。これほどの実力があれば……）

「さ、次出してくださいよ」

「……クロバット！翻弄なさい！」

ゲ……ッ！なんか空気読めてないやつが出てきやがった……。フシギバナじゃ相性最悪だ。こっちは攻撃は半減、動きは遅い。それに比べてあっちの攻撃は倍増……早い話が、

「いたぶってアゲルわね」

「だが断る！フシギバナ、《ねむりごな》！」

眠らせちまえばこっちのモンだ。ダメージは少なくとも、物量で押し切れるっ！

「甘いわね。そして絶望なさいな。《ねっぷう》！」

「ンなにいつ!？」

フシギバナが撒いた緑色の粉が圧倒的な熱を含んだ突風に残さず焼き尽くされる。それだけに飽き足らず、有効なタイプであるほのおねっぷう技はフシギバナをも巻き込んだ。

ってかそんな技までカバーしてんのかよ！これ詰んでるじゃねーか！

「相性が悪すぎたわね。クロバット、《エアカッター》」

「くうっ！《はっぱカッター》で逸らせっ！」

さっきのような空気の刃が、今度は細かい刃となって裏切りのごとくこっちへ襲撃する。対抗したフシギバナが放った鋭利な木の葉は、その軌道を変えるように負けず劣らず放出されて直撃。逸らす必要はなかったのか、それだけで数多くの刃は霧散した。

初撃は、の話だが。

「ぬぐぐ……」

クロバットのウリはそのスピードだ。素早く頭上に移動して放った2発目の技を防ぐことはできなかった。

「さあ、次で最後ね。もうちょっと頑張ってくれと嬉しいのだけど?。」

「……………」

微笑みを浮かべる生徒会長に対し、俺は複雑な表情で3つ目のボールに視線を落とした。

ふう、と息をつく。

トゲキツス、フシギバナと倒されて残る手持ちはあと1体。それに
対し、あつちは頭数なら3体揃っている状況。誰がどう見ても勝敗
は決まったと思って当然だ。

手に持った最後のボールをまじまじと見つめる。俺の中の喪失感と
ストレスは、残念ながらもまだ消えずにくすぶっている。でも、もし、
この勝ちを確信した相手から勝利を奪い取れば、そんな負の感情は
跡形もなく消し飛んでくれるだろう。

それが、禁忌の解放だとしても。仕方のないことだと、言い訳を重
ねて。

降り積もった不運のせいだと、茶番を演じて。
偶然が続いたのだと、詭弁を論じて。

どれほどの理不尽が積み重なったところで、その憂さを晴らす者の
様など、所詮滑稽にしか映らないのだろう。

それを踏まえた上で、あえて声高に叫ばせてもらおう。

“だからどうした”と。

今この状況がすでに愚の骨頂であると、全校生徒は俺を嗤っているのだ。身の程知らずと蔑んでいるのだ。

今この状況がすでに底辺であるというのなら、もうこれ以上は上がるしかない。それが不可能というのなら、底の地面に穴を開けて奈落の底を目指してもいい。所詮、中身のない俺がポケモンを育てようとしたのが間違いだったんだ。入学当時も思ったことだ。だから、俺は底辺の人間でいい。

故に、俺は禁忌の門扉を開ける。

全校生徒に告ぐ。

これが、2年に渡って自分を描くことを辞めた人間の末路だ。

俺の手にある闇で、アンタら全校生徒を巻き込んでやる。せいぜい恐怖して、底知れぬ闇を拒絶するといい。

俺という人種を無くすために――。

「……なんつって、そこまでシリアスぶることもねえやな」

「は？」

「や、俺はただ、バトルを楽しめばいいんだな、って思っただけです」

「……そう。それは大事なことね」

「すげー大事っすよ」

うんうん、と鷹揚に頷く。そんな、と続けて、俺は手に持ったボールを下投げで放った。

「……………！？」

出てきたのは、まさしく闇。凝集した悪意の塊に劇毒を混ぜたような、混沌とした球状の物体が、比べるなら人間の頭くらいの大きさ

で現れた。生徒からはどよめきや、あげくの果てには悲鳴まで上がっている。失敬なやつだな。これでもこいつとは人生の半分くらい付き添ってるのに。ま、見た目が見た目だから仕方ないかな。

「生徒会長はわかんないっすか？このポケモン。ってか俺の切り札なんすけど」

「……さて、ね。見たこともないわ」

んー、まあそりゃそうか。そもそもここまで姿が変わるとかフォルムチェンジばりだし。

そんなことを思いながらその黒い物体を見る。その物体は、静かに浮遊を続けていたはずが、一転して鼓動するようにうごめきだした。

「な……っ！？」

「そんじゃ、ポケモン図鑑にも載ってるこんなエピソードなら知ってるんじゃないっすかね？このポケモン——」

人の頭部ほどしかなかったはずが、徐々にその質量を変えていく。黒い球状の物体から漆黒の翼が生え、指の変わりに顎がついた両腕が現れ。

「全てを破壊するっていう、伝説があるんですよねえ」

三重の絶叫と、膨大な闇の波動と共に、その悪竜は顕現した。

O O O O O O A a a a a a a ! ! ! ! ! ! ! !
O O O O O O A a a a a a a ! ! ! ! ! ! ! !
O O O O O O A a a a a a a ! ! ! ! ! ! ! !
O O O O O O A a a a a a a ! ! ! ! ! ! ! !
O O O O O O A a a a a a a ! ! ! ! ! ! ! !

魔神、降臨。つてな。

「くう——つ!？」

濃密な暗黒が波紋のように全方位に放たれる。視界が暗転し、目の前が見えなくなるほどの闇が体育館に降り立つ。さらに、そのありえない絶叫が鼓膜を激しく震わせ、脳が揺さぶられる錯覚に陥る。

狂暴ポケモン、サザンドラ。

禁忌の手、俺の切り札である。

「ちっ！《エアスラッシュ》よクロバット！！」

クロバットがそのスピードを活かし、縦横無尽に飛び回って空気の刃を作り出す。このサザンドラにも臆さないとか根性あるな。生徒会長って熱血派なの？

「『グアアアツッ！！』」

サザンドラの一喝で再び殺意の奔流が溢れ出す。その攻撃らしからぬ攻撃は空気の刃を、さながら紙のように捻り潰し、体育館に甚大な被害を被らせる。

ちなみに殺意の奔流を真っ向から受けたクロバットは、それはもう見てる方が痛々しくなるくらいにボロ雑巾を自分の体で再現なさってました、まる。

「……あ、ありえないわこんなこと……」

「あのー、生徒会長、絶賛絶望を噛み締めてるところ悪いんですけど」

「は、はあ……?」

つんつん、とサザンドラを指差す。まだまだ暴れ足りないらしい俺の旧友（仮）は、

「早く次出さないと、体育館吹き飛びますよ?」

3つある口腔をフル活用して、ものの見事に体育館を消し飛ばしていた。

『ぎゃああああ——つつ!?!?!!?』

殺意の波動だか破壊の光線だか、テレビで見ると爽快感溢れるほどに体育館をぶっ壊していくサザンドラ。近くで見るとまさに地獄絵図。やべえ。死人とか出たらどうしようとか本気で思ってるわ。

「こ、このたわけえ——っ!!早く辞めさせなさいっ!!」

「ええっ!?!俺っ!?!」

「その押し付けられた、みたいな反応はなんなのよっ!! 貴方のポケモンなんだから当然でしょう!?!」

「いやいや、無理っすよこんなの! 遠目から見てヒーロー待つのが得策だと思います!」

「だから貴方のポケモンでしようがあ——っ!! いいから命令しなさいっ!! バトルは中止よ!!」

「……………」

「……………なによその沈黙。ちょっと待って待ちなさい嘘でしょう」冗談よね?」

「いや……………だって仕方ないんすよ。進化した途端に言うこと聞かなくなるんですもん……………」

「この阿呆があ——っ!!」

……………結局その3時間後、俺と四天王全員でなんとかサザンドラをボ

ールに納めることに成功したのだった。

体育館を全壊させたこの事件はのちに『四天王カウントダウン』と名づけられ、主人である俺は栄えある『アビスキュルス死神』という二つ名を与えられたのだった。

……後悔？してるよ？反省はしてないけどねっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4928v/>

もしシロナの幼なじみが一緒にポケモン専門の学園に入ったら。

2011年11月13日13時27分発行